第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会

「 最近話題の遺跡・
注目される研究から 」

発　表　要　旨

２021 年9月 19 日（日）

主催：日本貿易陶磁研究会

共催：立教大学アジア地域研究所

第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会
「最近話題の遺跡・注目される研究から」

目次

タイムスケジュール

第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会の開催にあたって
日本貿易陶磁研究会　金沢　陽　1

Ⅰ　最近話題の遺跡

1　博多遺跡群第 221 次調査出土の貿易陶磁
福岡市埋蔵文化財課　岩熊拓人　4

2　神奈川県伊勢原市の中世遺跡
かながわ考古学財団　山口正紀　18

Ⅱ　注目される研究

3　白山平泉寺の貿易陶磁と日本海流通
勝山市教育委員会　阿部　来　42

4　菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器
天草市観光文化部　中山　圭　52

5　陶磁器からみた先島の集落遺跡と琉球帝国
国立歴史民俗博物館　村木二郎　66

6　江戸遺跡出土貿易陶磁器の数量分析　－需要の検証－
東京大学埋蔵文化財調査室　堀内秀樹　78

奥付

※　表紙は博多遺跡群第 221 次調査石積み遺構

第41回日本貿易陶磁研究会研究集会

「最近話題の遺跡・注目される研究から」

ー　タイムスケジュール　ー

9：30（10）　Zoomやチャットの使い方説明
9：40（10）　開催挨拶　金沢　陽
9：50（10）　事務連絡

Ⅰ　最近話題の遺跡

10：00（40）　博多遺跡群第221次調査出土の貿易陶磁　岩熊拓人
10：40（15）　コメント
（切り替え）
11：00（40）　神奈川県伊勢原市の中世遺跡　山口正紀
11：40（15）　コメント

昼食（11：55～）

Ⅱ　注目される研究

13：00（40）　白山平泉寺の貿易陶磁と日本海流通　阿部　来
13：40（15）　コメント
（切り替え）
14：00（40）　菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器　中山　圭
14：40（15）　コメント

小休止（14：55～）

15：05（40）　陶磁器からみた先島の集落遺跡と琉球帝国　村木二郎
15：45（15）　コメント
（切り替え）
16：05（40）　江戸遺跡出土貿易陶磁器の数量分析－需要の検証－　堀内秀樹
16：45（15〉　コメント

17：00（10）　事務連絡･閉会

第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会の開催にあたって

2019 年秋に鹿児島県霧島市における第 40 回研究集会でお別れして以来、オンライン形式ではありますが、久々に貿易陶磁研究集会を開催いたします。

新型コロナウイルス感染症蔓延を受けて、2020 年度 9 月に立教大学太刀川会館で予定した第 41 回研究集会が中止のやむなきに至り、準備いただいた皆様に多大な御迷惑をおかけいたしました。改めてお詫び申し上げます。さらにコロナ感染症の終息が見られない中、19 年度からの延期開催を予定していたテーマ「あの遺跡、再びの共有と展開―貿易陶磁研究 40 年―(仮)」が対面式で討論を深めることに重点をおいていることから、再度延期し来年度開催に向け準備を進めることになりました。このテーマ主宰者の小野正敏前会長はじめ、関係者の皆様の御理解・御協力に感謝いたします。

一方コロナ禍のさなかにあっても、各地の発掘調査・研究、各専門領域の貿易陶磁研究は、休むことなく進行されております。その成果を発表していただき、経験を交流することの意義が大きいことは言を俟ちません。ましてや非常事態宣言などで調査・研究のための移動もままならない中、その要望は例年にも増して大きいと考えられます。そこで今年の第 41 回研究集会は、最近の話題の遺跡や注目される研究6件について、オンラインにて発表をお願いすることにいたしました。発表者の皆様はおそらく予定外のお願いであったでしょうし、オンラインということで普段にない御苦心をいただいたことと思います。世話人一同御礼申し上げます。

今年も、立教大学アジア地域研究所と共催事業として開催いたします。ここ数年対面での研究集会の“本拠地”とさせていただいている立教大学太刀川会館に代わり、立教大学の通信機器、Zoom 会議アカウントなどご提供いただきましたことを心から感謝いたします。

参加者の皆様の御協力で、大きな成果が得られることを期待しております。

日本貿易陶磁研究会　会長　　金沢 陽

第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会

「最近話題の遺跡・注目される研究から」

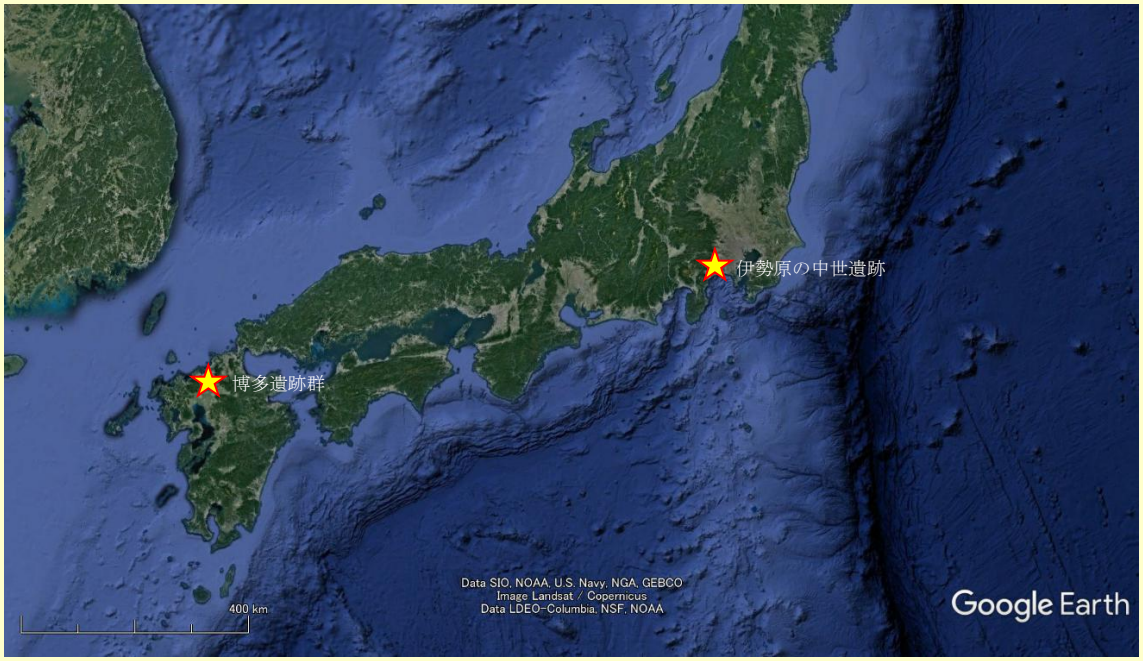
Ⅰ　最近話題の遺跡

・博多遺跡群第 221 次調査出土の貿易陶磁

福岡市埋蔵文化財課　岩熊拓人

・神奈川県伊勢原市の中世遺跡

かながわ考古学財団　山口正紀



位　置　図

博多遺跡群第 221 次調査出土の貿易陶磁器について

岩熊 拓人 （福岡市埋蔵文化財課）

はじめに

国際貿易都市として発展した中世博多には、中国大陸や朝鮮半島から貿易陶磁器を含む様々な交易品がもたらされた。これらは博多で荷揚げされたのちに日本各地へと運ばれたのだが、第 221 次調査で荷揚げの場である港湾施設の一部と考えられる石積み遺構が確認された。11 世紀後半から 12 世紀前半に機能したと考えらえることから、鴻臚館の後を受けて博多が貿易拠点として登場し、都市化した当初である。本発表では貿易拠点としての博多遺跡群を象徴する港湾関連遺構から出土した貿易陶磁特に、白磁および青磁資料を中心に報告を行う。なお発掘調査は継続中であり、統計的な検討等が行えていない。調査、整理段階での特徴を述べるにとどまる点に留意いただきたい。

Ⅰ 遺跡の概要

博多遺跡群第 221 次調査は福岡市博多区上川端に所在した、冷泉小学校跡地活用に先立って行われている発掘調査である。調査の対象面積は 6,800 ㎡で博多遺跡群でも最大規模の発掘調査になる。博多遺跡群は大きく3つの砂丘で形成されており、本遺跡は海側から2つ目の砂丘である博多浜の西縁付近に位置している。

本地点には鎌倉時代末期に西大寺系律宗寺院である大乗寺が建立されている。建物遺構は確認できていないが、寺院内を区画した溝や大乗寺銘の瓦が出土している。また調査地点の南西部で近世墓群が確認されており、約 200 ㎡の範囲に陶器の甕や土壙墓、木棺墓など 300 基以上が確認されている。大乗寺は 1920 年までこの地に所在し、その敷地内にあったためか中世後期から近世にかけて遺構密度は極めて薄い。

大乗寺の建立以前、11 世紀の後半には港湾施設と考えられる石積み遺構が確認されている。石積みの背面には盛り土を行い、地表面を平らにすることで荷揚げ場として機能したと考えられる広場を形成している。その後この地は屋敷墓としての特徴を持つ土壙墓や土師器の一括廃棄土坑が確認されるなど、屋敷の建ち並ぶ生活空間に飲み込まれたと考えられる。

Ⅱ 石積み遺構について

1. 旧地形および石積み遺構の構造

石積み遺構は本調査地点を南北に縦貫する形で検出された。長さは 67m以上が確認され、両端が調査区外に伸びているため、おそらく全長は 80mを超すと考えられる。西に向かって下る砂丘面の前面に築かれたもので、石積み遺構の西面には、四角張った自然石の小口平坦面をそろえてほぼ垂直に積み上げ、高さ 40cm～60cm、幅 1.2～1.6m程度の垂直な石垣状を呈している。また海水面の復元のために珪藻分析を行った結果(1)、石積み遺構は直接波で洗われることはなく、その約6m手前が水際であったと考えられる。このことから石積み遺構は波から陸地を守る護岸というよりも、港という場を区画する役割が強いと考えられる。

石積み遺構の北側から約 25 メートルの部分には、石積みが 1.6mほど途切れる部分がある。途切れた両側面は直線的な面を形成していることから、おそらく出入り口の開口部だと考えられる。開口部には一段程度の階段があった痕跡が確認されている。

石積み遺構の前面には 20cm程度の幅で溝が掘られており、その上から木杭を 20cmほどの間隔で打ち込まれている。杭は直接石に接することはなく、頭がわずかに地表面から確認できる程度まで打ち込まれていることから、石積み下地盤の土留めであると想定される。

これらの石積み遺構の構築技術は前後を通じて日本国内に類例がみられず、中国寧波市の鄞江鎮碼頭遺跡の石積み遺構には、自然石を小口積みするなど共通点がうかがえる。また第 221 次調査における石積み遺構は、石積みを垂直に立てるために石の尻に小石を当てて角度を調節したり、横に並ぶ石列のレベルをそろえたりするなど、石の選び方、据え方に技術水準の高さが認められる(2)。

石積み遺構前面は粗砂と有機質土層が間層を挟まずに、繰り返し堆積していたことから短時間のうちに堆積した洪水層であると考えられる(3)。この洪水層によって石積み遺構の前面は完全に埋没しており、掘り起こした痕跡がみられないことから、洪水後に浚渫されることなく、そのまま破棄されたと考えられる。

2. 年代

石積み遺構の実年代を検討するために有機質土層から出土した木炭や杭などの放射性炭素同位体比による実年代分析を行った(4)。石積みを埋没させた洪水層から出土した資料は 1150 年、1160 年前後の値、石積み遺構より下の有機質土層からは 1000 年、1030 年前後の値を示した。また出土土器も同様の年代観を示している。以上のことから石積み遺構は 11 世紀後半に築かれ、12 世紀前半に機能し、12 世紀後半の洪水で廃棄されたことが確認された。

3. 出土遺物

石積み遺構周辺の出土遺物は当時の貿易陶磁器以外には、在地の土師器や豊前地域の土師器碗、近畿地方の瓦器碗(楠葉型・和泉型)が出土し、広い範囲の国内流通をうかがうことができる。また石積み遺構の前面の堆積からは「通事楊」という文字が書かれた木簡が出土している。貿易関係者の存在を示す資料であるといえる。

石積み前面の有機質土層から、硫黄塊が多数出土している。硫黄同位体比の測定を行った結果(5)大分県の塚原鍋山と九重硫黄山、鹿児島の薩摩硫黄島が産地として想定される。これら産地から集められた硫黄は、火薬原料として輸出するために港周辺に貯蔵されていた硫黄が洪水の際に洗い流されたと推測される。

以上のように博多の貿易拠点としての様相をうかがうことができる多様な遺物が本調査で確認されている。

Ⅲ 出土陶磁器について

石積み前面の洪水層から 12 世紀後半代の指標となる龍泉窯系青磁や同安窯系青磁は全く出土していない。一方で 12 世紀前半の初期龍泉窯系青磁の出土は確認されており、上述した年代に符合した出土状況を示している。以下、石積み遺構の機能した 11 世紀後半～12 世紀中ごろの時期の資料を中心にその特徴を述べる。

1. 白磁について

出土白磁は破片資料が中心である。港湾施設という特性上、荷物の積み下ろしや船内での破損品を廃棄したことが要因であるといえるだろう。具体的な点数の比較はできていないが、他の博多遺跡群における調査と比較しても白磁碗の出土数が他の器種よりも多いことが特徴の一つに挙げられる。

出土白磁の形態においても、旧来の分類と差異のある資料が確認されている。以下、全体の器形がわかる資料に関して大枠に太宰府分類(太宰府市教育委員会 2000)を参考にしつつ説明する。

(1) 白磁碗Ⅳ類

①:高台の削り出しが浅く器肉は厚い。高台畳付けは外面端部が若干浮くなどⅣ類やⅪ類の様相を示す。

一方で口縁部は直口でわずかに屈曲する。内面見込みは大きく段をつけている。

②:高台の削り出しが浅く器肉は厚い。高台畳付けは外面端部が若干浮くなどⅣ類やⅪ類の様相を示す。

直口縁であるが、口縁部に若干厚みがあり、玉縁をイメージしたかのような様相を呈している。①との共通点が多いが、①よりも器高が高く、内面見込みに段や沈線がないなどの差異もみられる。

③:高台の削り出しは浅く器肉は厚い。高台畳付けの幅は狭い。内面は緩い茶溜まり状になっている。口縁は玉縁で、先端が鋭利になっている。体部下半まで施釉される。

④:高台の削り出しは浅く、作りが荒いのか高台幅は不均一である。体部は直線的に開き、口縁は玉縁である。内面は茶溜まり状になる。

⑤:高台の削り出しが浅く器肉は厚い。高台畳付けは外面端部が若干浮く。高台畳付けの幅は狭い。玉縁は薄い。内面見込みは大きくへこみ、茶溜まり状になっている。

⑥:内面は茶溜まり状になっている。高台は削り出しが極端に浅く、低い。高台付近まで施釉され、一部高台および高台内まで釉がかかる。

(2) 白磁碗Ⅴ類

⑦:外面に縦箆花弁文、高台畳付けにまで一部施釉する。

⑧:高台は細く高く直立している。高台から体部にかけてのふくらみが大きい。高台内面にまで均質に施釉される。

⑨:⑧と同様の器形をしている。⑧と同じく高台内面まで均質に施釉される。

⑩:高台は細く高く直立している。⑧や⑨のように高台から体部にかけてのふくらみはないが、高台内面まで施釉されている。

(3) 白磁皿

⑪:高台は碗Ⅴ類を短くした形である。体部は内碗気味に立ち上がり、口縁は外反する。碗Ⅵ類と共通点の多い資料だが。体部の形状から白磁皿としてとらえた。

⑫:高台は碗Ⅱ類と同様のものである。体部中位で湾曲し、口縁は緩く外反する。内面に箆描き文を有する。

⑬:高台は碗Ⅱ類と同様のものである。体部中位で湾曲する。内面は箆描きの輪花を有する。

⑭:碗Ⅳ類と同様の高台を持ち、体部は直線的に開くが口縁部で屈曲する。内面は茶溜まり状の段をつけている。底部外面には花押の墨書が確認できる。

⑮:碗Ⅳ類と同様の高台を持つ。口縁部には玉縁を作らず、段をつけてわずかに外反する。

2. 青磁について

石積み遺構および石積み遺構周辺から越州窯系青磁多数出土している。特に 10 世紀後半～11 世紀中ごろの指標となるⅢ類が多くを占めている。

現在出土遺物の整理が進んでいる第Ⅱ調査区では越州窯系青磁は調査面積 371.7 ㎡から計 380 点出土している。越州窯系青磁の出土量の多さに言及した 85 次調査(大庭 1997)では調査面積 670 ㎡から 328 点出土し、1㎡当たり約 0.49 点となる。一方で 221 次調査Ⅱ区は1㎡当たり約 1.02 点となり、本調査における越州窯系青磁の出土数が突出していることがわかる。

大庭康時氏は 11 世紀前半の越州窯系青磁碗が第 14 次調査地点の東側から南側にかけて比較的多く出土することを指摘し、これを 11 世紀後半の博多の急速な都市化に先行する状況とすれば、宋商人の居住地はまず港の近くから始まったとみてよいとしている(大庭 2019)。港湾施設が確認された本調

査においても、まさに急速な都市化および貿易拠点としての発展に先行する様相を示しているといえるだろう。

おわりに

博多遺跡群第 221 次調査では港湾施設と考えられる石積み遺構が確認され、貿易陶磁器だけでなく硫黄や通事楊銘の木簡など貿易拠点としての様相を示す、多彩な遺物が出土した。

貿易陶磁器に関しては越州窯系青磁が多数出土するなど、博多の都市化及び貿易拠点化に先行する状況を示し、石積み遺構の構築以前の状況がうかがえる。また石積み遺構の機能していた時期の白磁に関しては、従来の分類に差異のある資料がみられ、器種も碗が多いという特徴が確認された。

以上のようにいくつかの特徴を述べてきた。現在も発掘調査は続いており、資料の増加によってより詳細な検討が行えるだろう。今後も調査及び整理作業を行いながら検討を続けていきたい。

筆者と共に発掘調査を担当している、福岡市埋蔵文化財課の大庭康時氏には本発表に際して多くのご指導、ご教授を賜った。

〈註〉

(1)古環境研究所による分析。
(2)北垣聰一郎氏、宮武正登氏の御指導、御教示による。
(3)下山正一氏の御指導、御教示による。
(4)山形大学高感度加速器質量分析センターによる。
(5)東京海洋大学　山中寿朗教授による。

〈引用・参考文献〉

大庭康時　2019『博多の考古学－中世の貿易都市を掘る』 高志書院
大庭康時　2021「博多遺跡群出土の中世初頭の硫黄」『硫黄と銀の室町・戦国』 思文閣出版　147－155頁
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊ＸＶ』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会
福岡市教育委員会　1997『博多57―博多遺跡群第85次調査の概要―』福岡市埋蔵文化財調査報告第522集　福岡市教育委員会
福岡市教育委員会　2021『中世博多の港―博多遺跡群第221次調査出土の港湾関連遺構―』 福岡市教育委員会
森　達也　2015『中国青瓷の研究－編年と流通－』汲古書院
吉岡康暢・門上秀叡　2011 『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

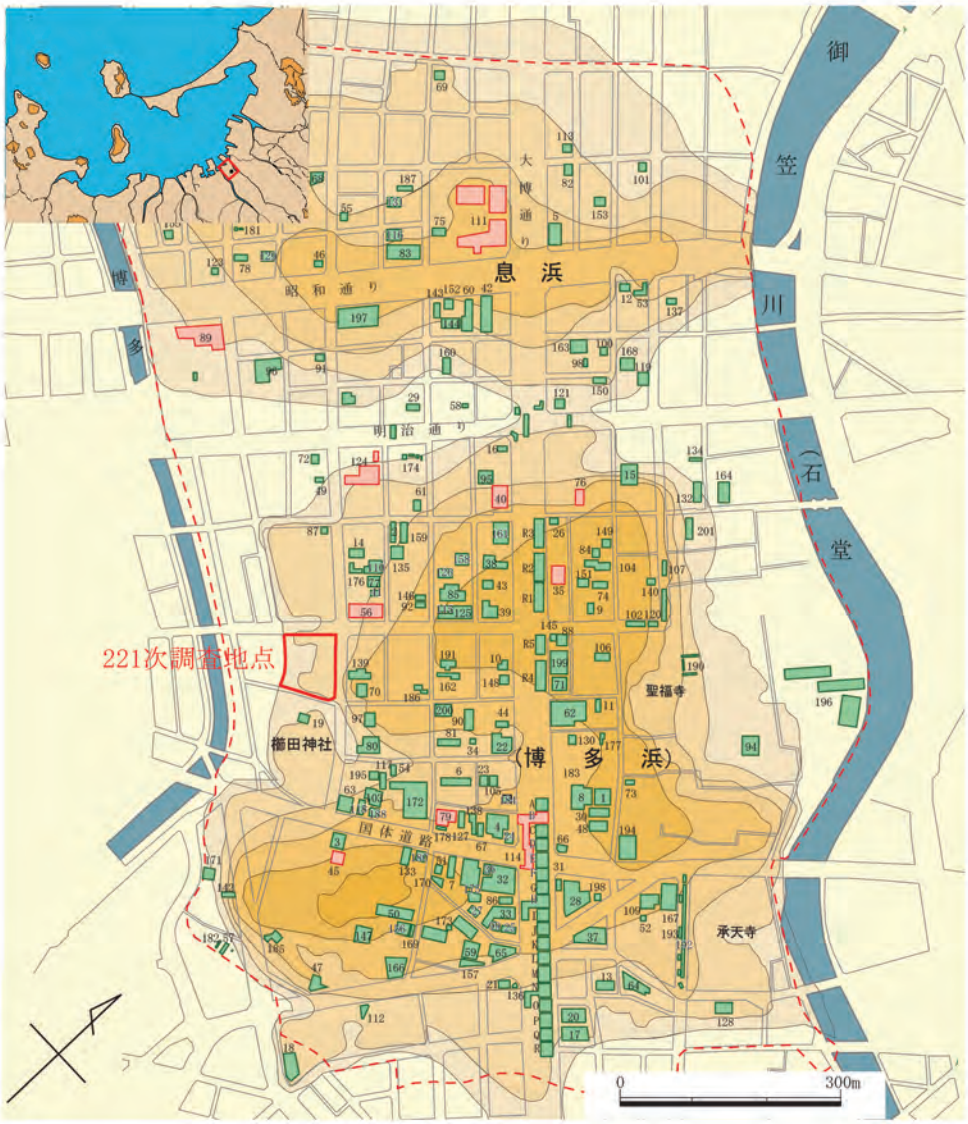


図１　第２２１次調査位置図

図２　調査区全景写真

図３　石積み遺構全景

図４　開口部

図５　石積み遺構断面

図６　石積み遺構前面杭列

図７　石積み遺構前面に堆積した洪水層

図８　大乗寺に関連する溝

図９　大乗寺銘瓦

図10　近世大乗寺墓地

図11　出土人骨

図12　石積み遺構全景

図13　土壙墓

図14　土壙墓副葬品

図15　出土硫黄下塊の一部

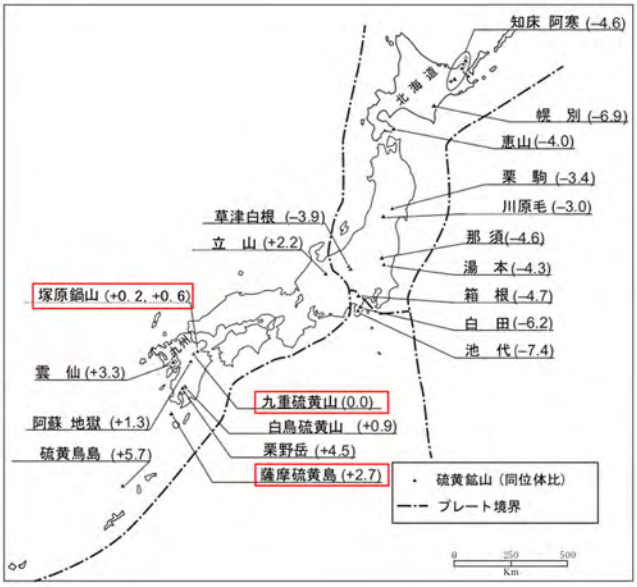


図16　硫黄鉱山の硫黄同位体比
（Mizota et al.,2016に加筆）

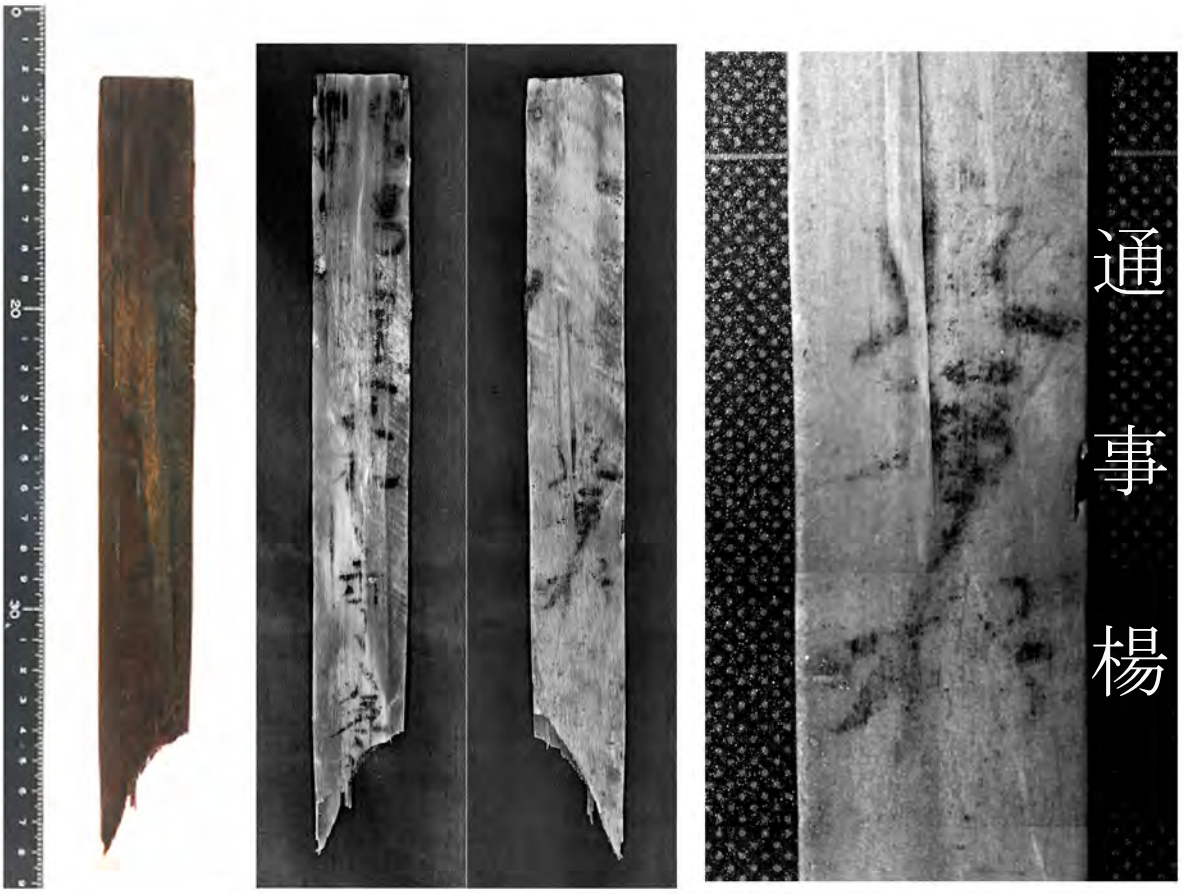
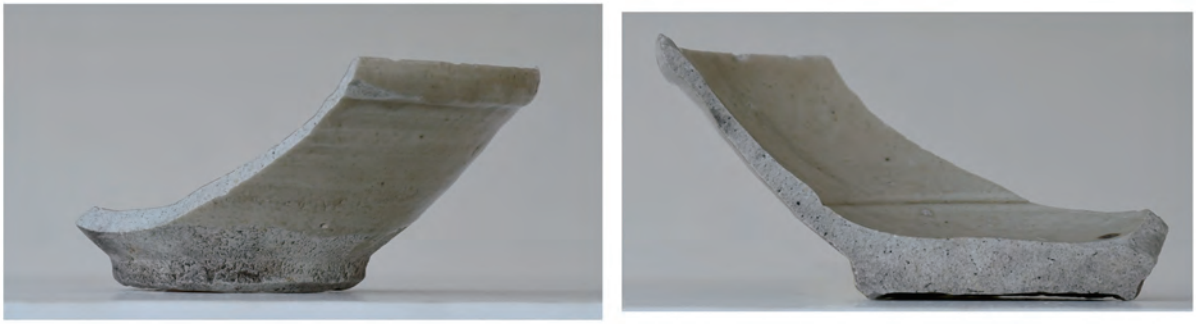


図17　出土木簡

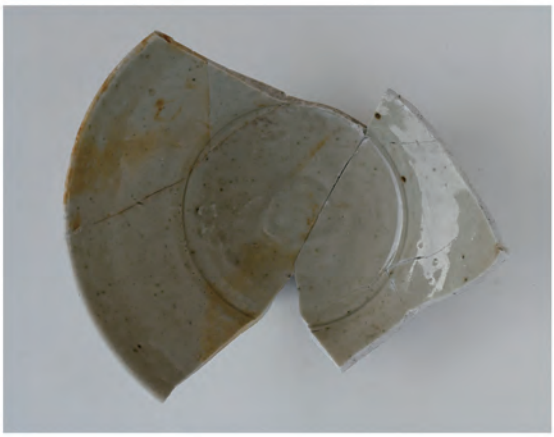
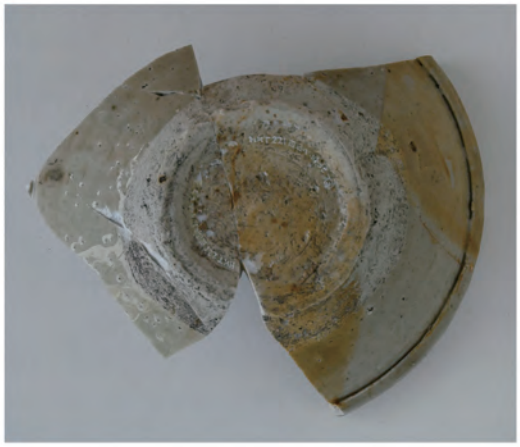
①

②



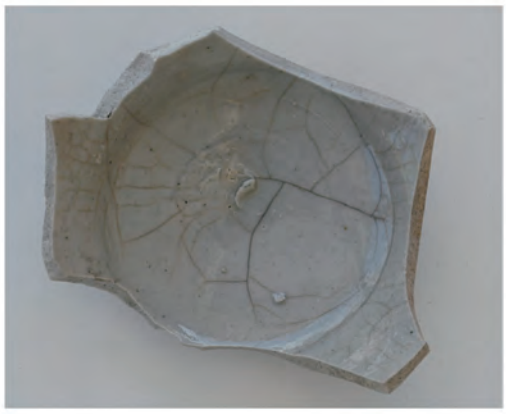
③

図18　出土白磁碗（①～③）

④

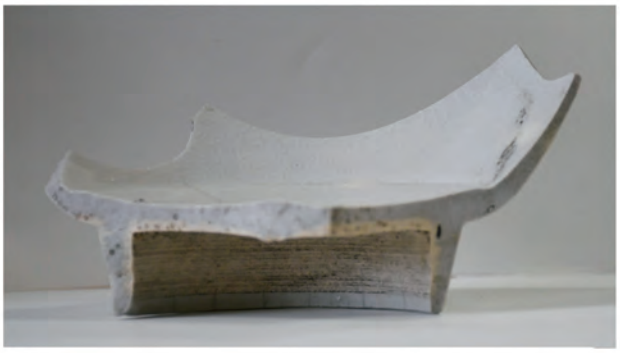
⑤



⑥

図19　出土白磁碗（④～⑥）

⑦



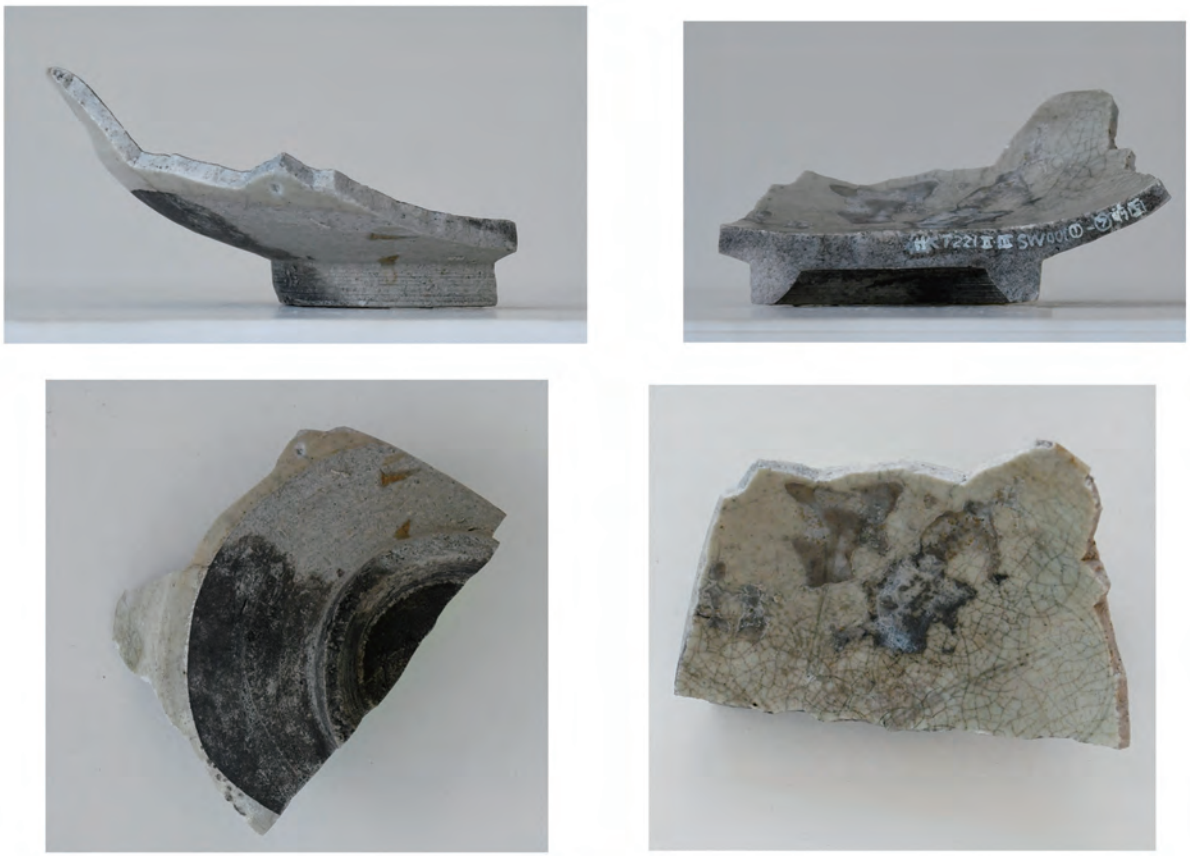
⑧

⑨

⑩

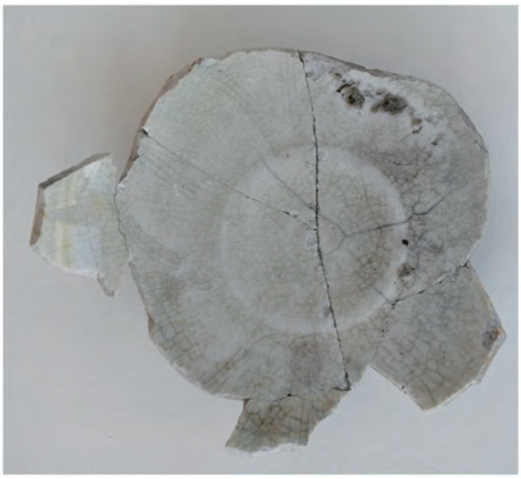
図20　出土白磁碗（⑦～⑩）

⑪

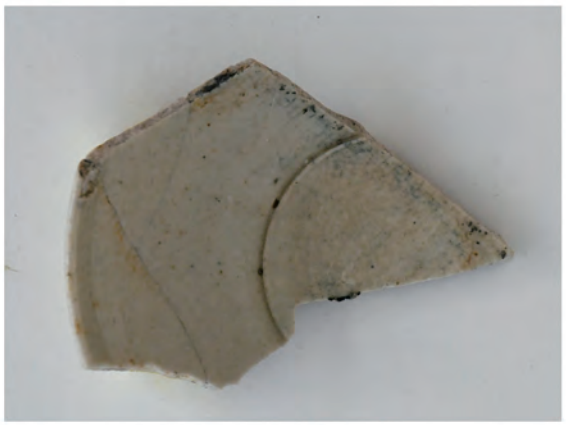


⑫

図21　出土白磁皿（⑪～⑫）



⑬



⑭

⑮

図22　出土白磁皿（⑬～⑮）

図23　出土越州窯系青磁

神奈川県伊勢原市の中世遺跡

山口　正紀　（公益財団法人かながわ考古学財団）

はじめに

神奈川県県央部に位置する伊勢原市では、平成 19 年度から新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査が開始され、厚木秦野道路（一般国道 246 号）、県道 603 号線の建設事業も含め、道路建設に伴う広範囲の発掘調査が実施されている。これまでに旧石器時代～近代まで幅広い遺跡が発見されてきており、新東名高速道路は早期開通を目指し発掘調査を優先して実施してきた。しかし、それも一通り終息を向かえつつあり、これからは出土品整理作業を本格的に実施していく予定である。

今回報告する遺跡（図 1）は、丹沢大山国定公園に位置し神奈川県を代表するランドマークともなっている大山（標高 1,252m）の周辺に広がっている。大山は古くから信仰の場として親しまれ、江戸時代中期には「大山参り（大山詣で）」が盛んに行われていた。そのような歴史的背景が培われてきた土地の大規模発掘調査により、中世についても近年多くの興味深い様相が明らかになってきた。文献に残る史実と考古学的検証の比較検討は、今後の報告書刊行とともに整理していかなければならない。

Ⅰ　遺跡周辺の地形と歴史的背景

1．伊勢原市の地形と遺跡の立地

神奈川県伊勢原市の地形（図 2）は、北西から南東に向かって山地、丘陵・台地・扇状地、沖積平野へと変遷しながら高度を下げ、高所と低所の標高差 1,200m以上を測る。北西部には大山を頂点とする丹沢山地、その南西麓から中央部にかけて大山を水源とする渋田川や鈴川などの金目川水系によって開析された標高 25～120mの愛甲台地・高森丘陵・伊勢原台地・富岡丘陵・日向扇状地・上粕屋扇状地・鶴巻台地が広がっている。西部から南東にかけては標高 10m前後の沖積平野となる。南東部は県内中央部を南流する相模川を氾濫原とする低地であり、台地との境は 10mを測る。

2、史実に残る糟屋氏

本地域に糟屋氏や上杉氏の居館などの伝承があり、簡略ながら関係する動向をまとめる。

久寿元年（1154）に市域のほぼ全域を範囲とする「糟屋荘」が立券する。その後、後鳥羽上皇により建立された京都・安楽寿院領に寄進されるが、実質的な支配は荘司である糟屋氏が執り行っている[1)]。最初の荘司は糟屋盛季が名乗った。建仁 3 年（1203）、比企の乱で糟屋氏は北条氏と対立し、京都の後鳥羽上皇の武士として仕える。承久 3 年（1221）の承久の乱にて失脚し、北条氏の一族（大仏家）が所領していた記述がみられる[2)]。鎌倉幕府滅亡後は足利尊氏の弟、相模守直義が観応 2 年（1351）に出した書状に「糟屋荘政所」とあり、荘内に政所が存在したことが読み取れる[3)]。その後は関東管領上杉氏の一流、扇ガ谷上杉家が相模守護となり、永徳 2 年（1450）、関東公方と抗した江の島合戦の敗北で上杉家は糟屋荘に退却した記述もあることから、荘内が拠点の一つであったことも窺える[4)]。また文明 18 年（1486）には扇ケ谷上杉家の重臣、太田道灌が荘内の館で謀殺されてことは有名である[5)]。

Ⅱ　各遺跡の調査成果

伊勢原市は先の理由により近年発掘調査が集中しており、上粕屋扇状地から大山方面へ広がる台地上からは、中世遺跡が数多く発見されている。発見された各遺跡からは屋敷、寺院、墓所、池状遺構、道路、村落など様々な性格をもつ遺構が発見されている。但し、同地域内の時期的な流れについては未だ検討前である。以下、既に報告済みの遺跡も含め、主な遺跡の遺構を中心に事例を紹介していく。

1．神成松遺跡（図 3）

神成松遺跡では、推定一辺 70m[6]、正方形を呈すと考えられるV字状の溝が検出され、中心部にいくつか重複する掘立柱建物 11 軒が見つかっている。柱穴列の向きも溝跡と並行するように配置され、長軸の向きが南北方向と東西方向があり、後者は縁（または庇）を有する。建物跡は同じ場所に複数回建て替えられる遺構と、竪穴状遺構に置き換えられる様相があり、竪穴状遺構からは手づくねかわらけが出土している。東側の建物が桁行 2 間×梁行 5 間以上の建物、柱間は 180～200 ㎝、縁（または庇）は主柱穴から 50 ㎝を測る。東辺の溝は未調査で様相は不明である。さらに後世の攪乱により削平されている状況下だが、北西部で橋跡と考えられる柱穴が溝内にあることから、出入口の可能性が示唆できる。

溝の上部脇に盛り土や塀もしくは柵のような痕跡は現在のところ確認されていない。南西隅には道状遺構の一端が検出され、溝との間に掘立柱建物もみられ、屋敷地と外側の空間配置の一部が垣間見える。

出土遺物は包含層および遺構内から少量しか出土が認められない。種類はかわらけ、瀬戸窯四耳壺・碗・卸し皿、常滑窯壺・甕、東幡系鉢、青磁蓮弁文碗・折縁鉢、白磁口禿皿・小壺、青白磁梅瓶などが出土している。時期的には 12 世紀後半～14 世紀代の遺物がみられるが、13 世紀代を中心とした出土量が認められている。注目すべき遺物は、鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）の武家屋敷で類例がみられる白磁小壺で、嗜好品であることが推定できる。また水晶製の数珠 1 点も出土している。大規模な方形居館や遺物の組成、歴史的背景などを踏まえると、糟屋氏一族もしくは一定以上の御家人の屋敷地であった可能性は高いであろう。

方形居館が発見された南西側には、渋田川支流と鈴川旧水路の幅 30～50mの谷が開口しており、その南斜面と谷内部の平坦面が調査されている。もともと古墳時代相当から自然流路としてあったと推定され、中世になると上層遺構群と下層遺構群の 2 時期に大別できる遺構が発見された（図 4）。上層遺構群では谷内部を東西に分割した溝状遺構や畝状遺構などの耕作地として使用されていた。下層遺構群では谷奥を開削、大きく段切りした全面に水田を造成している。同安窯系青磁碗・白磁四耳壺・常滑・渥美・山茶碗などの 13 世紀代の遺物が出土しており、方形居館の時期と同じくしてあったと推定される。

2．上粕屋・〆引北遺跡（図 5）

13 世紀後半～14 世紀前半の舶載陶磁器が出土する堀・土塁に囲まれた、推定一辺 50mほどの規模を持つ館跡の一部が報告されている。周囲には竪穴状遺構 15 基、掘立柱建物 11 棟や懸仏が出土していることから、館跡のみならず寺院の可能性も想定され、年代的・地理的に「糟屋荘政所」[7]の可能性があることが推定されている。中世前期の居館は神奈川県内で海老名市上浜田遺跡や綾瀬市宮久保遺跡の事例があるが、いずれも堀や土塁などは認められない。出土遺物から少なくとも 14 世紀前半～中葉に位置付けられ、神成松遺跡の方形居館よりも新しい可能性のある館跡である。

3．東富岡・南三間遺跡（図 6）

西富岡丘陵上の南寄り付近を谷頭とする谷を望む台地の南東側斜面に位置し、主に谷底の低湿地周辺に中世遺構を確認している。中世の各遺構は谷奥の崖線から緩斜面にかけて分布している。竪穴建物や竪穴状遺構、地下式坑、井戸を主体とし、遺構からは鉄滓が出土するものが多く、中世遺構の覆土や包含層に鉄滓が混在するような状況が報告されている。居住空間と推定される遺構よりも作業場

等と想定される遺構が多くみられることや遺物として鉄滓が多量に出土している状況を加味すると、谷間の空間を利用した製鉄に関係する遺構群と推定される。12 世紀後半～16 世紀代の遺物が出土しているが、遺構の年代は 14 世紀後半～15 世紀代と考えられている(村松ほか 2020)。注目すべき点は、銭貨の鋳型・模鋳銭[8)]の出土である。全国でも点数は少なく、博多・京都・堺の都市遺跡から出土し、都市の中の工人集団の存在を関連づける遺物と推定される。特殊な例として猿形土製品が竪穴状遺構から出土し、さらに赤間産の四葉硯の裏面に「近江入道」「河内入道」「越後入道」「明松入道」と縦に罫書きされた貴重な文字資料も見つかっており、この地の中世史を語る上で重要な発見である。

4. 西富岡・向畑遺跡(図 7)

広範囲に亘る遺跡を調査区を分割して平成 19 年度から調査中である。中世遺構は所々確認されているが、その中で埋没谷内とその西側一帯に中世遺構が集中している。これらの遺構は谷の肩を切り土整地した奥行き 20mほどの平場に構築されていた。谷内では、谷を横断する溝より南側に竪穴状遺構が 30 基以上検出され、地下式坑・井戸・ピット群等が検出されている。竪穴状遺構は一辺 2～3m、深さ 0.5～0.8m規模が多い。時期は 13 世紀～14 世紀代と推定される。また谷の東側でも長軸6m、 短軸 4.5m を測る楕円形を呈した大型の井戸が見つかっており、 井戸の中から大型の礫とともに獣骨が出土している。床面直上に刃物と思われる鉄製品が出土した地下式坑や消失した建物跡から炭化した柿・粟粒[9)]などの発見も特筆できる。本遺跡内では谷を中心とした集落が展開していたことが明らかになっている。

さらに西側では現市道の直下に近世～中世にかけての道路遺構が確認されている。宝永 4 年(1707)の富士宝永火山灰の直上と直下、最下部の掘り方直上の大きく 3 面の道路硬化面が確認された。部分的に複数の硬化面があり、修繕を繰り返していた様相が考えられる。北側には西へ曲がる分岐点の存在も明らかになり、地山を台形上に掘り込み、硬化面は西側に傾斜させ側溝へ流れる構造になっている。道の規模や造り [10)]から、隣接地域間をつなぐ重要な道であったと考えられ、「相州大住郡西富岡村絵図」[11)]にも記され中世まで遡ることが明らかになった。遺物は少量で中世後期の出土遺物が目立つ。

5. 西富岡・中島遺跡、西富岡・中島2遺跡(図 8)

中島遺跡が渋田川の影響による低地、中島2遺跡が河岸段丘上で一段高くなる。掘立柱建物 1 棟、水田 2 箇所、畝 1 箇所、溝 4 条などである。中島2遺跡で発見した遺構は、地下式坑 1 基、竪穴建物 1 棟、溝 12 条、竪穴遺構 1 基、埋没谷 1 箇所、その他土坑・ピットである。中島遺跡、中島2遺跡とも大きく 2 時期に分けることができるが、正確な時期区分は今後の検討を必要とする。中世～近世前期低地部となる中島遺跡では、土壌の自然科学分析等からも、水田であることが想定される。水田には、砂礫を主体とした畦畔があり、小区画を形成していたと推測される。中世前期から水田が整備され、西側の一段高い一帯では建物も見られる。中島2遺跡では谷が埋没する過程で内部を利用しているようである。

中世後期以降、耕作地としてより整備が進む。中島遺跡では、水路の変更や水田の拡幅が行われ、西側の一段高い一帯では、畑作が行われる。中島2遺跡では、谷が埋没し、ローム面を造成して平場を確保する。その平場では、地下式坑、竪穴遺構、土坑など耕作に関連すると考えられる遺構が広がる。

6. 上粕屋・和田内遺跡(図 9)

「(伝)糟屋一族の墓」の伝承がある箇所で宝篋印塔と五輪塔の下から中世墓が 2 基確認されている。C1 号中世墓の土坑内からは渥美窯製壺(蔵骨器)が出土し、内部から非火葬の人歯 21 本と鉄製品が納められていた。蔵骨器は 13 世紀初頭の製品であるが、C14 年代測定法による人歯の年代が、1440～1470 年の結果が示されている。構築時期は 15 世紀と推定される(脇ほか 2016)。

C2 号中世墓では集石墓と土壙墓 11 基を確認している。集石墓は長さ 4. 1m、幅 2.33mの規模で拳大の礫で構成されている。土壙墓は長方形を呈す長さ約1m、幅約 0.8mのグループと集石墓に伴った円形を呈す直径約 0.4～0.8mの規模グループがある。一部に骨片や炭化物が出土しており、炭化物 2

点を 14C 年代測定法で測定したところ 1282 年～1382 年、1294 年～1388 年の年代が示された。

分析結果から判断すれば土壙墓から集石墓（個人から集団への埋葬形態）の変遷が辿れ、一族郎党もしくは有力な御家人の墓であった可能性が高い。そのほか周囲から遺構は検出されておらず、断続的に墓域として使用されていたと考えられる。

7．上粕屋・和田内遺跡(第 2 次調査）（図 10）

本遺跡範囲内には平安時代末に糟屋盛季が菩提寺として創建した極楽寺と熊野神社が所在したと伝えられている [12)]。中世では大別して 2 面検出されており、上面では溝状遺構と掘立柱建物が確認され、井戸や土坑が点在する。時期を特定できる遺物は少なく、遺構内から 14 世紀後半～16 世紀代のかわらけが出土している。下面では池状遺構と礎盤石を有する 2 つの柱穴が確認され、そこから西側に向かって硬化面が連続する道路状遺構が検出された。極楽寺へ向かう参道と橋梁の関係が推測されている。池状遺構内からは複数の瓦や常滑・渥美窯の甕などとともに木簡が 3 点出土しており、うち 1 点は形状から呪符木簡と考えられる（土任ほか 2016）。

特筆すべきは、南東寄りに 3 基の石組遺構（図 11）が検出され、石組みの溝、河原石を方形に配した石組遺構、長方形に盛り土した基壇状の中央に半円形に並べた内側に被熱した礫と粘土、炭化物、焼土、粘土の互層が確認され、火を焚いたと考えられる遺構が残っていた点である。この 3 基の遺構は 1 つのセット関係にあると考えられ、火を焚いた場所は「湯屋」としての性格をもち、導水もしくは排水機能をもった溝と水場としての機能を持つと推測されている。しかしながら、周囲には柱穴が多数確認されているのだが、建物を想定できるような配置関係は確認できていない。常滑窯の鉢や青磁、白磁などが出土していることで 13 世紀後半以降に構築され、上面が始まるまでに廃絶されたと考えられている。13 世紀後半期、当該地は寺院であったとされ、寺院で水源や火処、排水など一連の施設として使われるのは湯屋か厨と考えられている。その後の 4 次調査により、南東側に貯水用の施設と考えられる井戸が検出されている（松葉 2017b）。

8．上粕屋・子易遺跡（図 12・13）

大山を水源とする鈴川左岸の台地平坦部に位置する。掘立柱建物 36 棟、東に上幅約 4m、深さ約 2m、西に上幅約 7m、深さ約 2.5mの堀状遺構に区画された中の屋敷地であることが分かっている。特に堀状遺構の深さから防御を兼ね備えた点が見て取れる。建物の北側には単独で 3 基の周溝状遺構を検出しているが、周溝内の平坦部には建物や構築物の痕跡は確認できず性格は不明である。東日本では 8～9 世紀に類似する周溝遺構の例もあるが、周溝内からかわらけなどがごく少量出土していることから中世と判断している。出土遺物にはかわらけ、常滑、瀬戸、青磁、白磁などがみられ、鞴の羽口や鉄滓も出土していることから屋敷地内で鍛冶も行っていたと考えられる。遺物の様相は周辺から出土する遺物の年代よりも少し古く、12 世紀後半～13 世紀前半に帰属する。

9．子易・中川原遺跡、子易・大坪遺跡、上粕屋・子易2遺跡（図 12・14・15）

上粕屋・子易遺跡よりも西、鈴川右岸から山稜までに位置する高低差を持った遺跡である。鈴川周辺から山麓部に向かって、石敷き道路状遺構、建物跡群、池状遺構、寺院跡と複合的な関係が垣間見える成果があがっている。石敷き道路状遺構は幅 3.6mで、大型の河原石を縁石として配置し、内部は人頭大の石を敷き詰め、さらに砂利を突き固めた強固で丁寧な造りをしている。その南東部には石を使用してない道路状遺構も発見されているが、両者の関係性は現段階では把握できていない。

大山への参道もしくは後述する寺院への参道と推測できる。鈴川を挟んだ先には、掘立柱建物跡 20 棟以上が検出され、規模の大きいもので東西 5 間×南北 7 間の建物が確認されており、2～3 回建て直しがされている状況が認められた。加えて、馬小屋と考えられる竪穴状遺構や建物周囲に区画溝や塀・柵、井戸なども発見されている。

さらに西へ向かい谷奥となる地形上の山裾を削り出した標高 127mの平場には、礎石建物や墓など

が一列に並ぶ寺院跡が確認された。中央の礎石建物は周囲より20～30 ㎝ほど高く削り出された方形の基壇上に南北 3 間×東西 4 間、四方に縁が付き前方に向拝があり、南北 7.2m、東西 8.4mの規模を測る。南側には南北 3 間×東西 2 間、規模は南北 6.4m、東西 5.8m、北側にも同規模の建物が推定され、対称的な建物配置であったことが明らかになっている。その北側には中央礎石建物と基壇同様に一辺約 5mの方形基壇を削り出し、盛り土した上に東西 3 間×南北 3 間、規模は一辺約 4mの建物が見つかっている。中央付近には常滑窯の甕が 2 個体設置され、内部から焼土や炭化物、灰とともに火葬骨が少量混じっていた。甕の新旧関係は判然としないが、東側が新しく、西側が古い可能性がある。また、その北側には南北 3 間×東西 2～3 間の掘立柱建物があり、その北側には柵で区画された石組墓が3基確認されている。そのうち南側の 1 基は周囲に大型の礫を長方形に2段配置して、内側に玉石を積み上げている。玉石の下位には土坑があり、土坑内部からは炭化物に混じって火葬骨が検出されている。範囲内から 13 世紀代のかわらけが出土し、玉石のごく一部には礫石経が確認されている。

寺院前面（東側）には、東西約 70m、南北約 40m、深さ約 5mの池状遺構が検出された。南縁側や東縁側の一部に州浜状の礫敷きがみられる。東側には谷を堰き止める堰堤が発見され、黄褐色と暗褐色の土を交互に積み、間に葺や小枝を敷き込み、杭を打った細長い枝を埋めて補強されている。

年代的に 12 世紀後半の遺物もみられるが、13 世紀前半の遺物を中心に出土が認められるため、その時期に造営されたと考えられ、上述した東側にある屋敷と同時期に存続していたと考えられる。本寺院跡以降は曹洞宗安楽寺 [13)]が明治時代まで所在していたが、それとの関係性については特定できていない。寺院も構成する建物群は全て東側が前を向き、西側背後に山、東側全面に池状遺構が位置していることから、西方浄土を意識した伽藍配置であった可能性がある。当該期における寺院・墓・池の一連の遺構のセット関係を有する類似事例は、神奈川県内でも鎌倉市永福寺（墓を除く）しか見当たらないことから、今回の事例も重要な発見であると考えられる。

10. 浄業寺跡、三ノ宮・上竹ノ内遺跡（図 16）

両遺跡は隣接し、鈴川右岸の河岸段丘上に位置する。浄業寺は鎌倉時代に浄土宗寺院として北条政子により創建されたと云われ、近世期に黄檗宗の寺院へ中興され、明治 41 年に廃寺となっている。浄業寺跡範囲では、溝や柵列などの区画施設が確認された。南側に隣接する三ノ宮・上竹ノ内遺跡は、浄業寺跡の崖下の低地に位置する。中世期の調査成果から 4 間×5 間、各柱穴の芯々距離 180 ㎝を測り、一部柱材や根石が残存する廂付き掘立柱建物が確認されている。建物の周囲には溝や石垣が検出され、近世にかけて大規模な地業を行っている様相が明らかになった（小宮山ほか 2013・高橋 2016）。

かわらけ、瓦質火鉢、渥美・常滑窯の甕・鉢、輸入磁器、瓦、茶臼など 13～16 世紀代を中心とした製作年代の遺物が出土し、茶器が目立つ傾向がある。石製風炉も出土していることから、城館跡や寺院跡でみられる遺物に類する。多くは包含層や近世の遺構に混じっている状況であった。また、周囲の遺跡からは瓦の出土がほぼない状況で、点数は少ないが平瓦・丸瓦の出土比率は鎌倉市永福寺と類似した検討結果が得られている。

まとめにかえて（考察）

大規模道路建設の影響により広範囲で中世遺跡が発見され、当該地域の貴重な発見が近年明らかになってきた。神奈川県内でも都市遺跡ではない限り、中世の様相が広範囲で明らかになった発掘調査はなかったのではなかろうか。中世前期では伊勢原の丘陵部から上粕屋扇状地にかけて、13 世紀～15 世紀の集落や館跡が広がる。こうした中でやはり年代的には糟屋氏との関係を連想させる遺構が大半であり、ある一定の範囲までは1つの荘園遺跡と認識できると想定している。また各遺跡に共通していることは、中世期の包含層や遺構内からの出土遺物が少なく、都市遺跡のように各遺跡の時代幅が特定できないことである。中世前期主体の遺構は山麓に近い場所で確認されており、中世後期になって

くると現市街地方面へと移り変わっていき、丘陵から低地にかけて空間利用の変動があったことも窺える。糟屋氏から上杉氏への変遷が考古学的に読み取れるか、都市遺跡や周辺の遺跡の成果含め比較検討していかなければならない。途中段階での報告となったが都市と地方との空間構成も視野にいれて今後検討していきたい。

〈註〉

(1)「安楽寿院領諸荘所済注文」安楽寿院古文書。

(2)「吾妻鏡」巻十七。

(3)「足利尊氏・同直義所領目録」比志島文書　東京大学史料編纂室

(4)「足利直義御教書」円覚寺文書

(5)関東公方(足利成氏)御内書案写」足利家御内書案

(6)確認している西辺と東辺の幅により図面上で算出した推定距離である。

(7)『足利直義御教割(伊勢原市史古文書六三)に記述がみられる。

「正續院領相模國石田庄(大住郡)内津奥村田畠在家事、近隣地頭御家人致濫妨云々、甚招罪科歎、早莅彼所、退狼籍人等、可全寺家知行由、可下知糟屋庄(大住郡)政所之状如件、観應二年十二月六日花押(足利直義)上杉宮内大輔殿」

(読み下し)

「正續院領相模國石田庄内津奥村田畠在家の事、近隣の地頭、御家人濫妨を致すと云々、甚だ罪科を招くか、早く彼の所にのぞみ、狼籍人等を退け、寺家の知行を全うすべきの由、糟屋庄政所に下知すべきの状件の如し」

(『伊勢原市史古代・中世資料編」より)

(8)神奈川県では鎌倉市今小路西遺跡内の井戸(15 世紀初頭)から出土している事例があり、県内2例目となる。

宗臺秀明　1993「今小路西遺跡」今小路西遺跡発掘調査団

(9)AMS 測定で 1370 年前後の年代結果が出ている。

(10)神成松遺跡の南東側に位置する上粕屋・石倉中遺跡において、上幅8～10m、基底部幅4m、深さ1mの逆台形状の道跡が確認されている。17 世紀前半代に使用され、近世の大山参詣のための大山道と考えられている。本遺構と時期差はあるが類似する遺構と考えられる。(公益財団法人かながわ考古学財団　2014『年報 21』4-7 頁)

(11)江戸期に書かれた「堀江家文書」内の絵図。

(12)糟屋盛季から三代後の有季より建久7年(1196)に奉納したといわれている梵鐘の銘文に記されている。

(13)元亀年間(1570～1573 年)に創建されたと伝えられる。本尊は阿弥陀仏だが史料が非常に少なく詳細は不明である。

〈挿図・表出典〉

図1 『地理院地図(国土地理院)』に加筆

図2 『土地分類図(神奈川県)1975 年』を改変

図3 『神成松遺跡第2～4・7・9地点』、『神成松遺跡第8地点見学会資料』、『年報 27』 ※一部加筆

図4 『年報 23～25』 ※一部加筆

図5 『上粕屋・上尾崎遺跡、上粕屋・〆引北遺跡、上粕屋・〆引西遺跡』

図6 『東富岡・南三間遺跡第2次調査、東富岡・北三間遺跡第3次調査、東富岡・東之窪遺跡』

図7 『令和3年度発掘調査成果発表会資料集』、『年報 23・24』 ※一部加筆

図8 『令和3年度発掘調査成果発表会資料集』、『年報 26・27』 ※一部加筆

図9 『上粕屋・一ノ郷南遺跡　上粕屋・和田内遺跡』

図 10・11 『上粕屋・和田内遺跡第2次調査』

図 12～15 『大山が紡ぐ歴史遺産～東名から新東名～』、『年報 25～27』、『子易・中川原遺跡見学会ミニ講座「大山山麓の中世」資料』　※一部加筆

図 16 『浄業寺跡』、『浄業寺跡第2次調査　三ノ宮・上竹ノ内遺跡』

〈引用・参考文献〉

相川薫・丸山清志・原川雄二ほか 2020『西富岡・中島遺跡第3次調査　西富岡・中島2遺跡第4次調査　西富岡・長竹遺跡第6次調査　西富岡・長竹2遺跡第2次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書78 株式会社パスコ

青木雄大・吉田好孝ほか 2018『西富岡・中島2遺跡第2次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書68 大成エンジニアリング株式会社

麻生順司・香川達郎・坪田弘子ほか 2014『神成松遺跡第4地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書20 株式会社玉川文化財研究所

伊勢原市史編集委員会 1995『伊勢原市史6 通史編 先史・古代・中世』 伊勢原市

伊勢原市史編集委員会 1999『伊勢原市史9 別編 社寺』 伊勢原市

伊藤雅乃・山本典幸ほか 2012『神成松遺跡第2地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書7 株式会社パスコ

大坪宣雄・碓井三子・田村良照ほか 2014『神成松遺跡第3地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書25 株式会社吾妻考古学研究所

香川達郎・小林義典ほか 2015『神成松遺跡第7地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書30 株式会社玉川文化財研究所

公益財団法人かながわ考古学財団 2009～2021『発掘調査成果発表会資料集』

公益財団法人かながわ考古学財団 2010～2021『年報16～27』

公益財団法人かながわ考古学財団 2018『大山が紡ぐ歴史遺産～東名から新東名～』

公益財団法人かながわ考古学財団 2015～2021『遺跡見学会資料』

小宮山友康ほか 2013『浄業寺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書17 大成エンジニアリング株式会社

宍戸信悟ほか 1999『上粕屋・上尾崎遺跡、上粕屋・〆引北遺跡、上粕屋・〆引西遺跡』かながわ考古学財団調査報告56

高橋直樹ほか 2016『浄業寺跡第2次調査　三ノ宮・上竹ノ内遺跡』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書38 大成エンジニアリング株式会社

土任隆・萩澤太郎ほか 2016『上粕屋・和田内遺跡第2次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書40 国際文化財株式会社

中村哲也・伊藤貴宏ほか 2017『上粕屋・和田内遺跡第7次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書53 株式会社玉川文化財研究所

中村哲也・中山豊ほか 2018『西富岡・中島遺跡』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書61 株式会社玉川文化財研究所

松葉崇 2017a「大山山麓に広がる中世遺跡」『発掘された中世の姿』平成28年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

松葉崇 2017b「神奈川県伊勢原市上粕屋・和田内遺跡の石組み遺構」『考古学ジャーナル』693 ニューサイエン

ス社
村松篤・眞鍋早紀　2020『東富岡・南三間遺跡第2次調査、東富岡・北三間遺跡第3次調査、東富岡・東之窪遺跡』かながわ考古学財団調査報告322
脇幸生・菊川泉　2016『上粕屋・一ノ郷南遺跡　上粕屋・和田内遺跡』かながわ考古学財団調査報告312

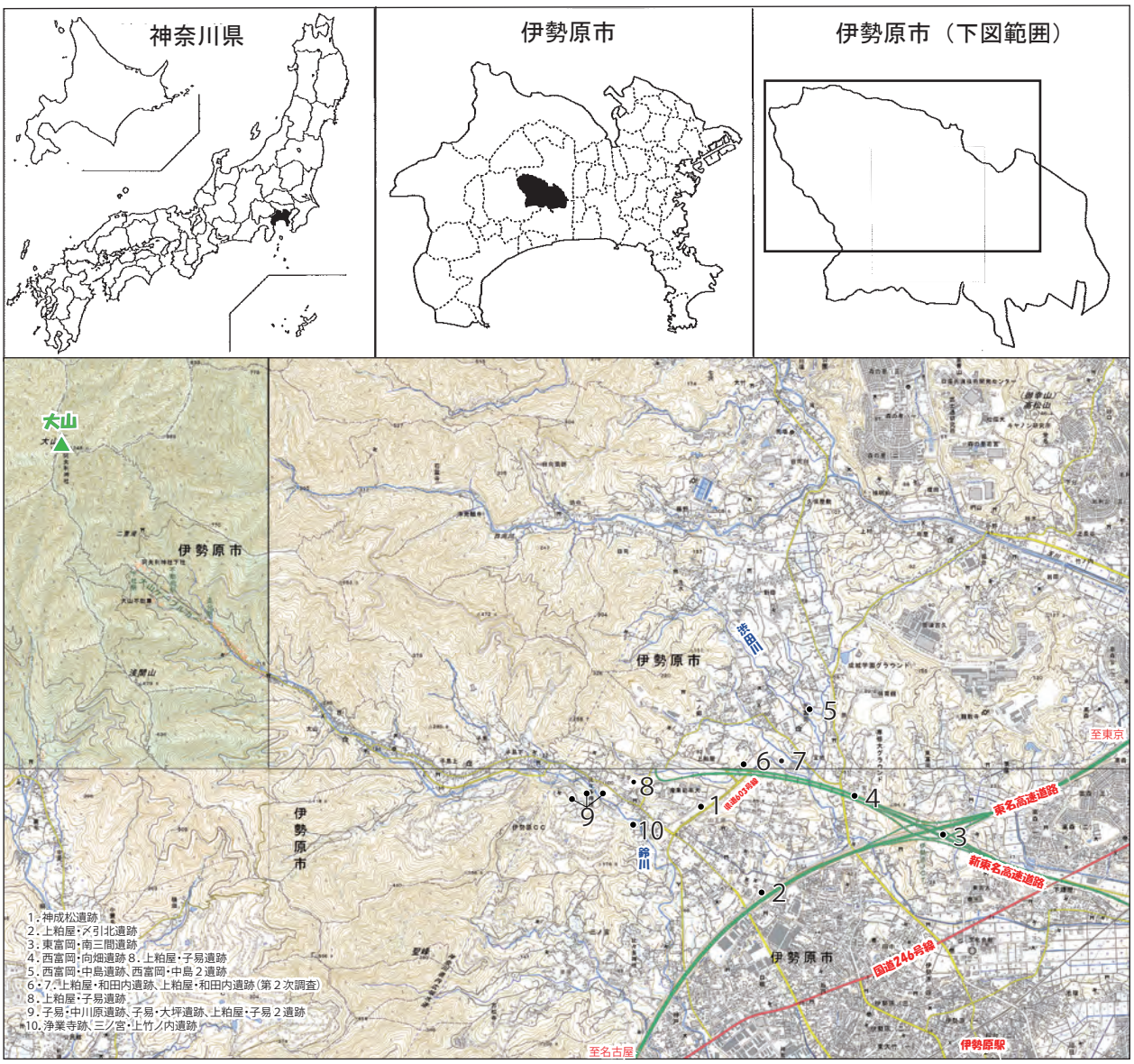


図１　遺跡位置図

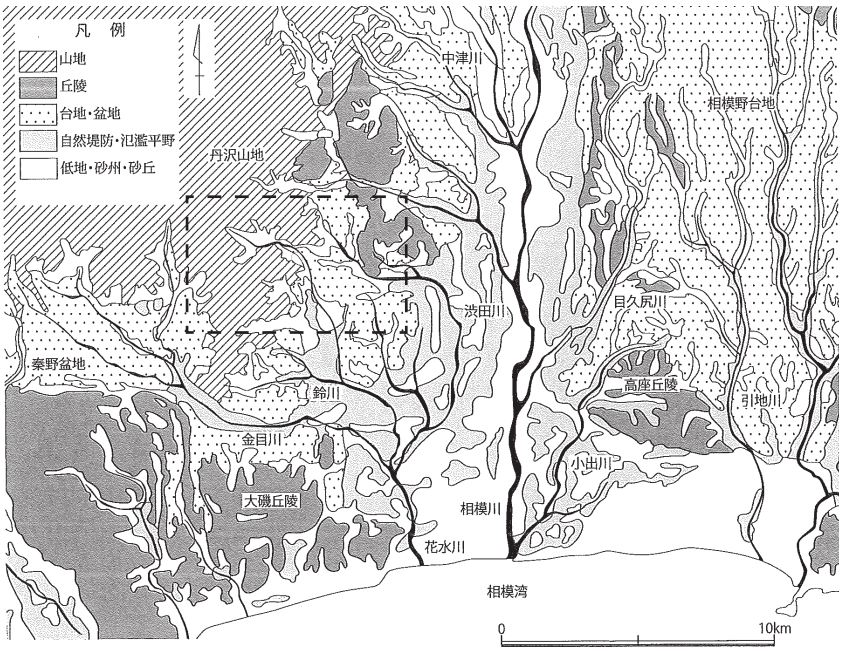


図２　伊勢原市周辺の地形区分

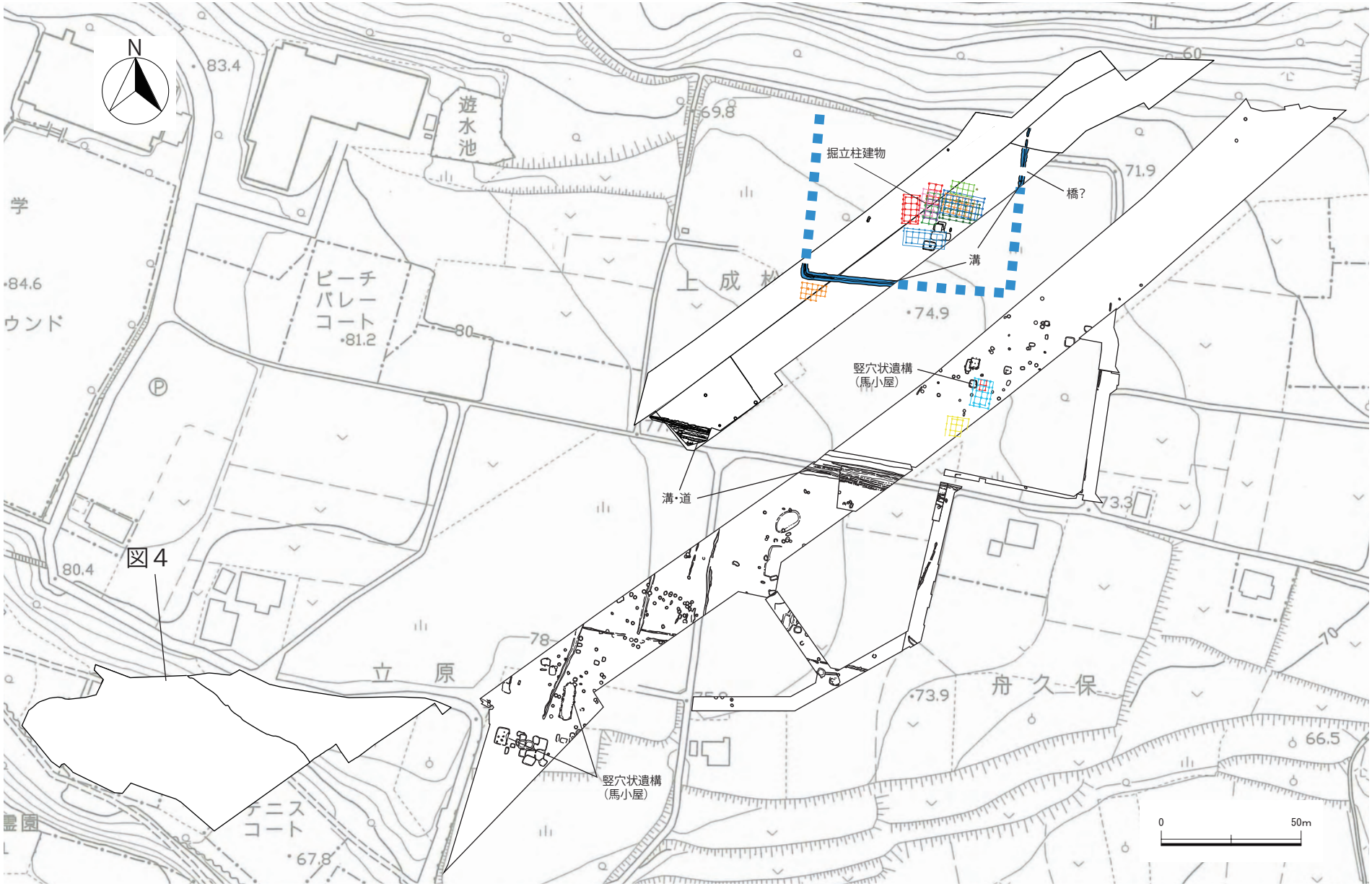
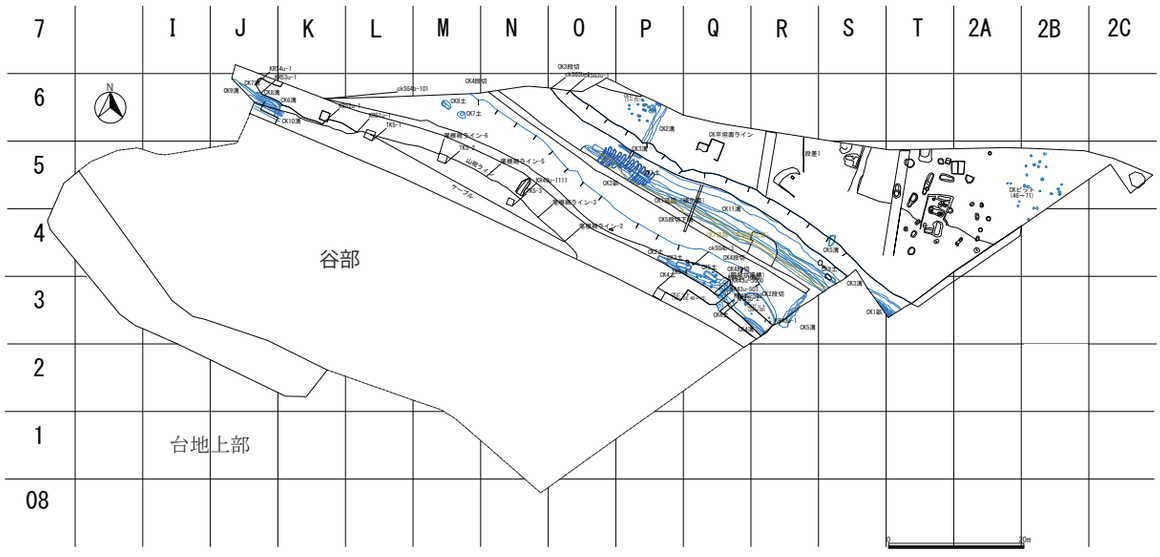
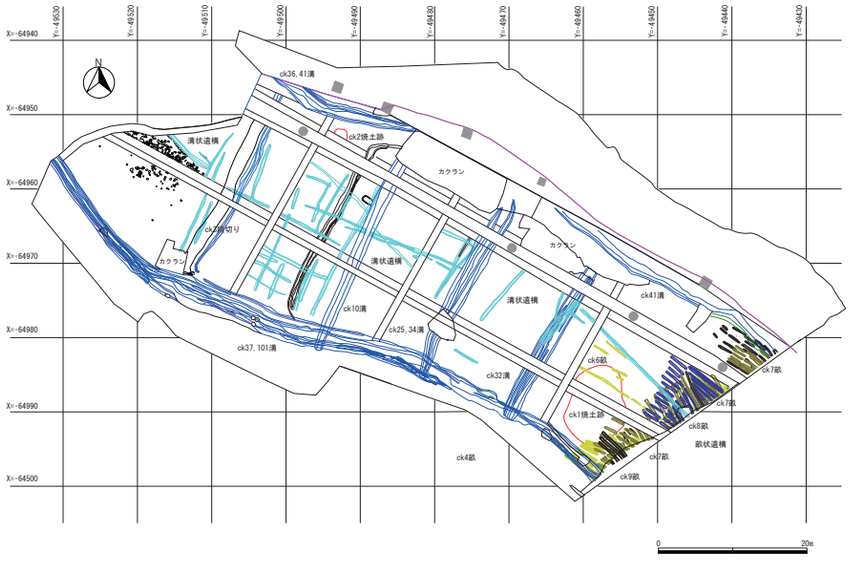
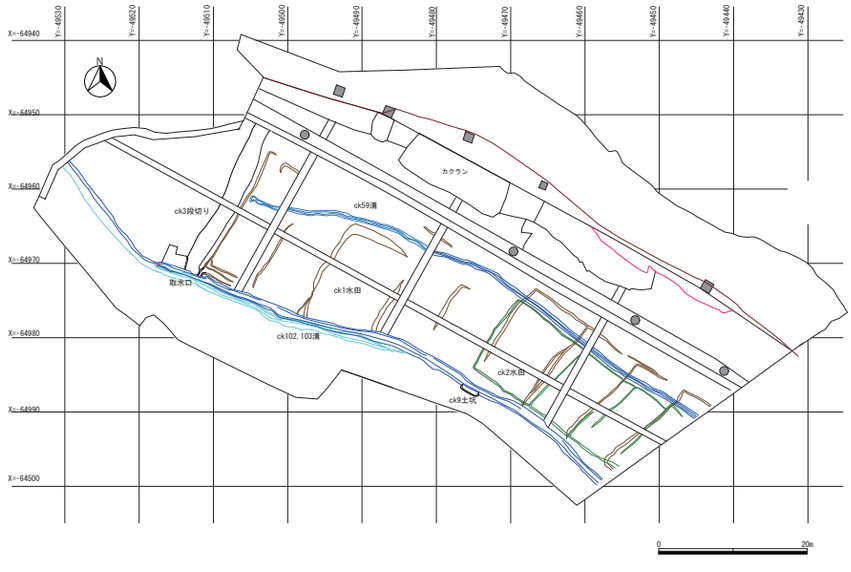


図３　神成松遺跡中世全体図





谷部　上層遺構群



谷部　下層遺構群

図４　神成松遺跡　中世耕作地全体図

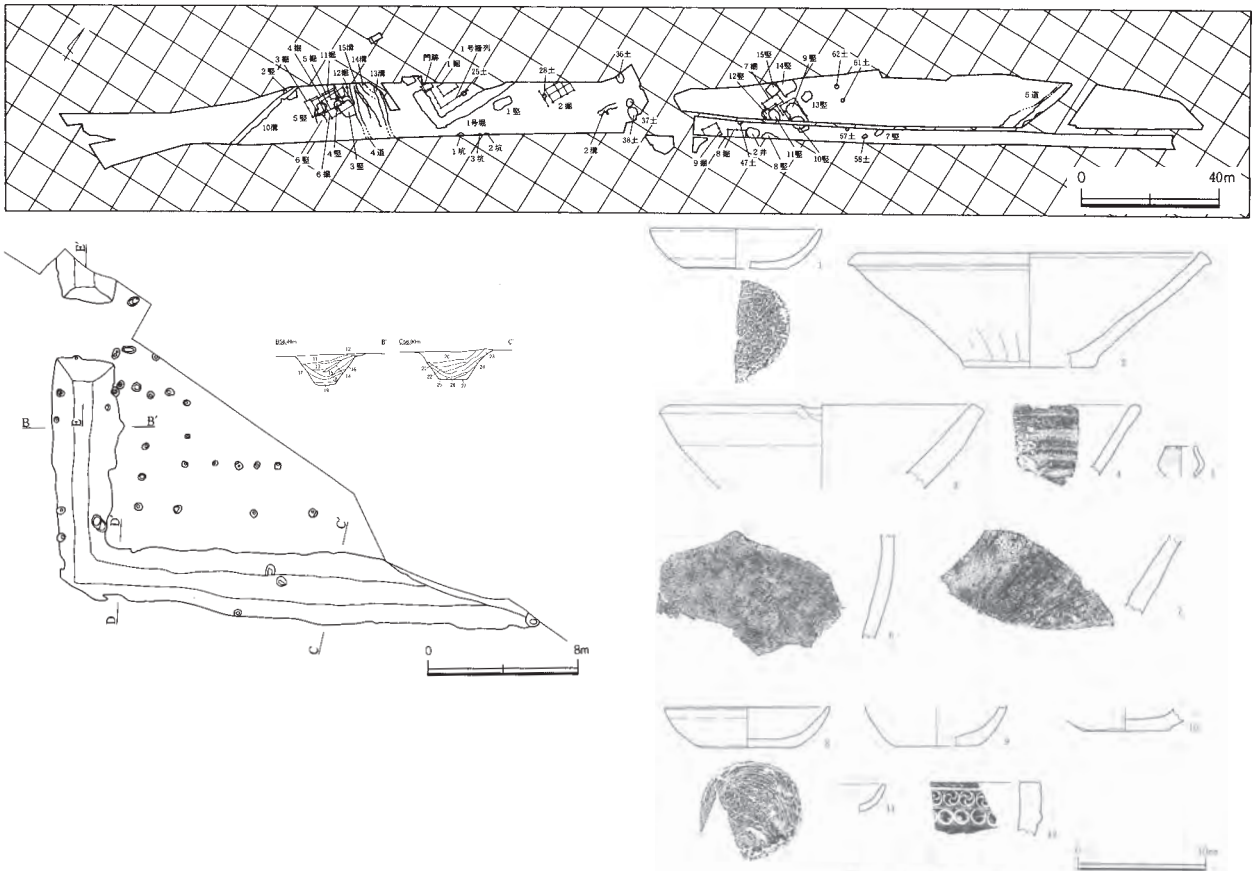


図５　上粕屋・〆引北遺跡　館跡と出土遺物

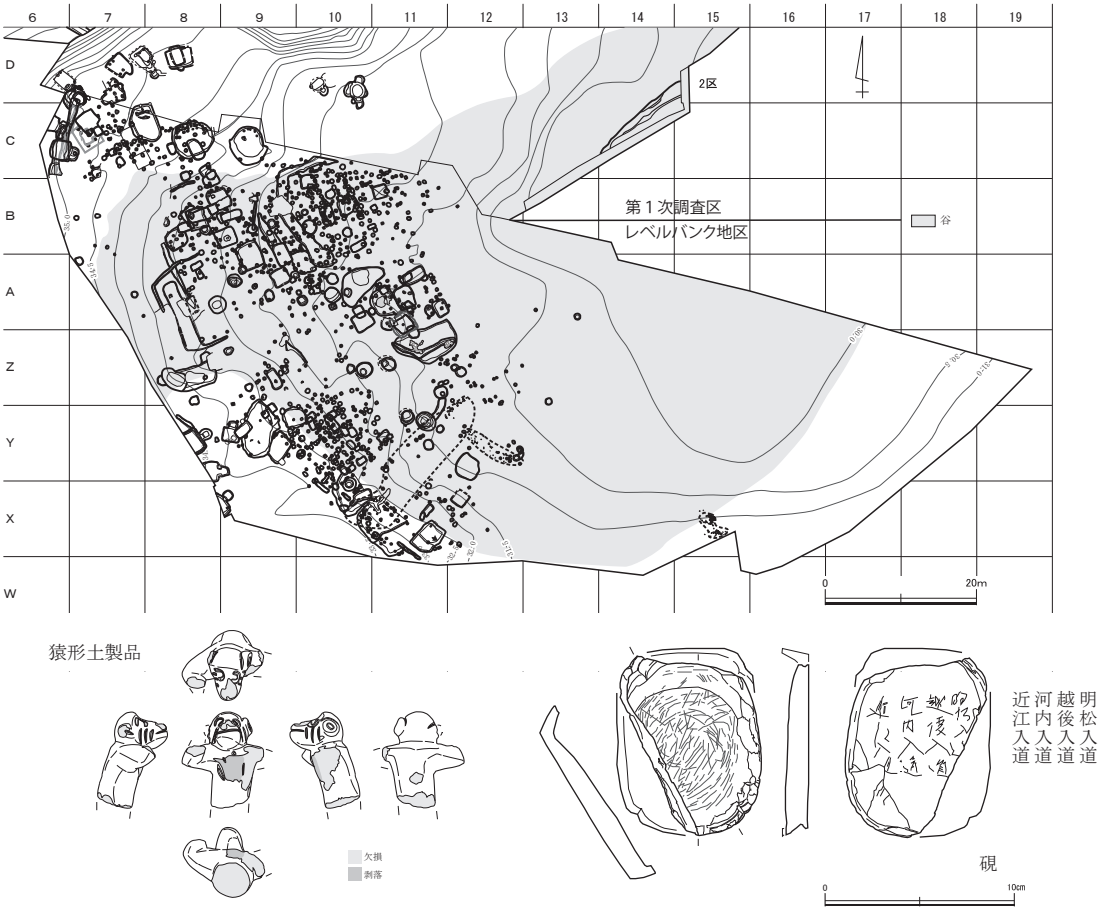
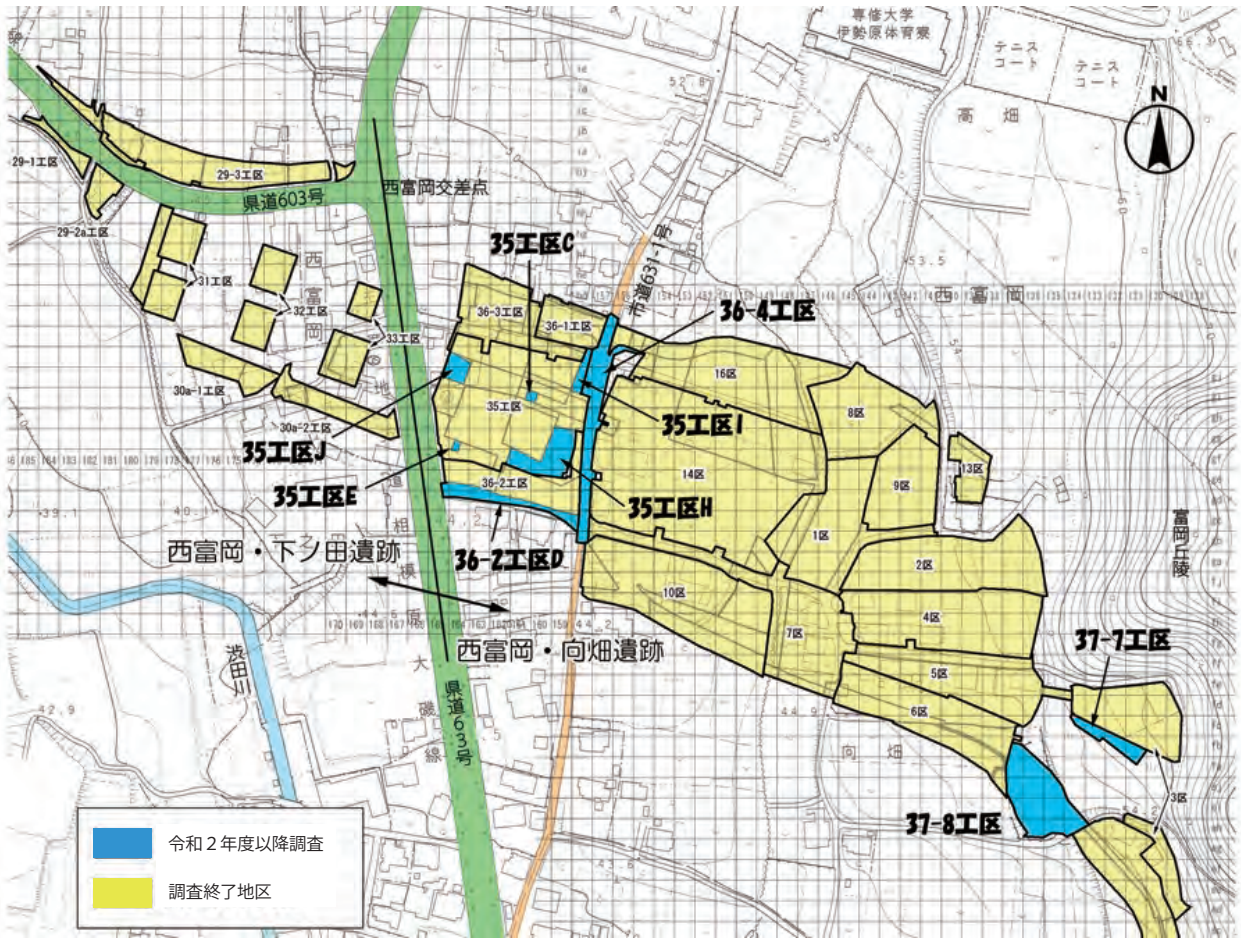
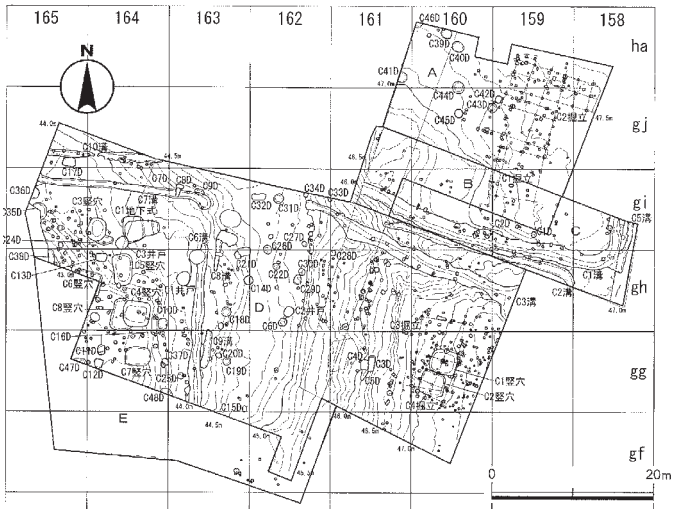
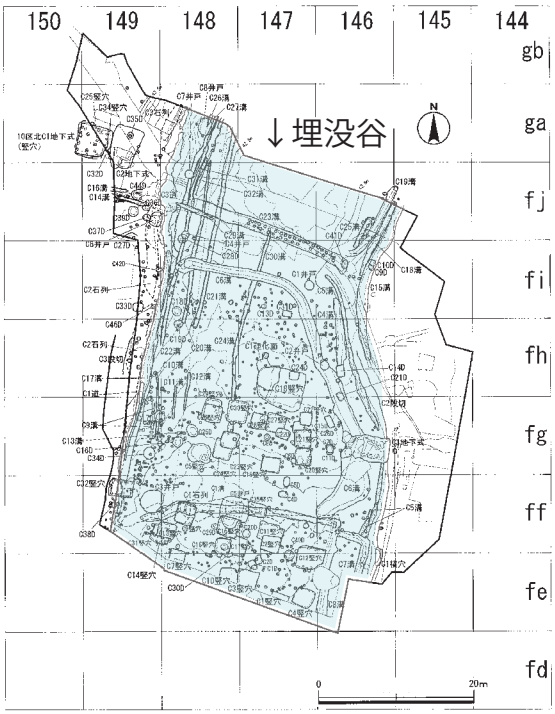


図６　東富岡・三間遺跡　中世遺構全体図と出土遺物



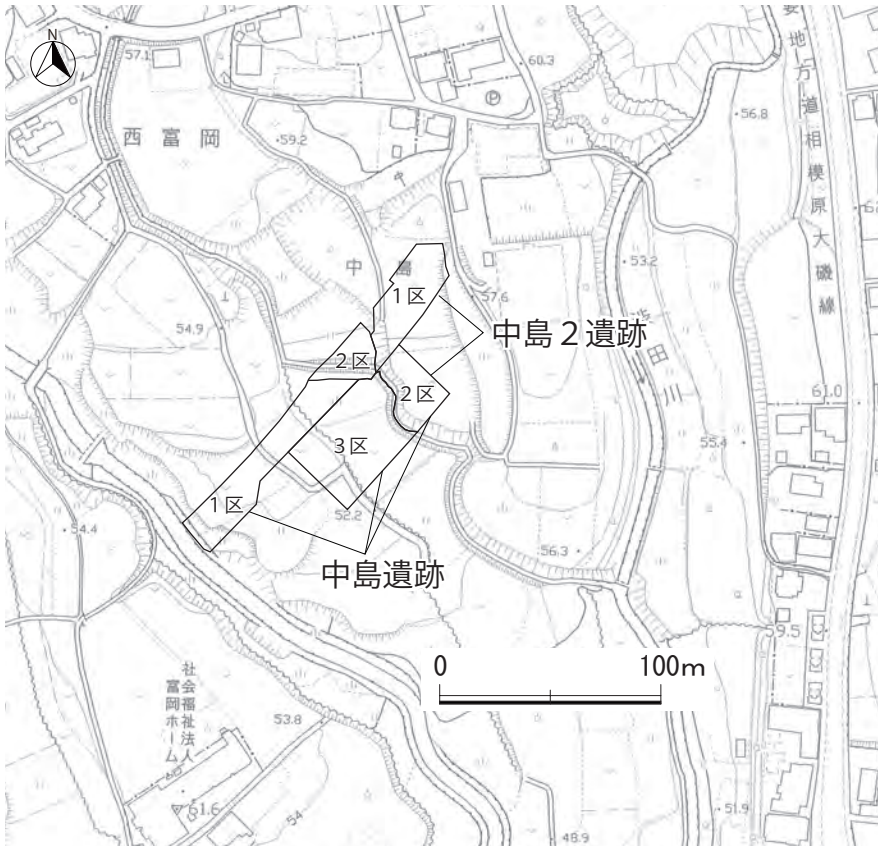


35工区中世遺構



７区中世遺構

図７　西富岡・向畑遺跡　中世遺構全体図



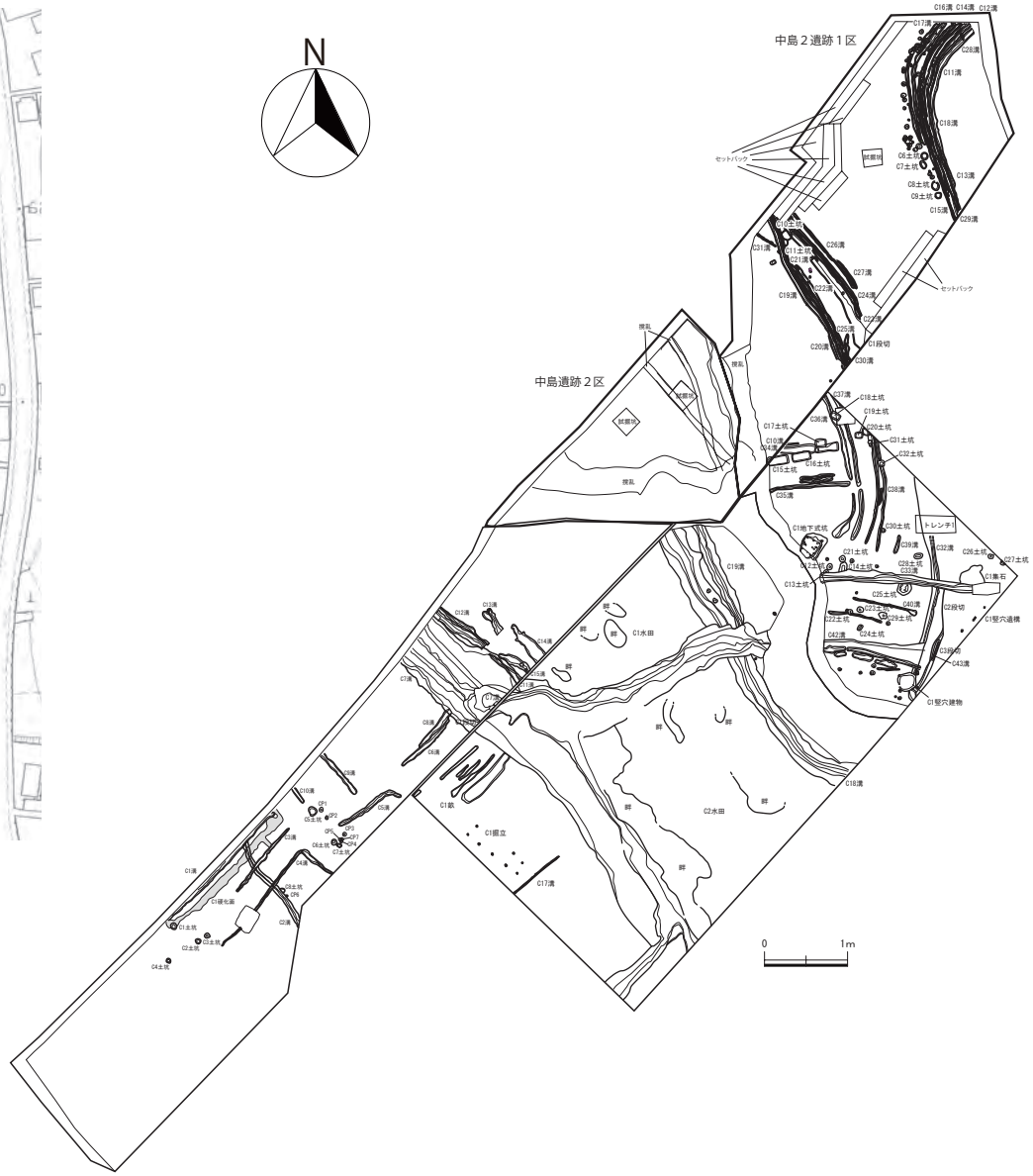


図８　西富岡・中島、西富岡・中島２遺跡　中世遺構全体図

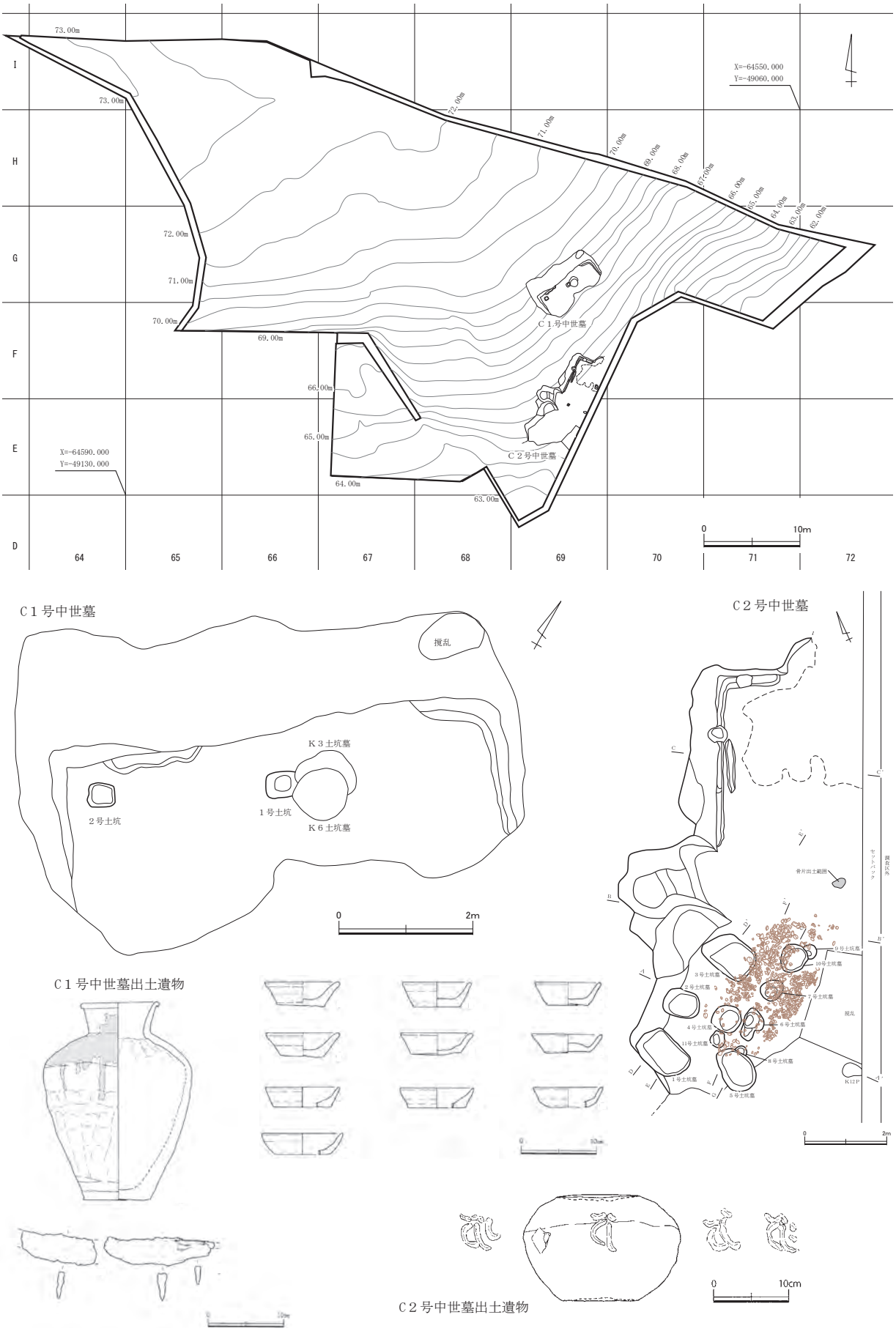
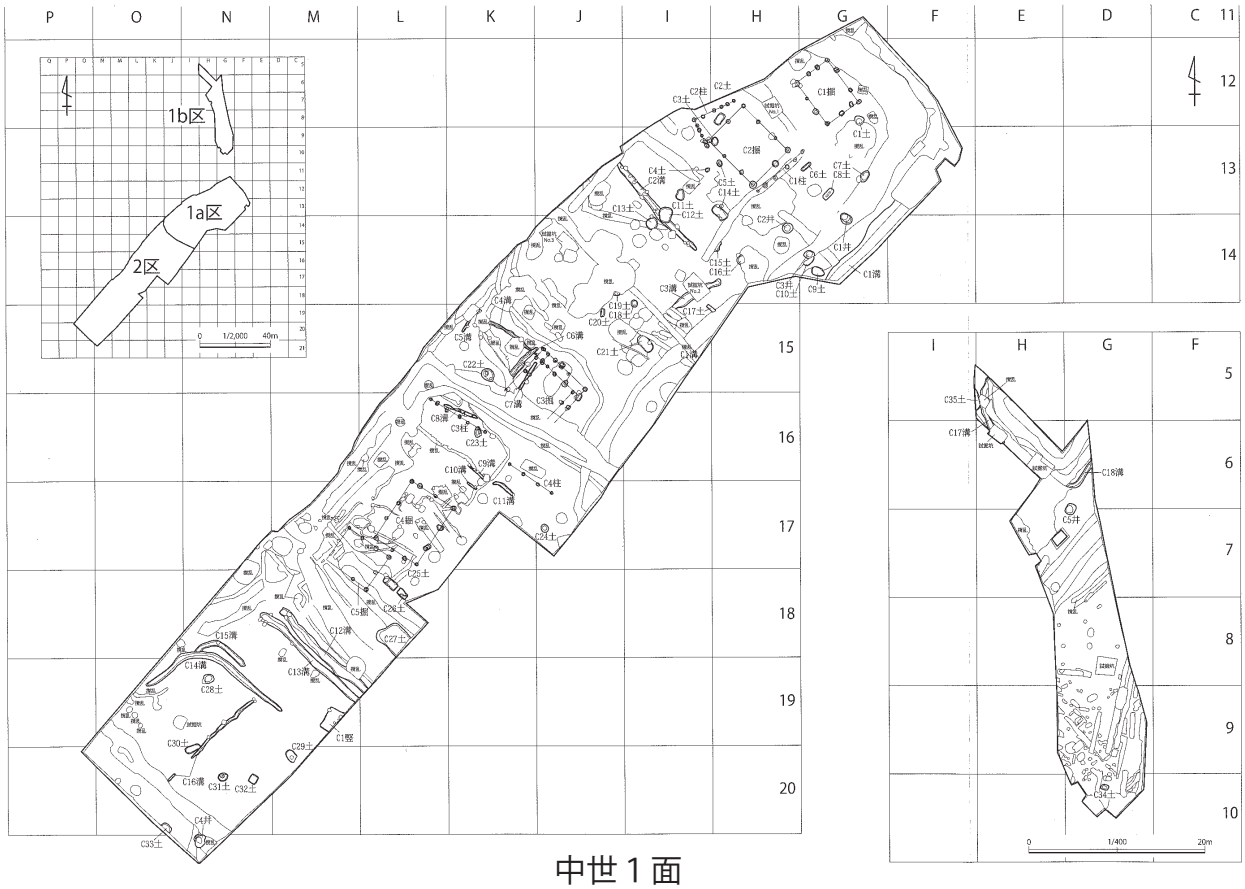
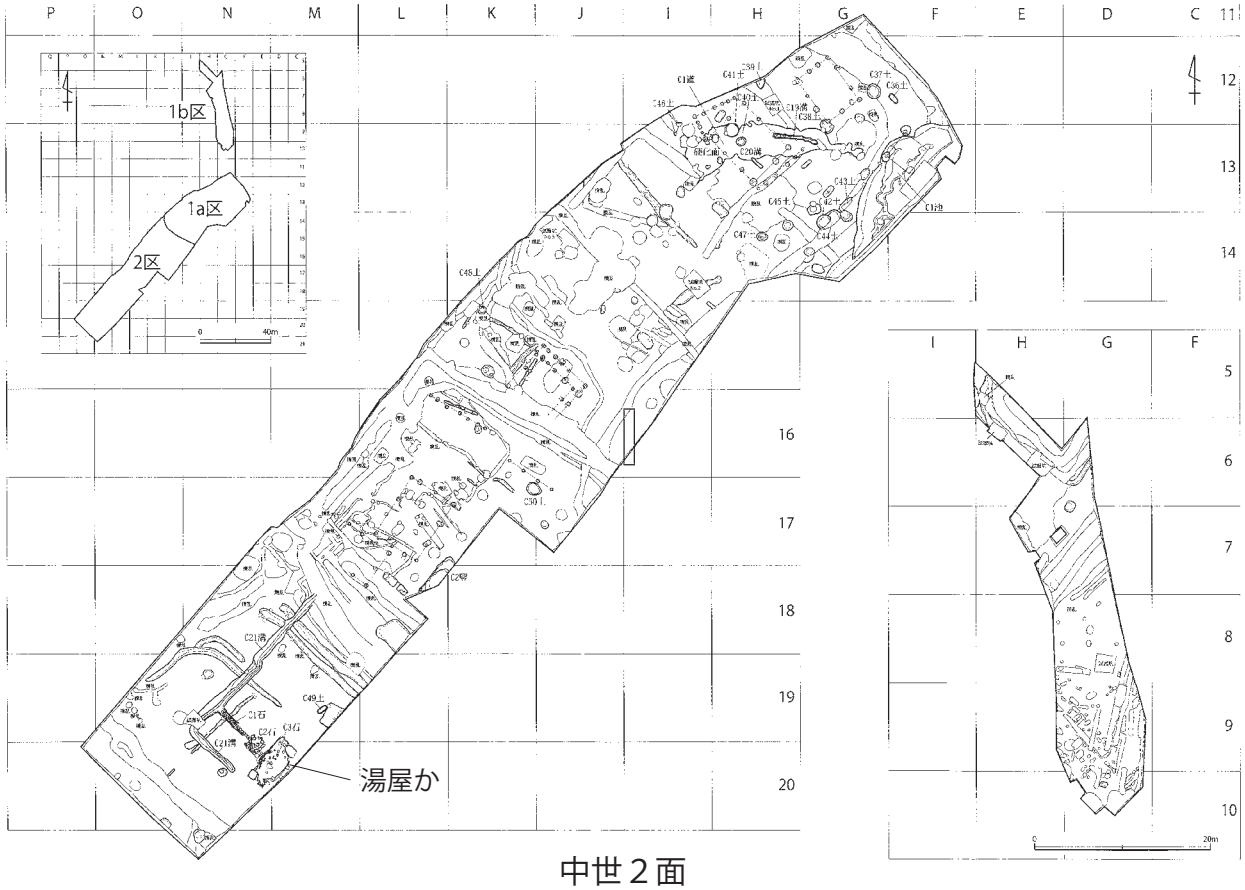


図９　上粕屋・和田内遺跡　中世墓と出土遺物

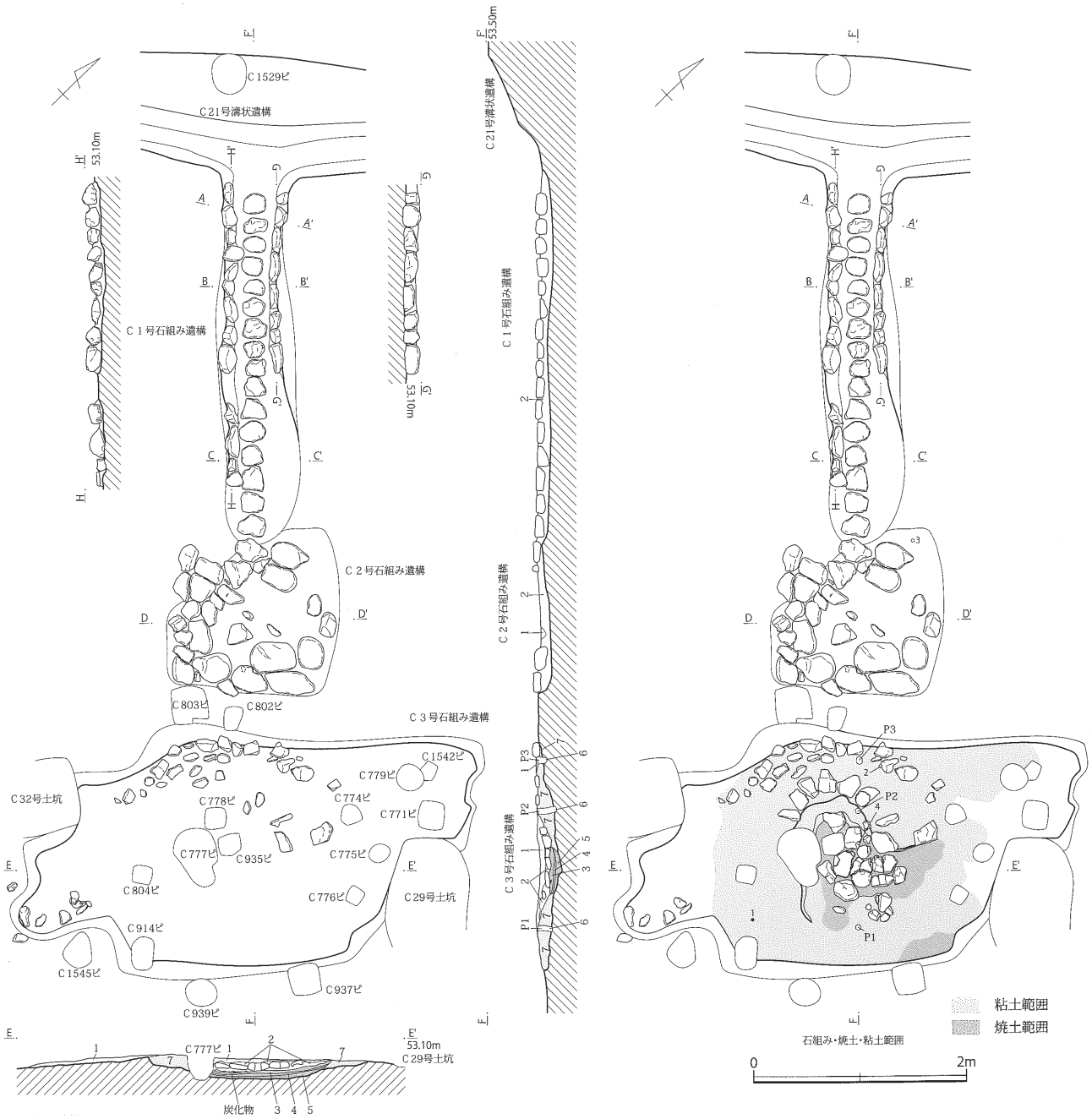


中世１面



中世２面

図10　上粕屋・和田内遺跡第２次調査　中世１・２面全体図



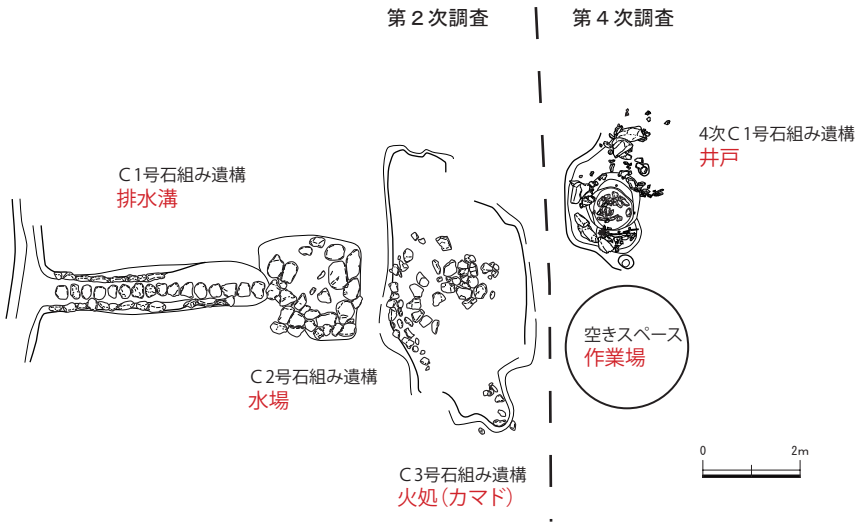


図11　上粕屋・和田内遺跡第２次調査　C１～３号石組み遺構

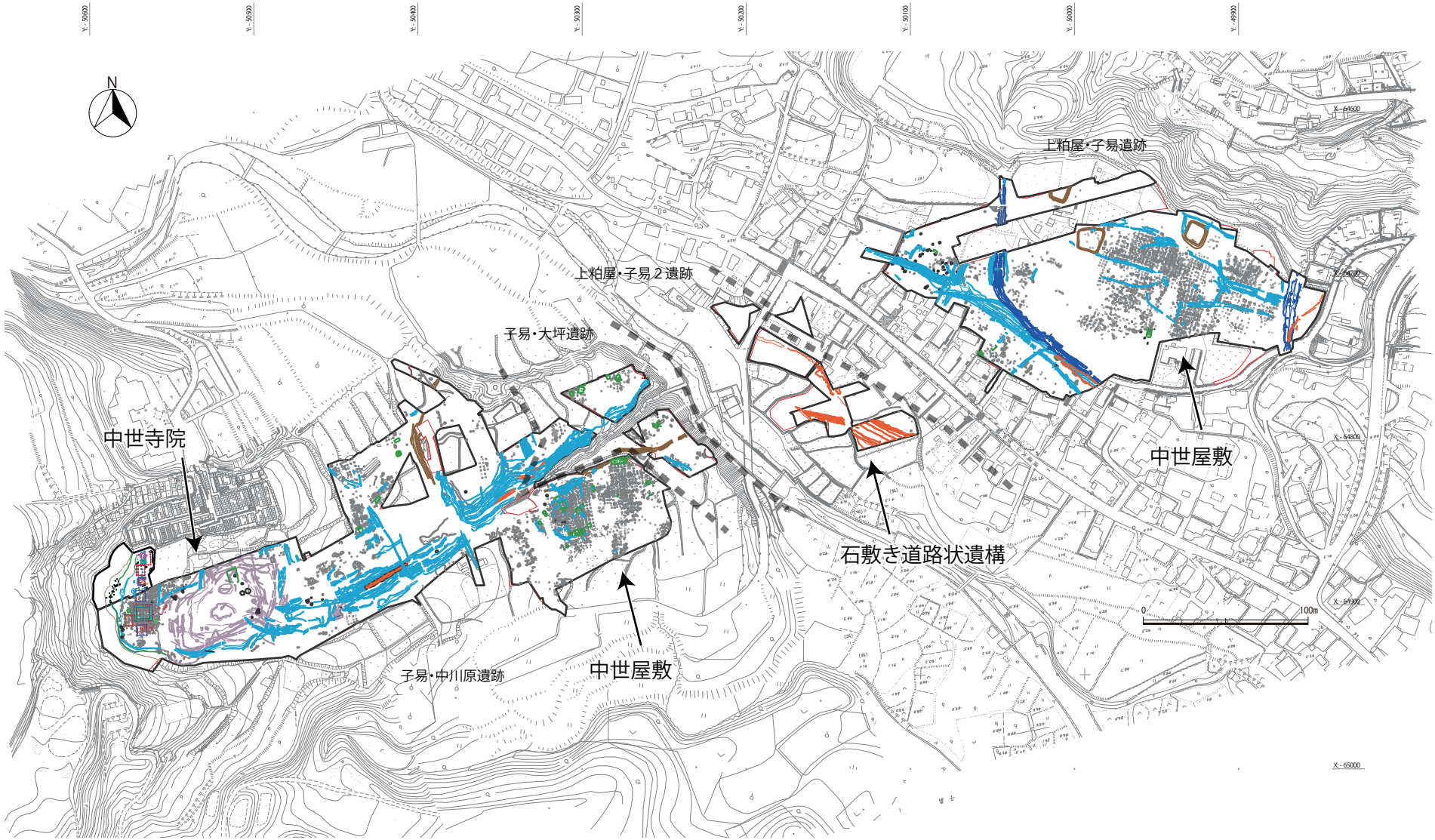


図12　子易地区中世遺構全体図

図13　上粕屋・子易遺跡　中世遺構配置図

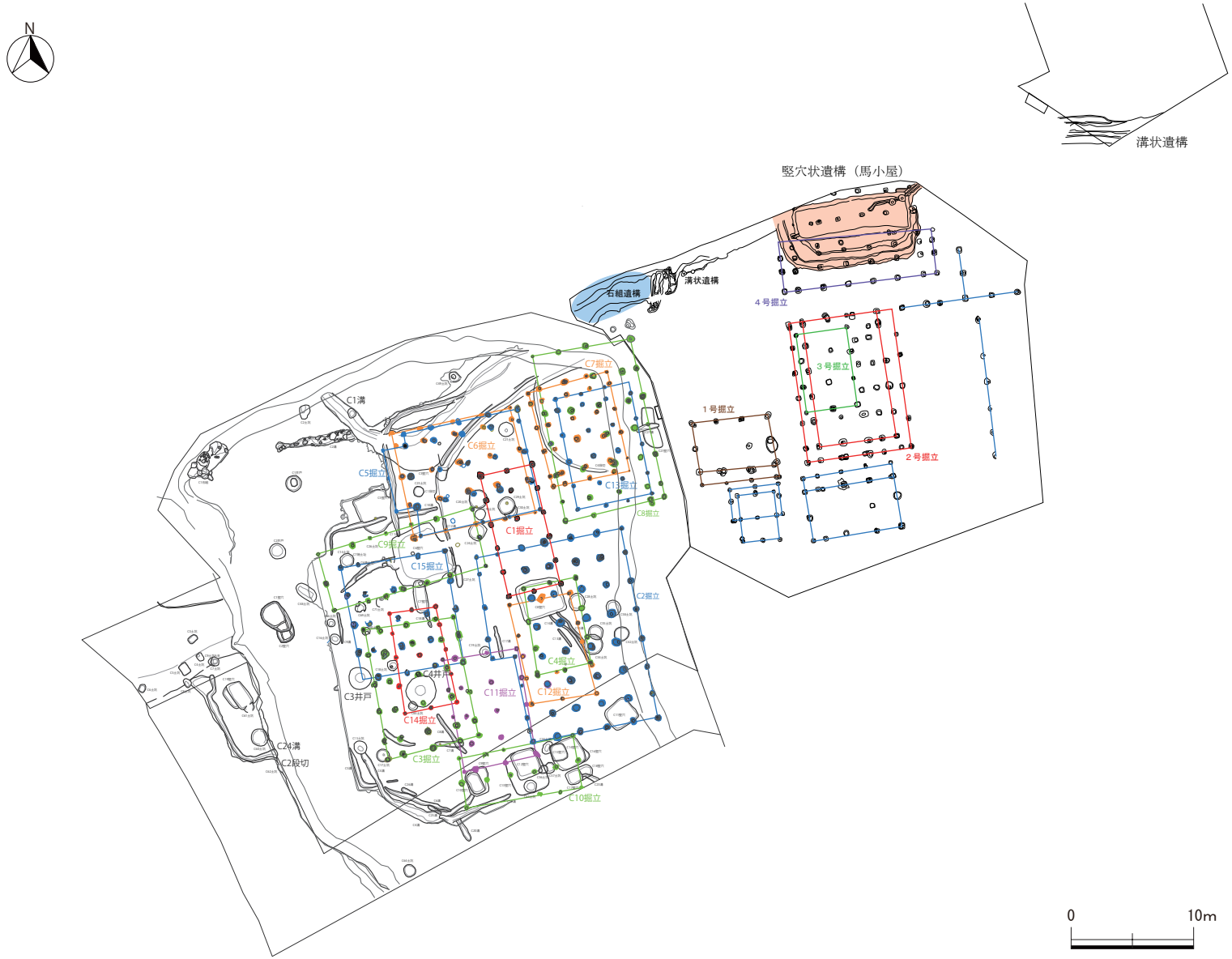


図14 子易・中川原遺跡　中世屋敷主要遺構図

図15 子易・中川原遺跡　中世寺院・池状遺構遺構図

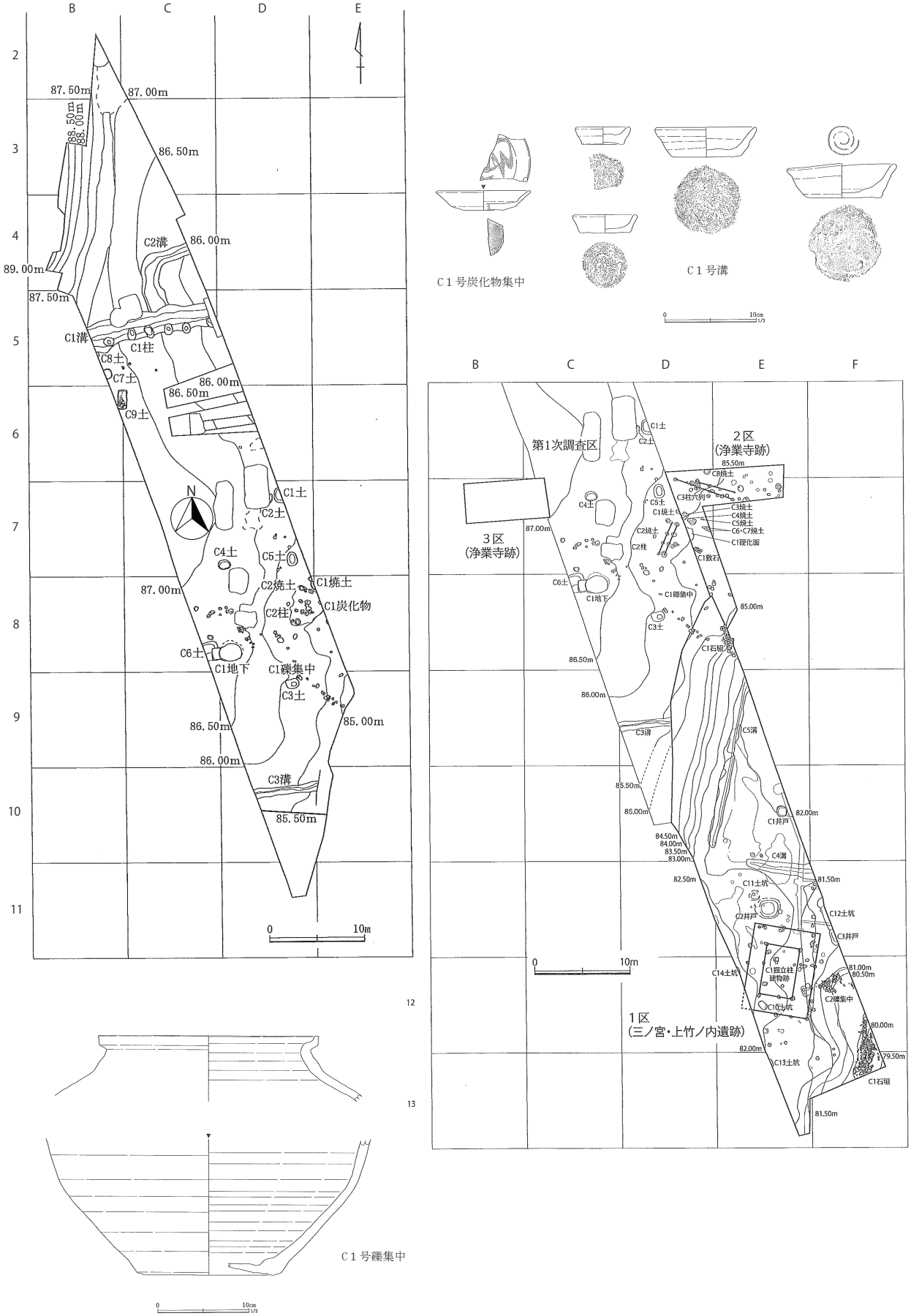


図16　浄業寺跡、三ノ宮・上竹ノ内遺跡　全体図と出土遺物

第 41 回日本貿易陶磁研究会研究集会

「最近話題の遺跡・注目される研究から」

Ⅱ　注目される研究

・白山平泉寺の貿易陶磁と日本海流通

勝山市教育委員会　阿部　来

・菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器

天草市観光文化部　中山　圭

・陶磁器からみた先島の集落遺跡と琉球帝国

国立歴史民俗博物館　村木二郎

・江戸遺跡出土貿易陶磁器の数量分析　－需要の検証－

東京大学埋蔵文化財調査室　堀内秀樹

白山平泉寺の貿易陶磁と日本海流通

阿部 来 （勝山市教育委員会）

はじめに

白山平泉寺の発掘調査は 1989 年にはじまり、その後も断続的に進められてきた。石畳道、石垣など石のインフラにより整備された多数の坊院群からは豊富な貿易陶磁が出土している。とりわけ 2007 年から 2010 年にかけて実施された整備事業に伴う発掘調査では、総計 10 万点以上の遺物が出土しており、この成果を中心に 2018・2020 年に報告書を刊行した（勝山市教育委員会 2018・2020）。

本報告の目的は、まず膨大な白山平泉寺の貿易陶磁について検討し、その結果を踏まえて越前若狭における様相を整理することである（図 1）。なお、白山平泉寺は天正 2 年（1574）に一向一揆によって全山焼亡したとされ、近隣では天正元年（1573）の一乗谷、天正 10 年（1582）の鳥越城跡といった定点をもつ資料がある。これらを交えつつ白山平泉寺の貿易陶磁についてその特徴を検討する。

Ⅰ 白山平泉寺の貿易陶磁

2020 年報告分の貿易陶磁は約 8000 点、調査面積当たりの出土量は約 1.79 点であり、12 世紀から 16 世紀中葉まで、連綿と出土している（図 2、3）。

白磁は碗Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ類などからⅨ類、森田 B 群、C 群等が定量見られ、D 群になると急激に出土量が増加する。また E 群はさらに増加し、安定して出土する。とくに、D 群、E 群については、普遍的な器形に加えて、幅広い高台をもち内定面を輪状に釉剥ぎする首里タイプ、見近島タイプの磁質皿、無高台の菊皿、白濁釉で貫入が目立ち口縁端部を釉剥ぎする鳥の子皿など、多彩なバリエーションが確認できる。このような多様なタイプの存在は、物流の一つの大きな流れの終着点としての大消費地、平泉寺の位置を示すものであろう。また、白磁の大型品は中世前期の壺や水注などがみられる。

青磁は、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗から出土がはじまり、碗Ⅱ類、碗Ⅳ類などがあり、15 世紀代には急増する。碗 B、C、D、E 群は豊富で並行する稜花皿も非常に多い。また景徳鎮窯系碗皿も定量確認できる。大型品は、盤類のほか香炉や花生、乳鉢などがある。

青花は 15 世紀代の碗 B から 16 世紀第 3 四半期までの食膳具が出土している。皿 B1 群が最も多く、皿 E 群、C 群も多く出土している。皿に比して碗は極端に少なく、破片数にしておおよそ 20:1 の割合である。一乗谷と比べると、先行して購入されたであろう青磁碗の出土量が極めて多いことや、山間地のため漆器、木器が充実していた可能性、社会的性格の違いなど複数の要因を反映した結果であろう。なお、文様意匠が斉一な個体が多数みられ、一括での購入と考える。被熱痕は皿 B1、C にほぼ限定されているため、16 世紀前葉頃に火災にあった可能性もある。ただし、瀬戸製品や越前焼などにはそれほど明確な傾向は確認できず、1574 年の全山焼亡時における組物での一括保管による被熱とも考える。なお、一定量が出土した内湾輪花皿は、流通開始は 1570 年代に引き上げることができよう。

また、各調査地点からは、長頸瓶、短頸扁壺、梅瓶、酒会壺などの元青花が出土しており、坊院毎に数個体を所有していた状況がうかがえる。このほかに安南青花碗、華南緑釉盤、皿、青白磁碗、合子、梅瓶、翡翠釉酒会壺、朝鮮鉢、小皿、瓶、碗などがある。

Ⅱ　越前若狭における貿易陶磁の様相

平泉寺の様相をもとに越前若狭とその周辺を対象として貿易陶磁を整理する(阿部 2016a･b)。越州窯系青磁は、駅家である木崎遺跡、寺跡の可能性が高い鐘島遺跡、福井城跡下層で出土している(図 4、表 1)。今後、国府周辺の状況が明らかとなれば、様相が一変する可能性もあるが、この段階では貿易陶磁はごく限られた階層の所有物といえる。

12 世紀以降は白磁碗Ⅱ･Ⅳ･Ⅴ、龍泉窯系青磁碗Ⅰ･Ⅱなどが普遍的にみられ出土量も増加しており、貿易陶磁が幅広い階層に受容されている。白磁四耳壺、青白磁合子、青白磁梅瓶、青磁酒会壺など食膳具以外の品々は、経塚のほか、拠点的な遺跡で出土している。

平泉寺の発掘調査は、石畳道や石垣といった中世後期の遺構面を保護することが前提であり、中世前期の状況を直接知ることは難しいものの貿易陶磁の出土量は、周辺の猪野口南幅遺跡、大渡西布遺跡、荒土杉原遺跡、三谷遺跡などの集落遺跡に比べて圧倒的に多い。平泉寺は、中世前期においても豊富な貿易陶磁を所有する特別な場であったと考える。

また、流通という視点からは、沿岸部の厨海円寺遺跡において、中国製陶器壺が出土していることに注目したい。これは流通の副産物といえるものであり、小浜や敦賀を経由する日本海海運がすでに経路として機能していたことを示すのであろう。

中世後期についても周辺を含めて出土量や組成に注目して整理すると、平泉寺、一乗谷は発掘地点による差はあるもののおおむね㎡あたり 0.7～1 点程度の出土量である(表 2)。寺院、城館、村落では㎡あたり 0.5 点未満であり、明瞭な差がよみとれる。

青磁、白磁、青花の組成比をみると、1574 年焼亡の平泉寺は青磁:白磁:青花＝23.8%:47.5%:28.7%、1573 年炎上の一乗谷は 26.5%:43.2%:30.3%と白磁が最も多い。1582 年に落城した白山麓の加賀国鳥越城跡における滝川重徳氏の詳細な検討成果(滝川 2016)を参照すると、青磁:白磁:青花＝3.8%:43.8%:52.4%であり、青花優勢となっている。1570 年代～82 年における移行期の様相を端的に示すものであろう。

さらに、平泉寺、一乗谷、鳥越城の青磁、白磁、青花の主要な型式と出土量の関係を検討すると、青磁碗 BⅣが平泉寺では多く、一乗谷、鳥越城跡の順で減少している(表 3)。白磁は 15 世紀代が主となる皿 D 群が平泉寺では多いものの、主体となるのはE2 端反皿である。また、E4 菊皿は一定量出土している。鳥越城ではこのほかに内湾皿 E1 が多くみられる。また、いずれの遺跡でも釉調が灰色がかり、胎土は暗灰色の一群を含む。青花碗は C 群が主体で、E 群も同程度存在する。皿は B1 群が最も多く、C 群、E 群が続くが、鳥越城と平泉寺 2020 報告分ではより後出的な E 群の方が多い。鍔皿 F も確実に出土している。また、粗製青花は平泉寺、一乗谷、鳥越城ともに確認できる。以上の様相は、1570～80 年代における北陸西部の典型的なあり方と考える。

貿易陶磁の組成で注目したいのは、朝鮮陶器である。その出土量をみると小浜は極めて多く、一乗谷がこれに次ぎ、平泉寺や鳥越城では僅少である。日本海側の諸遺跡においては沿岸部からの距離と朝鮮陶器の出土量に相関関係が認められ、とくに小浜は山陰地域に匹敵する出土量がある。また、一乗谷は内陸に位置するものの、朝鮮陶器の出土量が多く、海運との接続性の高い物流機能を保持していた可能性が高い。

おわりに

白山平泉寺の貿易陶磁は、中世前期から地域における拠点と評価しうる出土量と内容が確認できた。また、中世後期には種類、量ともによりさらに豊富となる。本来、貿易陶磁の流通において不利な山間地でありながら、特殊な製品を多く保有することは注目できよう。特殊な製品は、近隣市場における購入とともに、商人との売買、坊院による商行為や贈答などがあった可能性を考えたい。

〈引用・参考文献〉

阿部　来2016a「中世前期における越前若狭の輸入陶磁器」『石川県埋蔵文化財情報』第35号公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　24-26頁

阿部　来2016b「中世後期における越前若狭の貿易陶磁―白山平泉寺旧境内と一乗谷朝倉氏遺跡を中心に―」『貿易陶磁研究』No.36日本貿易陶磁研究会　68－80頁

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会　55－70頁

上田秀夫1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』1関西近世考古学研究会　56－74頁

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会　71-88頁

小野正敏1985「出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416東京国立博物館　20－28頁

小野正敏2003「威信財としての貿易陶磁と場」『戦国時代の考古学』高志書院　553－564頁

小野正敏2006「さまざまな「伝世」、そして修復」『貿易陶磁研究』No.28　日本貿易陶磁研究会　1－11頁

勝山市2006『勝山市史　第2巻　原始～近世』

勝山市教育委員会2008『史跡白山平泉寺旧境内発掘調査報告書―南谷坊院跡内容確認発掘調査・発掘調査等事業―』

勝山市教育委員会2018『白山平泉寺旧境内―国庫補助事業発掘調査報告　遺構編―』

勝山市教育委員会2020『白山平泉寺旧境内―国庫補助事業発掘調査報告　遺物編―』

柴田圭子2001「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価―中国・四国地方の遺跡を中心に―」『中世土器研究論集』日本中世土器研究会　111－122頁

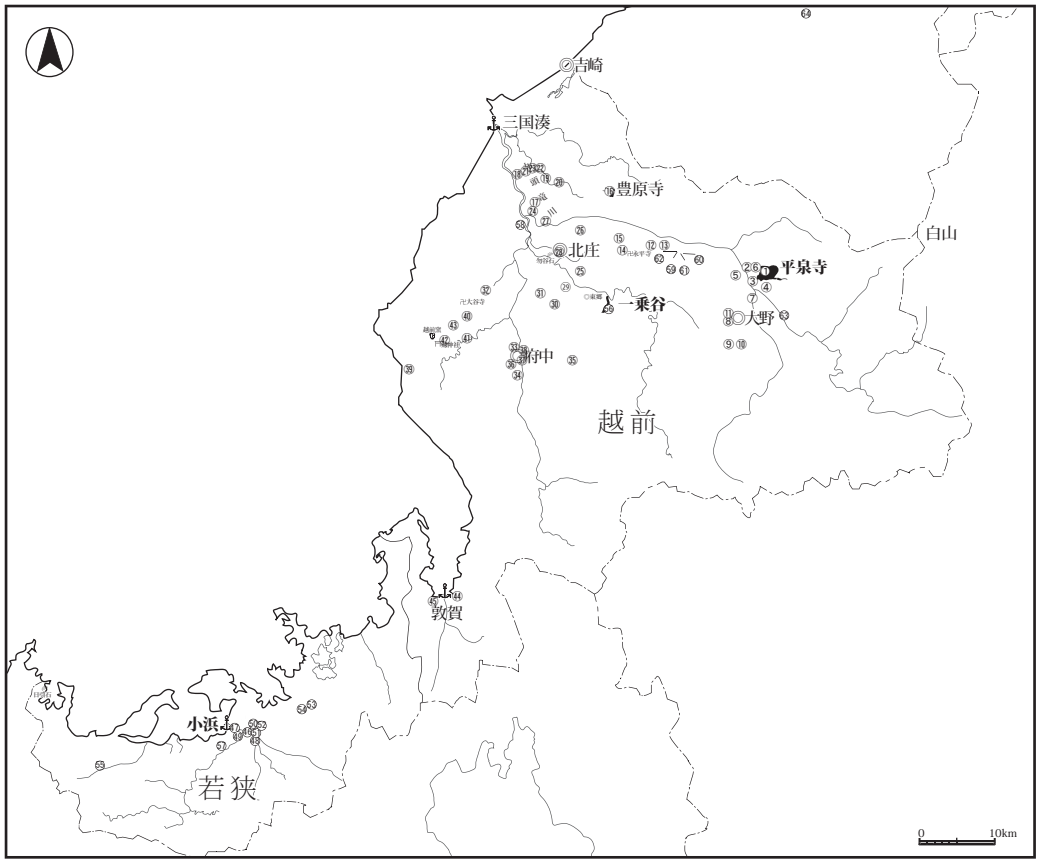
滝川重徳2016「鳥越城跡出土貿易陶磁の特徴」『鳥越城跡発掘調査報告書』白山市教育委員会　364－367頁

水澤幸一2009『日本海流通の考古学』高志書院

水澤幸一2014「戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像―十五世紀中葉～十六世紀中葉を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第182集国立歴史民俗博物館　45-73頁

森田　勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会　47-54頁

山本信夫（宮原亮一編）2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会



1 白山平泉寺旧境内
2 荒土杉原遺跡
3 猪口南幅遺跡
4 大渡西布遺跡
5 志田神田遺跡
6 三谷遺跡
7 太田小矢戸遺跡
8 下丁遺跡
9 下黒谷遺跡
10 上舌遺跡
11 尾永見遺跡・下田遺跡
12 堂山城跡
13 轟遺跡
14 京善藤谷口遺跡
15 諏訪間興行寺遺跡
16 豊原寺跡
17 江留下遺跡
18 坂井兵庫遺跡群
19 上蔵垣内遺跡
20 若宮遺跡
21 大味地区遺跡群・大味中遺跡
22 大関東遺跡
23 大関西遺跡
24 石盛遺跡
25 曽万布遺跡
26 林藤島遺跡（泉田地区）
27 中角遺跡
28 福井城跡
29 小稲津遺跡
30 糞置遺跡
31 今市遺跡（豆田地区）
32 鐘島遺跡
33 安丸官人遺跡
34 徳神遺跡
35 戸板山古墳群
36 丹生郷遺跡
37 家久遺跡
38 持明寺遺跡
39 厨海円寺遺跡
40 小倉石町遺跡
41 天王前山古墳
42 劔神社境内遺跡
43 大谷寺遺跡
44 舞崎経塚
45 木崎遺跡・木崎経塚
46 西縄手下遺跡
47 府中石田遺跡
48 若狭姫神社裏経塚
49 太興寺２号古墳
50 加茂遺跡
51 下見定遺跡
52 下松塚遺跡
53 曽根田遺跡
54 黒田寺
55 石山城跡
56 一乗谷朝倉氏遺跡
57 若狭武田氏館跡
58 法土寺遺跡
59 西ノ館跡
60 藤巻館跡
61 東ノ館跡・新右衛門館跡
62 栗住波遺跡
63 松丸館跡
64 鳥越城跡

図1　関連遺跡位置図

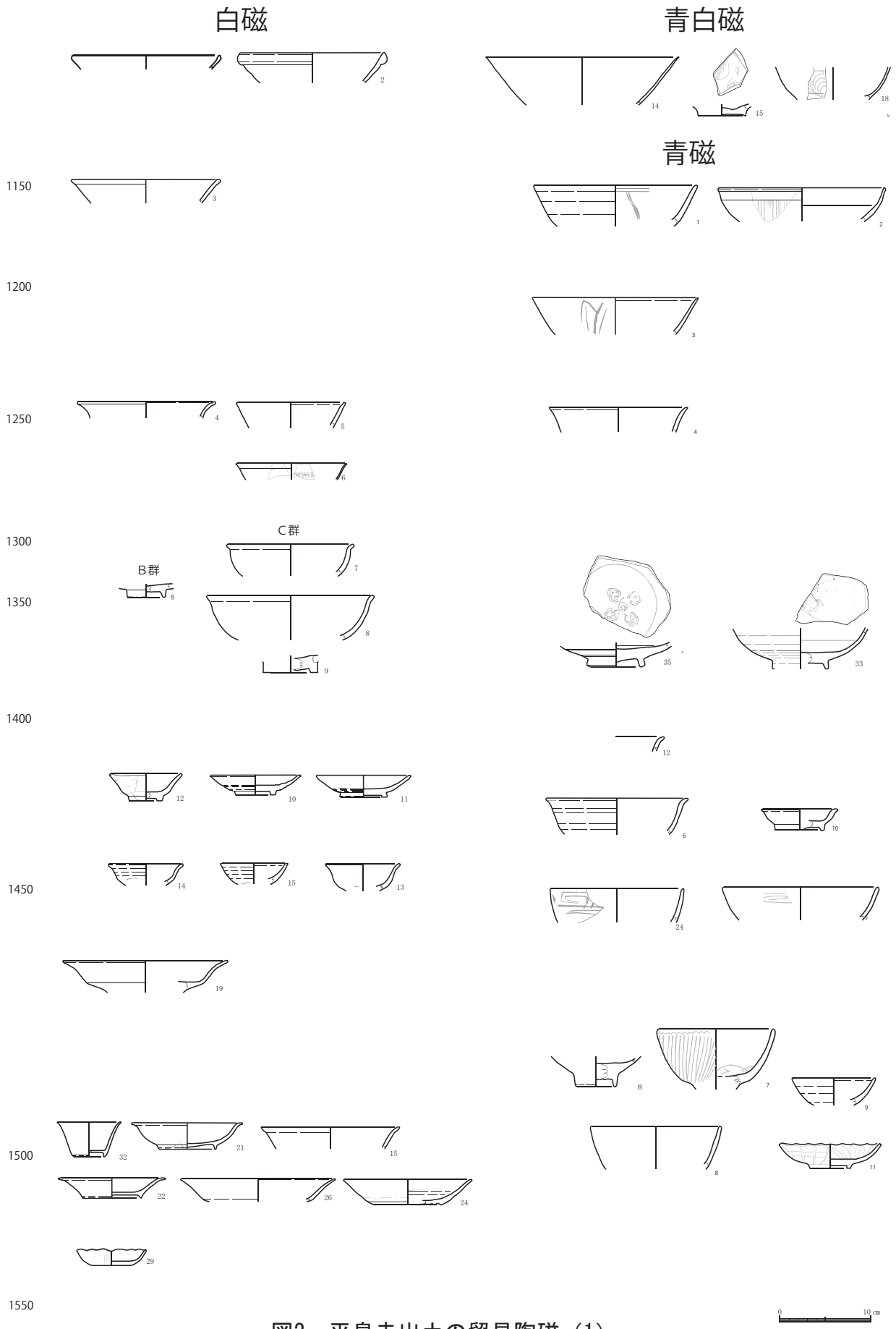


図2　平泉寺出土の貿易陶磁（1）

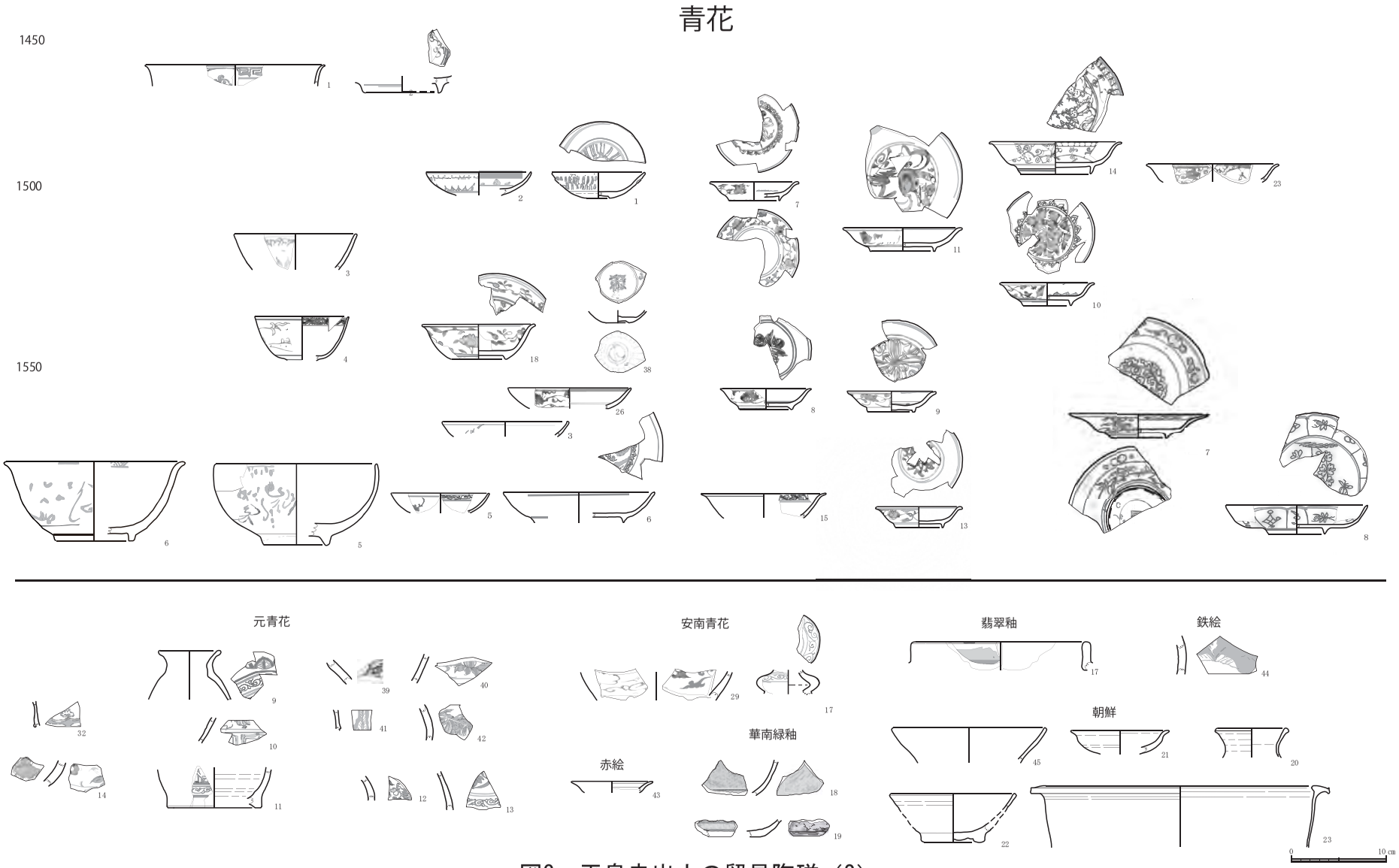


図3　平泉寺出土の貿易陶磁（2）

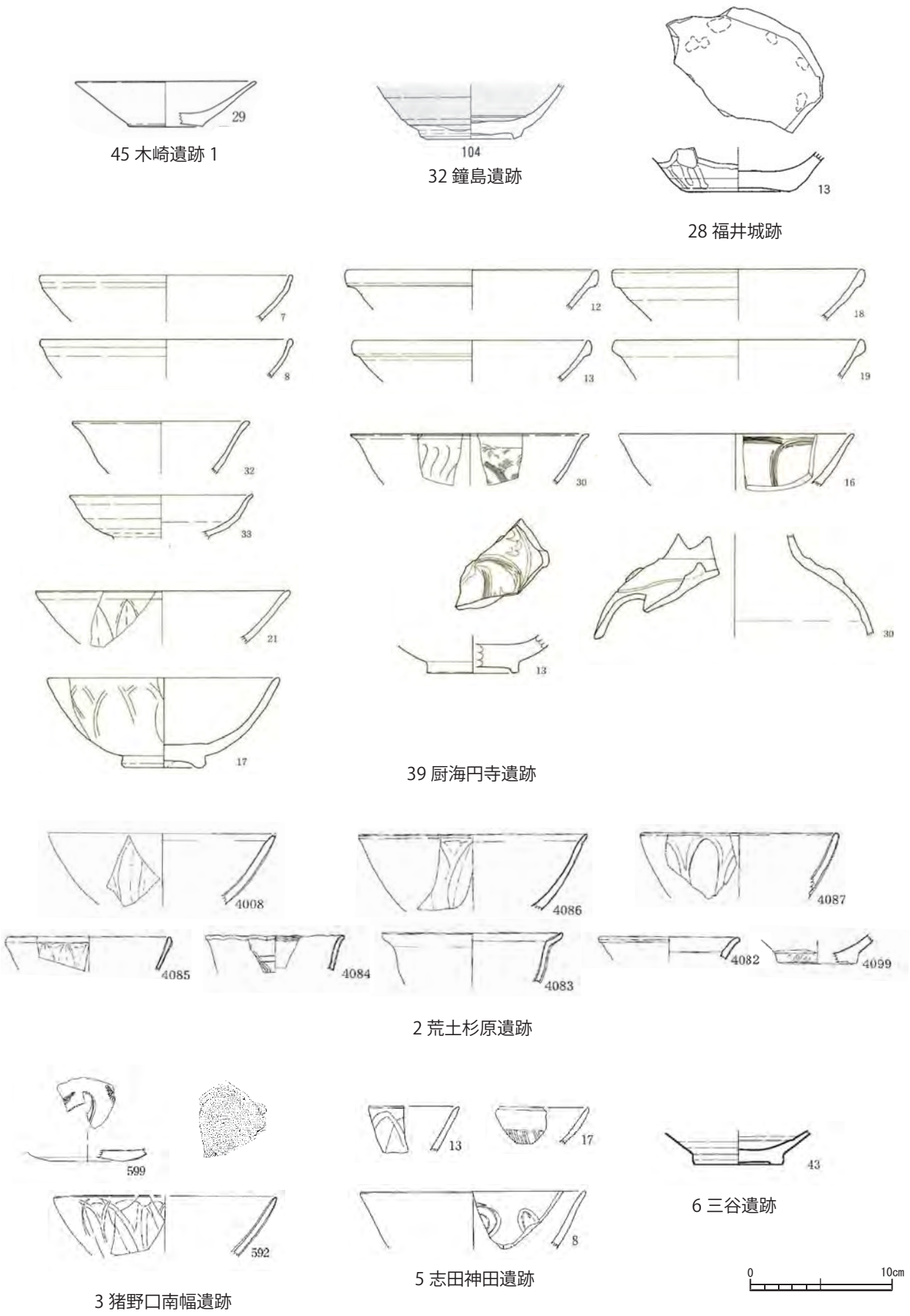


図 4　古代～中世前期の貿易陶磁

No.	遺跡	白磁											龍泉窯系青磁										同安窯系青磁		青白磁				越州窯青磁		褐色系陶器	黒釉
		碗					皿				壺類	その他	碗			小碗		坏		皿			碗	皿	碗皿	水注	梅瓶	その他	碗	鉢	四耳壺	天目
		Ⅱ～Ⅴ Ⅰ～3・Ⅵ	Ⅶ・Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	その他	Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ	Ⅲ・Ⅷ	Ⅸ	不明			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ	?	Ⅰ～Ⅳ	Ⅰ					Ⅰ			
1	平泉寺急傾斜地1	2													3																	
	平泉寺急傾斜地2	2																														
	平泉寺急傾斜地3	9					1			1	1		1										1									
	平泉寺H13~18出土点数	68	6	3	24	4	7	2	24		103	1	54	127	9			39	2	24	2		20	5	2	6	72	7				
2	荒土杉原遺跡	2												3				2						1								
3	猪口南幅遺跡													1													1					
4	大渡西布遺跡	1												1																		
5	志田神田遺跡												1										1									
6	三谷遺跡	2																														
7	太田小矢戸遺跡1		1			1			1					1									1					2				
	太田小矢戸遺跡2	11							1					2													1	1				
8	下丁遺跡	8											1							1				3								
9	下黒谷遺跡												1	1													1					
10	上舌遺跡	2												1									1									
11	尾永見遺跡・下田遺跡	1												1																		
12	堂山城跡							1																								
13	轟遺跡								1					1				1														
14	京善藤谷口遺跡										1																					
15	諏訪間興行寺遺跡1		4						1			1	5	8		1	1	1		1			2	3								
	諏訪間興行寺遺跡2	4	1					1	2		2	1	6	3						1			1	1			1					1
16	豊原寺跡	5											1																			
17	江留下遺跡													3						1			2									
18	坂井兵庫遺跡群	6											1		2																	
19	上蔵垣内遺跡	2												3																		
20	若宮遺跡	5					2						1																			
21	大味地区遺跡群													1										1								
	大味中遺跡											1																				
22	大関東遺跡													2																		
23	大関西遺跡	6					2																									
24	石盛遺跡													1																		
25	曽万布遺跡	4												1										1								
26	林藤島遺跡（泉田地区）												2	2																		
27	中角遺跡						1																									
28	福井城跡																													1		
29	小稲津遺跡																															
30	糞置遺跡																															
31	今市遺跡（豆田地区）												1	1																		
32	鐘島遺跡																													1		
33	安丸官人遺跡1	8					1						1	5																		
	安丸官人遺跡2										1																					
34	徳神遺跡	3																														
35	戸板山古墳群	2																														
36	丹生郷遺跡	2																														
37	家久遺跡										1																					
38	持明寺遺跡	8																														
39	厨海円寺遺跡	43	2				1	4		2			18	2	1			1					1				1				1	1
40	小倉石町遺跡	23					1				2		3	2																		
41	天王前山古墳																															
42	劔神社境内遺跡												1																			
43	大谷寺遺跡	2																														
44	舞崎経塚																					1			2			5				
45	木崎遺跡1	14					1																			1			1			
	木崎遺跡2	4						1																								
	木崎経塚																											2				
46	西縄手下遺跡	3																														
47	府中石田遺跡					1																						1				
48	若狭姫神社裏経塚																											1				
49	太興寺2号古墳	5																														
50	加茂遺跡	6	1																													
51	下見定遺跡	3																														
52	下松塚遺跡	1																						1								
53	曽根田遺跡	6												1																		
54	黒田寺									1	1			2																		
55	石山城跡	1												1																		

※報告書掲載数（平泉寺 H13 ～ 18 除く）

表 1　古代～中世前期の貿易陶磁集計表

1平泉寺（13～16中葉を中心とする）	調査㎡	青磁	白磁	青花	赤絵	青白磁	釉裏紅	華南彩釉	翡翠・瑠璃釉	朝鮮	タイ	安南	黒・褐釉他	計	貿易陶磁/㎡	朝鮮×100/㎡	土器陶磁器計	土器%	総計/㎡
鬼ヶ市	300	56	51	17		3							1	128	0.43	0.00	1907	78%	6.36
南谷坊院H13～18	5446	2309	2096	746		92		4	5	13			245	5510	1.01	0.24	96365	75%	17.69
南谷坊院他H19～22	4338	2295	3161	1928	3	71		7	4	32		2	283	7786	1.79	0.74	98586	74%	22.73
南谷坊院H1	234	65	74	17						1				157	0.67	0.43	2013	67%	8.60
鬼ヶ市2	410	20	6	4										30	0.07	0.00	309	44%	0.75
伝賢聖院周辺	555	516	269	0								1	4	997	1.80	0.00	7752	33%	13.97
南谷石畳周辺	700	250	97	48									4	399	0.57	0.00	5313	33%	7.59
合計・平均	11983	5511	5754	2760	3	166		11	5	46		3	537	15007	1.25	0.38	212245	71%	17.71
南谷坊院H13～18（15～16c綿皇）	5446	1116	1687	746				4	5	13			254	3825	0.70	0.24	*	*	*
南谷坊院他H19～22（15～16c綿皇）	4338	1104	2736	1928	3			7	4	32		2	283	6099	1.41	0.74	*	*	*
中世後期合計・平均	9784	2220	4423	2674	3			11	9	45		2	537	9924	1.01	0.46	*	*	*

※破片数、報告書及び筆者計量による

56一乗谷（15～16中葉を中心とする）	調査㎡	青磁	白磁	青花	赤絵	青白磁	釉裏紅	華南彩釉	翡翠・瑠璃釉	朝鮮	タイ	安南	黒・褐釉他	計	貿易陶磁/㎡	朝鮮×100/㎡	土器陶磁器計	土器%	総計/㎡
朝倉館	6169	467	589	480						65			26	1627	0.26	1.05	65344	92%	10.59
68次朝倉景鏡館	3800	101	147	156	5					9		1	3	422	0.11	0.24	32336	97%	8.51
64・65次南陽寺	3200	167	214	182						7			2	572	0.18	0.22	35672	94%	11.15
109次新御殿	2000	86	99	64						3				252	0.13	0.15	16047	94%	8.02
4・13次中の御殿	3590	169	598	245	4					24				1040	0.29	0.67	30495	91%	8.49
59次	1200	243	539	546				1		46				1375	1.15	3.83	40393	89%	33.66
57次武家屋敷	2560	1037	953	416	5			29		18			33	2491	0.97	0.70	58242	89%	22.75
82次武家屋敷	1920	297	288	219						54			2	860	0.45	2.81	35323	86%	18.40
130次	2500	341	736	288		1				12			142	1520	0.61	0.48	24719	85%	9.89
54次武家屋敷(鍛冶屋監)	1800	158	259	171						1				589	0.33	0.06	15631	84%	8.68
61・62次上城戸	4000	196	260	220				1		26				703	0.18	0.65	19187	79%	4.80
58次武家屋敷・町屋	1310	348	364	277				1		20			5	1015	0.77	1.53	16093	78%	12.28
10・11次武家屋敷(新馬場)	3665	225	264	162						12			13	676	0.18	0.33	11793	76%	3.22
127次	2000	103	177	92						28			1	401	0.20	1.40	8397	77%	4.20
56・85次下城戸	1200	74	88	70						13			2	247	0.21	1.08	5590	78%	4.66
49次小規模武家屋敷	1300	315	495	433		7				43			3	1296	1.00	3.31	18025	72%	13.87
15・25次A地区武家屋敷	1800	320	454	511		6				60				1351	0.75	3.33	14695	65%	8.16
40次	3000	1254	2781	2330	1			8	1	186			12	6573	2.19	6.20	84775	64%	28.26
77・78次武家屋敷	1350	135	138	87	3					22				385	0.29	1.63	5968	64%	4.42
20次武家屋敷(魚住出雲守か)	2200	154	246	285						9				694	0.32	0.41	11875	63%	5.40
97・98次御所安養寺	1800	153	96	89						29				367	0.20	1.61	5261	60%	2.92
118次	3000	512	845	618	1		1	4		46			32	2059	0.69	1.53	24977	60%	8.33
17字町屋と寺院	2050	497	1181	1010				16	3	206	25		43	2981	1.45	10.05	37705	58%	18.39
29次町屋	1148	344	664	678	1	1				14				1702	1.48	1.22	21781	58%	18.97
35次下城戸町屋	1630	328	636	414	3			11		122	0			25	0.02	7.48	25898	57%	15.89
104次月見櫓下	2000	578	722	467		5				105			160	2037	1.02	5.25	15777	56%	7.89
124次	2500	646	1083	915	2			4		130			42	2822	1.13	5.20	39275	55%	15.71
51次医者の家、町屋	1720	1362	2571	1443		183		3		272			41	5875	3.42	15.81	41976	55%	24.40
24次武家屋敷	2300	206	200	141						22			15	584	0.25	0.96	7458	53%	3.24
102次宇斎藤武家屋敷	1077	424	748	207						1			4	1384	1.29	0.09	5100	53%	4.74
114次	1700	463	571	414	1			5	7	44			16	1521	0.89	2.59	13173	53%	7.75
100次河合安芸守	2600	330	418	413						27			12	1200	0.46	1.04	13760	52%	5.29
83次武家屋敷	1300	209	561	222						32				1024	0.79	2.46	6733	49%	5.18
86・144次等西山光照寺	5500	1018	1794	1363		5		90	15	437		1	748	5471	0.99	7.95	49833	45%	9.06
112次武家屋敷と町屋	2000	323	289	227						10			49	898	0.45	0.50	5981	41%	2.99
113次	1700	358	567	363				2	1	29	4		131	1455	0.86	1.71	10619	39%	6.25
50次武家屋敷、町屋	1300	544	773	622		2				32	1		58	2032	1.56	2.46	18073	38%	13.90
52次中級武家屋敷、町屋	1930	646	1778	840	1	6				74			3	3348	1.73	3.83	15600	34%	8.08
44次町屋	2600	638	1443	1331						93			9	3514	1.35	3.58	27409	33%	10.54
29・30次中級武家屋敷町屋	1740	278	309	285						2				874	0.50	0.11	15663	32%	9.00
合計・平均	92159	16047	26938	19296	27	216	1	175	27	2385	30	2	1607	65262	0.71	2.59	952652	69%	10.34

※破片数、各報告書・概報による

57小浜（15～16中葉を中心とする）	調査㎡	青磁	白磁	青花	赤絵	青白磁	釉裏紅	華南彩釉	翡翠・瑠璃釉	朝鮮	タイ	安南	黒・褐釉等	計	貿易陶磁/㎡	朝鮮×100/㎡	土器陶磁器計	土器%	総計/㎡
若狭武田氏館跡H2425	280	197	98	0						31		0		383	1.37	11.07	*	*	*

※破片数、報告書及び筆者計量による

	調査㎡	青磁	白磁	青花	赤絵	青白磁	釉裏紅	華南彩釉	翡翠・瑠璃釉	朝鮮	タイ	安南	黒・褐釉他	計	貿易陶磁/㎡	朝鮮×100/㎡	土器陶磁器計	土器%	㎡/点数
15諏訪間興行寺遺跡第Ⅲ期炭化物層（15第3四半）:寺院	3000	583	402	25									131	1141	0.38	0.00	3447	38%	1.15
55石山城跡（16）:城郭	16500	3	26	16						6				51	0.00	0.04	1371	92%	0.08
58法土寺遺跡（15～16）:寺院	10500	2277	673	1100									154	4204	0.40	0.00	38893	47%	3.70
59西ノ館跡（16中～後）:城館	9300	10	10	4										24	0.00	0.00	1174	83%	0.13
60藤巻館跡（16～17）城館	14350	32	76	37									18	163	0.01	0.00	3040	79%	0.21
61東ノ館・新右衛門館跡（16中～後）:城館	9200	9	3	5									3	20	0.00	0.00	420	61%	0.05
62栗住波遺跡（16）:城館	7000	8	13	6		1								28	0.00	0.00	338	40%	0.05
63松丸館跡（16）:城館	390	5	6	8										19	0.05	0.00	90	19%	0.23
3猪口南幅遺跡（12～16）:村落	1800	45	17	8		1								71	0.04	0.00	1358	82%	0.75
9下黒谷遺跡（13～16）:村落	10970	21	6	2		2								31	0.00	0.00	476	7%	0.04
25曽万布遺跡（13～16）:村落	8500	6	2	1									2	11	0.00	0.00	157	23%	0.02
64鳥越城跡本丸西の丸（16中～後）:城館	4450	34	391	468	3			8		2				906	0.20	0.04	3040	79%	0.68

※破片数、各報告書及び水澤2014、滝川2016、筆者計量による

表 2　中世後期の貿易陶磁集計表

遺跡名／陶磁器分類		青磁					白磁			青花									
		碗BⅣ	碗E	稜花皿	菊皿	輪花皿	皿D（内湾）	皿E2（端反）	皿E4（菊皿）	碗B	碗C	碗D	碗E	碗F	皿B1	皿C	皿B2	皿E	皿F
一乗谷10・11次 武家屋敷	面積3665㎡	47		41	10	21	11	205	43	4	40	9	14	0	48	42	0	5	0
	点数／面積×1000	12.8		11.2	2.7	5.7	3.0	55.9	11.7	1.1	10.9	2.5	3.8	0.0	13.1	11.5	0.0	1.4	0.0
朝倉義景館＊	面積6169㎡	28	15	3	30		11	242	13	0	53	0	111	1	118	37	5	30	3
	点数／面積×1000	4.5	2.4	0.5	4.9		1.8	39.2	2.1	0.0	8.6	0.0	18.0	0.2	19.1	6.0	0.8	4.9	0.5
一乗谷17次 町屋と寺院上層	面積2050㎡									0	50	2	38	0	106	50	45	30	0
	点数／面積×1000									0.0	24.4	1.0	18.5	0.0	51.7	24.4	22.0	14.6	0.0
一乗谷17次 町屋と寺院上層	面積2050㎡									0	35	7	18	0	151	24	45	0	0
	点数／面積×1000									0.0	17.1	3.4	8.8	0.0	73.7	11.7	22.0	0.0	0.0
一乗谷40次	面積3000㎡									0	344	5	164		399	350	42	28	1
	点数／面積×1000									0.0	114.7	1.7	54.7	0.0	133.0	116.7	14.0	9.3	0.3
一乗谷42次	面積4800㎡									3	126	10	46		288	107	39	18	15
	点数／面積×1000									0.6	26.3	2.1	9.6	0.0	60.0	22.3	8.1	3.8	3.1
一乗谷15次	面積2400㎡										8	44	12	0	188	46	3	2	0
	点数／面積×1000									0.0	3.3	18.3	5.0	0.0	78.3	19.2	1.3	0.8	0.0
平泉寺南谷坊院 H13～18	面積5446㎡	209	94	94	0	0	572	719	17	14	19	3	18	0	491	68	8	39	20
	点数／面積×1000	38.4	17.3	17.3	0.0	0.0	105.0	132.0	3.1	2.6	3.5	0.6	3.3	0.0	90.2	12.5	1.5	7.2	3.7
平泉寺南谷・周辺	面積4338㎡	269	80	112	36	2	518	1310	163	24	43	4	12		801	201	95	573	22
	点数／面積×1000	62.0	18.4	25.8	8.3	0.5	119.4	302.0	37.6	5.5	9.9	0.9	2.8	0.0	184.6	46.3	21.9	132.1	5.1
鳥越城跡 本丸・西の丸	面積4450㎡	11	3		1			166	18		8	1	2		123	5	1	108	出土
	点数／面積×1000	2.5	0.7	0.0	0.2	0.0	0.0	37.3	4.0	0.0	1.8	0.2	0.4	0.0	27.6	1.1	0.2	24.3	出土

※各報告書及び小野1982・2008、滝川2016による、＊は青磁個体数、

表 3　貿易陶磁の主要分類毎出土量

菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器

中山　圭（天草市観光文化部）

はじめに

熊本県菊池市の中心部に位置する隈府土井ノ外遺跡（以下、土井ノ外遺跡）は、県立菊池高校の校舎改築に伴い平成 17～18 年にかけて、約 4,400 ㎡の発掘調査が実施された。その結果、方形に区画された溝の内外に掘立柱建物跡、柵列跡が検出され、中世後期の大量の土師器皿や貿易陶磁器が出土した（熊本県教委 2009）。当該地近辺は、南北朝期に南朝を支え、戦国期には肥後国守護として君臨した菊池氏の本拠地があったと考えられており、東端の菊池神社・菊池公園を有する丘陵「城山」を起点に、東西軸の守護城下町が展開したと想定されている。現在の字界を見ても、「御所小路」等数本の軸的街路に面して方形区画が整然と展開しており、その名残を見ることができる。

菊池氏の居城は、元来、城山上の「菊池城跡（隈府城）」と理解されてきたが、平成 8 年に青木勝士氏が、全国で進展しつつあった中世都市研究の成果を基に、隈府町内に残る字名「屋敷」に着目、平地の守護館有力地として比定した（青木 1996）。この「屋敷」に東接する字が「土井ノ外」であり、南北朝期に下向していた懐良親王が手植えしたとされる「将軍木」もその区画に含む。その後に行われた土井ノ外遺跡発掘で上記成果が見られたため、当然、菊池氏居館としての可能性が論じられることとなった。ただし、調査報告書内ではその比定については慎重な見方をしており（熊本県教委 2009）、一方、青木氏は同遺跡を守護館の一部と評価している（青木 2020）。

このような中、筆者は報告書の実測図等から青磁琮形瓶など貿易陶磁器の奢侈品が出土していることを知り、これら遺物は土井ノ外遺跡の空間特性の復元上、大きな影響を与えるものとの認識を持ったが、そのことを指摘した先行研究は見られなかった。そのため、菊池市教育委員会が進めている「菊池一族の歴史文化資料の調査研究」事業の採択を受け、熊本県教育委員会が所蔵する土井ノ外遺跡の貿易陶磁器の研究を行い、成果を別稿にまとめたところである（中山 2021）。本稿は、一部、その成果と重複するが、土井ノ外遺跡の貿易陶磁器の出土状況とその特徴について論究するものである。

Ⅰ　新規に確認した貿易陶磁器

1．報告書の貿易陶磁器評価に関する問題点と未報告資料の抽出

調査報告書では、龍泉窯系青磁が 40 点図化されており、それ以外の貿易陶磁器は 8 点と少ない（熊本県教委 2009）。そのうち、年代の指標になりそうな青磁碗を見ると、無文端反碗（沖縄編年Ⅳ’-0 もしくはⅤ-0 類）、無鎬蓮弁文碗（同Ⅴ-1 類）、雷文帯碗（Ⅴ-2 類）、細線蓮弁文碗（Ⅵ-1 類）が見られ、特に雷文帯碗と細線蓮弁文碗の数が多く掲載されていた。このことから、15 世紀中葉～末、もしくは 16 世紀の早い時期までに遺跡の主体があるように見受けられた。しかしながら、報告書では遺構の切合い関係を基軸に、遺構の消長をⅢ期に区分し、それぞれⅠ期を 14 世紀後半～末、Ⅱ期を 14 世紀末～15 世紀初頭、Ⅲ期を 15 世紀初頭～前半と設定した（熊本県教委 2009）。この時期区分では、土井ノ外遺跡が 1 世紀に納まることとなり、また、各画期は 30 年程度となり、いささか窮屈となる。遺構の時期決定に関する基準も不明瞭で、最も出土量が多く、使用廃絶までのサイクルが短い遺物は土師器皿類である

が、未だ熊本地方では中世後期の詳細な編年は組まれていないため年代決定に利用しがたく、おそらく貿易陶磁器を参考に年代を定めたものと推測される。ところが、例えばⅠ期内で廃絶するとされる溝SD99 は、出土遺物の主体が雷文帯碗であるので、沖縄編年(瀬戸ほか 2008)に照らせば廃絶は早くとも15 世紀中葉と考えられ、報告書内の画期と相当のズレが生じる。

以上のように、報告書内の年代観にはやや問題があり再考が必要と思われる状況にあった。また、上述の琮形瓶や水注の注口部のような希少な遺物も図示されていたが、その特殊性等に関する評価も見られなかったため、貿易陶磁器を全般的に確認し検討することが遺跡・遺構の正確な位置づけにつながるものと思料され、研究に取り組むこととした。

調査は全貿易陶磁器の破片を実見するところから着手したが、想像以上に未報告の遺物が多く、中に、遺構出土でないとしても、遺跡の評価上、非常に重要な意義を持つと思われる破片も数多く見出された。また、近現代の陶磁器類は大きめのビニール袋に一定量ずつまとめられていたが、それぞれの袋に青花磁等菊池氏段階の遺物が含まれていることが判明したので、各袋より破片を取り出した上で一点一点チェックし、中世遺物の抽出を行った。その結果、青花磁も一定量出土しており、また彩釉陶磁すら含むことが判明した。このため、重要遺物の実測作業と、把握できた貿易陶磁器破片の点数カウントと分類作業まで実施した。以下、今回新たに確認できた資料を中心に紹介したい。

2. 資料紹介

図版の【○報】は報告書掲載の資料、それ以外は全て未報告遺物である。遺物は全て熊本県教育委員会の所蔵で、県文化課所管の文化財資料室に保管されている。

(1)青磁

図 3-1 は、龍泉窯系青磁琮形瓶。報告書に掲載されており、本研究の動機にもなった資料であるが報告書がモノクロ図版であったことから、色調が気になっていたものである。実見すると、釉色は紛青色に近い緑色であり、本例は南宋期の製品である可能性が高い。徳川美術館はじめ、全国的に伝世品が多い。出土資料としては、一乗谷朝倉氏遺跡や武田勝頼館跡(新府城跡)、東京大学構内遺跡(図 6-A)の例が知られている。

2 は瓶類に付くシンプルな耳である。鯱等の装飾ではないが、砧形瓶等頸部の長い部分に付属していたものと推察される。砧形瓶であれば、類例は伝世例が多い。3 は水注の注口部で、頸部と接続するブリッジの一部が残存。その文様は巻雲文である。類例は首里城京の内跡(D)等各所で出土している。伝世例も多い。4 は瓶の頸部で、段による凹凸がある。実測図では見えないが、破断面があり、破断面は楕円形で広く、おそらく龍頭等の突起から不遊環まで接続するものと推察される。5 は報告書で小皿と報告されていたが、瓶類の口縁部と見るのが妥当である。口径が過大のきらいはあるが、やはり砧形瓶等の頸部が想定される。6 は逆に体部が外反する瓶の口縁で端部はつまみ上げる。7 は薄手の瓶口縁部であるが、「く」の字状断面になり、いわゆる「盤口」になる。頸部はすぼまらず、広い径のまま胴部へ下ると見られ、下蕪風の器形が想定される。色調は青みを帯び紛青色に近い。類例として妥当かどうかという点もあるが、四川省遂寧窖蔵出土の下蕪風瓶(B)の口縁部が近いように思われる。8 も口縁部が帯状に直立する瓶。口縁帯より下は外反しすぼまる。一乗谷朝倉氏遺跡出土の瓶が類例と言えよう(C)。

9 は肩が張るタイプの瓶類で、肩付近に若干の段を有する。段より下部に文様が施される。口縁・頸部は欠損。11 は瓶底部。蓮弁帯が巡る。12 は直線的な体部の瓶で、被熱のため器面が荒れる。13 は頸部が立ち上がるやや小型の壺で、肩が張る。口唇部は露胎。渡地村跡(E)や龍泉楓洞岩窯址(F)出土例が類似例と思われる。14 は胴部が膨らむ玉壺春の瓶で外面に唐草文を刻む。11 と共に京の内出土の瓶に近いタイプ(G)。

15 は報告書掲載の蓋つまみ。内面は露胎。16 は酒海壺蓋で、つまみ部は欠損。つまみ立ち上がり付近の外周はやや凹む。18・19 は器台破片。いずれも透かし部付近の破片と思われる。沖縄に出土例

が多いが、大友氏館跡・豊後府内で複数点の出土が知られる(柴田 2018)。20 は小型器台の口縁部。21 は雷文帯を有する鉢で、雷文帯下、及び内面に刻花文。器壁は厚い。やはり京の内資料に類例があり(J)、鹿児島県串木野城跡からも破片が出土している。22 は擂鉢。器壁は薄く、口縁部は玉縁状。青磁擂鉢は沖縄県・鹿児島県各地に出土するが、形状的には那覇市天界寺跡のものが近いように思われる(K)。23 は屈曲する口縁部の破片。折れ縁の上面・内器面ともに鎬連弁文を回している。盤の可能性が高いが盆も想定しておきたい。盆としては新安船に類似形状の口縁を有する完形品が知られる(L)。図 4-24～26 は盤。24 は見込み部の破片で、方形枠の七宝繋ぎ文。京の内(M)、楓洞岩窯址で類例。25 は器壁の厚みが 3 ㎝近い底部破片で、外底は蛇ノ目釉剥ぎ。白色の下地も見える。26 は折れ縁直立口縁盤で、復元口径が 40 ㎝を超える大きさと推定される。

(2)青花

青花類は、報告書ではわずか 4 点しか掲載されていない。それぞれ、小野 B1 群皿・見込みに月梅樹文を持つ碗(B1 群碗)・見込みに「福」字が入る碗・高台付近に巻唐草文帯がめぐる碗であるが、いずれも染付、とだけ報告され、年代等に関する記述が無い。上述のとおり、近現代の陶磁器類をまとめたと思われる袋から相当数の 15・16 世紀の青花破片が抽出できたため、報告書作成段階では、「青花」に対する認識が希薄であったようである。

27 は報告書掲載の碗で、見込みに「福」字文、腰部に圏線。畳付から内側の外底部全体が黒くなっている。当初、この着色を焼成時の汚れと考え中国製青花と見たが、後にいわゆるチョコレートボトムの可能性に思い至ったため、ベトナム産青花碗の可能性も多分にあると考えている。

28 は折縁タイプの大皿で、残存破片から復元した口径は 31 ㎝。縁部は稜花に作る。高台は内傾、見込みもやや凹む。器外文様は隙間を多くとった唐草文。折縁ではないが京の内資料の青花皿(N)と高台や外面の唐草文が似る。29 も皿で、やはり高台はやや内傾。30 はラマ式蓮弁文の瓶底部。31 は見込みに水草文を描く碗の底部で、畳付から高台にかけて露胎。沖縄分類の B1 類碗。

32 は小野 E 群碗。33 は小野 E 群皿。34 は漳州窯系の大皿。これらから、16 世紀中葉～後半の青花も多少は存在していることがわかる。

(3)彩釉陶磁器・朝鮮半島産陶磁器・陶器壺・見込み釉剥ぎ磁器・茶道具等

未報告資料の近現代陶磁をまとめた袋から青花磁を抽出したことはすでに述べたが、この作業中、中世に遡る彩釉陶磁器類も見出すことができた。

図 5-35 は法花壺片で、外面に堆線で巻雲文・蓮弁文を盛り上げ、文様部はブルーで彩色されている。裏面は濃い緑色の釉が施される。素地は白色の磁器質。胎土から、おそらく景徳鎮窯系の産品である。沖縄では複数出土しているが、九州では長崎県南島原市の日野江城跡(有馬氏居城)、大分県竹田市小路遺跡(朽網氏関係遺跡)から出土しているが、他に福島県郡山市の守山城跡から可能性がある破片が出土している。また、図化していないが他に法花の角瓶の可能性がある破片も 1 点ある。

36 は華南系緑釉の香炉で、竹筒を模したもの。内面は口縁部を除き露胎。首里城跡正殿地区等に類例が見られる。他にも、緑釉の香炉と思われる破片を 1 点確認している。

37～40 は景徳鎮窯系の褐釉磁器小坏で、38～40 はおそらく同一個体。いずれも外面は褐釉、内面は白磁釉で端反の器形になる。他に内外面とも褐釉の破片も確認。土井ノ外遺跡からは褐釉磁器は合計で 6 点を発見している。管見の限り中世段階の褐釉磁器は、沖縄以外での出土は知らない。

41 は景徳鎮窯系の瑠璃釉碗。腰部の破片で、内面にかすかに呉須による圏線が確認できるため内面は青花になる。42 は高麗象嵌青磁。黒白象嵌が施された破片で、形状から梅瓶になると考えられる。43 も朝鮮半島産で、雑釉陶器の碗か。44 は中国産の褐釉壺で口縁が扁平環状になるもの。沖縄分類では、口縁部断面が方形状になる壺を 5 類とし、沖縄で普遍的に出土するが他地域ではあまり見られないとされる(瀬戸ほか 2008)。44 は口縁内端があまり突出しないため、断面方形にはならないが、扁平な

口縁形状から5類の範疇であろう。なお、他に褐釉壺の下半胴部で、内外面ともに波状の起伏がある破片が数点あり、5類の下部破片と見られる。

最近の筆者の関心事として、見込みを釉剥ぎするタイプの龍泉窯系青磁碗・皿の存在がある。近年、那覇市渡地村跡で発掘調査が進み、数多くの龍泉窯系青磁が集中的に出土し、そのうちの一定量は見込み釉剥ぎされるタイプであることが知られるようになった(沖縄県埋文セ 2007、那覇市教委 2012、長堂・島 2014)。瀬戸哲也氏は釉剥ぎ青磁の粗雑な部類の生産地の探求を積極的に行っている(瀬戸 2015b・2016)。筆者は熊本県南部の各遺跡においても、これらの見込み釉剥ぎ青磁が一定量出土していることから、九州南部の市場に一般的に流通していた可能性を指摘した(中山 2019)。

回数が制限されており、船団積載量も上限があった日明公貿易は関与した権門・商人が競合するため、品質が低劣な釉剥ぎ粗製品が積載の対象になったとは考えにくい。それに対し、琉球王国外港の主翼であったと考えられる渡地村跡の状況と、熊本県以南の九州西岸の各遺跡で通有に見られる様相から、これらは琉球経由でもたらされた可能性が高いと思われる。土井ノ外遺跡でも、45～47 の青磁に見込み釉剥ぎが確認でき、特に粗雑な印象の強い 46 の碗には釉剥ぎの中心に工具の痕跡と思われる小穴を確認している。このことから、本例は瀬戸氏が指摘する竹口窯を産地とする可能性もあろう。48 は四都窯系の D 類に近いタイプで、見込み、外底周辺をそれぞれ露胎とする皿であるが、これも琉球からもたらされたのかもしれない。数量的に多いとは言えないが、土井ノ外遺跡の出土状況からは、釉剥ぎする粗製品貿易陶磁器が八代海以南だけではなく、肥後北部へも拡散していたことが理解できる。

また、茶道具類として、50 は報告書に掲載の中国産天目茶碗。体部下部の釉端はどっぷりと釉だまりを作る。このほか、抽出により確認できた天目碗はいずれも中国産である。51～54 は香炉で、52 は円盤高台に装飾の脚部が付く。55 は、小型の施釉陶器瓶の底部で茶入である。底部は糸切り、内面はロクロ目が強く残り、外部には褐色の釉が垂れながらかかっている。洪塘窯産か。この他、室礼具として風炉・茶臼・硯を抽出したが、貿易陶磁器ではないので詳細は省略する。

Ⅱ　出土貿易陶磁器の数量と特徴

1．数量カウント、表作成に関する考え方

出土している貿易陶磁器について、種別・器種・分類ごと、及び出土地区・遺構・グリッドごとに点数をカウントし整理したものが表 1・2 である。カウント作業は、土井ノ外遺跡の遺物を収蔵する熊本県教育委員会文化課文化財資料室内で実施した。収蔵コンテナ(未報告資料)は、出土地区ごとに、土師器類・瓦質土器類・石製品(石そのものも含む)・青磁類(1 箱)・陶磁器類(青花・近現代含、5・6 箱分あり)に分類され収蔵されており、概ね、貿易陶磁器を含むと思われるコンテナを確認した上で、破片のカウントを実施したが、すべての収蔵コンテナを完全に実見できたわけではないこと、現地での作業時間が限られており分類照合にやや曖昧な点があったこと(特に青磁の無文部位破片)等から完璧に正確な点数計上・分類が成果としてできたとは言い難い。それでも、概ねの傾向としては、的外れなものではないと考えている。

両表左列の地区・遺構名・グリッド名は、それぞれ破片が収納されていたビニール袋に同封されていたラベルの記述を第一の指標とし、ラベルがない場合は破片の注記を元に名称を復元した。表中、「Ⅰ区 5-EG」等とあるものは、グリッドごとの取り上げと推察されるが、報告書にグリッド名の明記がないため、現段階では詳細な出土位置が不明である。同じ理由で、ラベルに遺構名が記してあるものの、報告書上、当該遺構の名称が見られないものもあり、これも出土地点が判明しない。このため、本稿では個別遺構の年代的評価に踏み込めず、1～3 の各調査区の概ねの出土傾向を中心に検討せざるを得なかった点をお断りする。表中、左列は上から 1 区・3 区・2 区の順に配列しているが、これは 1・3 区が隣接しており一体的な位置空間と考えられたためで、それに対し、2 区はやや離れた調査区になるため、地域ご

との傾向を見る上で都合がよいため、このような配列とした。よって、土井ノ外遺跡は、1・3 区と 2 区の大きく 2 エリアに区分されると捉えている。

なお、分類の基準は沖縄分類（瀬戸ほか 2008）、一部中世前期の遺物は大宰府分類（太宰府市 2000）を適用している。

2. カウント結果の分析

貿易陶磁器は総計 665 点が確認された。内訳は、青磁 465 点、白磁 59 点、青花 104 点、その他 37 点であり、主体は 15 世紀代の龍泉窯系青磁が占める。青磁の組成で、最も多い種類は雷文帯碗（V-2 類）で 46 点である。次いで、細線蓮弁文碗（Ⅵ-2 類）が 38 点、無文玉縁・直口碗 34 点（V-0 類）、無鎬蓮弁文碗（V-1 類）18 点となる。明瞭にⅣ'-0 類と確認できた破片は 5 点のみでⅤ類破片よりかなり少ないため、Ⅴ類段階から陶磁器が増加するのは確かであるが、主に端反り口縁部の破片で、筆者の同定力不足によりⅣ・Ⅳ'・Ⅴ類分類不可としたものも 26 点あり、今少しⅣもしくはⅣ'類段階からの遺物は多くてもおかしくはない。白磁は四都窯系の D 類と景徳鎮窯系の E 類がほぼ拮抗している。青花は B1 群皿が 26 点と最も多く、次いで端反り碗 16 点、E 群碗 10 点となる。B1 群碗は 4 点であるが、今回、確実に B1 群碗の特徴を備えているものだけを B1 としたが、端反り碗と計上した破片の中で、B1 群に含められるものもあると思われる。端反り碗・B1 群碗は、柴田圭子氏の整理図によれば（柴田 2011）、概ね 15 世紀代に属すると理解して支障はない。であれば、青花類も、土井ノ外遺跡では盛期は 15 世紀にあると考えられる。白磁もこの様相に齟齬は無い。今後は、個別破片をより詳細に分析し、正確に分類にあてはめる作業が求められる。

青磁・白磁・青花各碗皿の出土状況からは、土井ノ外遺跡の存続年代は、概ね瀬戸 4 期（1350～1420 年頃）（瀬戸 2017）から始まり、瀬戸 5 古期（1420～1460 年頃）～5 新期（1460～1480 年）にかけてピークがあり、6 期（15 世紀末～16 世紀前半）以降は衰退しつつも細々と継続すると見ることができよう。

さて、改めて表に戻ると、青磁奢侈品（盤・瓶・壺・袋物型物類）の数が 70 点にのぼり、全体から見ても 1 割を超える比率を占めることになる。すでにここまで見てきたように、その中には、瓶・水注・鉢など列島での類例が限られる希少な破片が多く、その特殊性がうかがえる。また、青花大皿や法花壺、褐釉磁器、朝鮮象嵌梅瓶等も同じく希少な遺物といえるだろう。そのほとんどは、1 区もしくは 3 区から出土しており、2 区からは香炉や若干の盤が出土している程度の様相になっている。このことから推測するに、1・3 区周辺に、会所等の室礼具を多数所有する空間が展開していた可能性が高い。現段階では、個別の建物遺構のどれが、会所にあたるか、等については比定が困難であるが、今後、個別の遺構出土の遺物等から空間復元を検討していく必要もあるだろう。

出土遺物の多くが、包含層やカクラン層からの出土とされているので、各奢侈品の同時代性は担保できないが、確認できた希少な遺物群を見ると、1・3 区には唐物奢侈品を多数飾り立てる空間がかつて存在した蓋然性は高い。そう考えると、土井ノ外遺跡は守護館レベルの居館であった可能性は高いものと考えられる。その詳細は別稿（中山 2021）をご参照願いたい。

日常の碗皿類のバラエティ性・高級な青磁奢侈品の卓越・大量と言えない総量の中に彩釉陶磁や沖縄で多く出土する中国陶器類を含む点等、いずれも首里城京の内跡をはじめ、沖縄地方諸遺跡の様相と共通する印象が強い。今回は確実には同定できなかったが、陶器類の中にはタイ産の可能性を有する破片も散見された。このような様相は、まさに拙稿（中山 2019）で指摘した「沖縄的様相」と言えるもので、天草地方を含めた肥後南部だけではなく、北部も同じ物流の状況にあったものと考えられるものである。彼我の交流の背景までは本稿では言及できないが、三山統一後の琉球の積極的な中継交易の姿勢は、一定以上、土井ノ外遺跡の出土状況にも影響を与え、それが出土遺物の形となって表象しているものと捉えたい。

おわりに

以上、特に未報告資料の抽出と公表を主目的に、隈府土井ノ外遺跡から出土した貿易陶磁器の様相を示した。抽出作業は、貴重な破片が次々に見出される、大変心地よい時間であった。一方で、熊本県内各地の資料には、同様に、重要な資料価値を有しながら、収蔵庫の中で人知れず埋もれている貿易陶磁器がまだ数多くあるのではないか、という危惧も感じたところである。熊本県の文化財関係者全体で、認識を高めていく必要があるだろう。引き続き、研究の邁進に努めたい。

本稿の執筆にあたっては、資料調査・資料提供・指導助言等で柴田圭子氏、西住欣一郎氏、阿南亨氏、服部英雄氏、稲葉継陽氏、松村英隆氏、山下義満氏、渡邊文雄氏に大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。また本稿は、令和 2 年度菊池一族の歴史文化資料の調査研究事業（菊池市教育委員会主催）の成果の一部を含んでいる。

〈挿図・表出典〉

図 1　右＝筆者作成　左＝open street map を使用

図 2　熊本県教育委員会 2009 を一部改変

図 3～5　既報告実測図は熊本県教育委員会 2009、他は筆者作成

図 6　A=根津美術館 2010　B＝朝日新聞社文化企画局文化企画部編 1998　C＝福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2005　D・G・J・M・N・Q＝沖縄県教育委員会 1998　E・P＝那覇市教育委員会 2012　F＝浙江省文物考古研究所ほか編 2015　H＝沖縄県埋蔵文化財センター2005　I＝大阪市立東洋陶磁美術館編 2011　K＝沖縄県立埋蔵文化財センター2001　L＝大韓民国文化財庁国立海洋展示館 2006　O＝南島原市教育委員会 2011

表 1・2　筆者作成

〈引用参考文献〉

青木勝士1996「肥後菊池氏の守護町「隈府」の成立」『熊本史学』72・73合併号　熊本史学会

青木勝士2020「菊池氏の拠点　北宮・隈府」『九州の中世Ⅱ　武士の拠点　鎌倉・室町時代』高志書院

朝日新聞社文化企画局文化企画部編1998『封印された南宋陶磁展』

大阪市立東洋陶磁美術館編2011『碧緑の華－明代龍泉窯青磁－大窯楓洞岩窯址発掘成果展』

沖縄県教育委員会1998『首里城跡　－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』

沖縄県立埋蔵文化財センター2001『天界寺跡(1)』

沖縄県立埋蔵文化財センター2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』

沖縄県立埋蔵文化財センター2007『渡地村跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター2017『中城御殿跡　－首里高校校舎改築に伴う発掘調査－』

小野正敏2003「威信財としての貿易陶磁と場－戦国期東国を例に－」『戦国時代の考古学』高志書院

亀井明徳編2002『明代前半陶瓷器の研究　－首里城京の内 SK01出土品－』

熊本県教育委員会2009『熊本県文化財調査報告第248集　隈府土井ノ外遺跡』

熊本県立美術館2019『日本遺産認定記念　菊池川二千年の歴史　菊池一族の戦いと信仰』菊池川二千年の歴史展実行委員会

久米島町教育委員会2008『宇江城城跡発掘調査報告書Ⅰ』

國立故宮博物院2009『碧緑－明代龍泉窯青瓷－』

柴田圭子2011「第1章　今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅴ』今帰仁村教育委員会

柴田圭子2018「大友氏館跡出土中国陶瓷の研究」『戦国大名大友氏の館と権力』吉川弘文館
浙江省文物考古研究所ほか編2015『龍泉大窯楓洞岩窯址』文物出版社
瀬戸哲也・仁王浩司ほか2008「沖縄における貿易陶磁」『沖縄埋文研究』5　沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也2015a「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』№35　日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也2015b「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学』第1巻　雄山閣
瀬戸哲也2016「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索(2)」『亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』亀井明徳さん追悼文集刊行会
瀬戸哲也2017「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」『第35回中世土器研究会　貿易陶磁研究の現状と土器研究』日本中世土器研究会
大韓民国文化財庁国立海洋展示館2006『「新安船」The SHINAN WRECK』Ⅱ
太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－」
長堂綾・島弘2014「渡地村跡の概要と青磁集中部」『第35回日本貿易陶磁研究集会発表要旨・資料集　琉球列島の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
中山圭2019「熊本県南部の様相－沿岸部を中心に－」『第40回日本貿易陶磁研究会研究集会　南九州から奄美群島の貿易陶磁　発表要旨・資料集』日本貿易陶磁研究会
中山圭2021「菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の輸入陶磁器に関する研究」『菊池一族解體新章』巻ノ2　菊池市教育委員会・菊池文化研究所(10月刊行予定)
那覇市教育委員会2012『渡地村跡』
根津美術館2010『南宋の青磁　宙をうつすうつわ』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2005『花咲く城下町一乗谷　花の下に集う中世の人々』
降矢哲男2018「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」『家具道具室内史』第十号
堀内秀樹2013「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器－『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として－」『貿易陶磁研究』第33号　日本貿易陶磁研究会
水澤幸一2017「中世袋物の系譜－威盛財としての唐物陶磁器瓶類の展開」『中近世陶磁器の考古学』第7巻　雄山閣
南島原市教育委員会2011『日野江城跡　総集編Ⅰ』
森達也2015『中国青瓷の研究－編年と流通－』汲古書院
吉岡康暢・門上秀叡2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

図１　隈府土井ノ外遺跡位置図

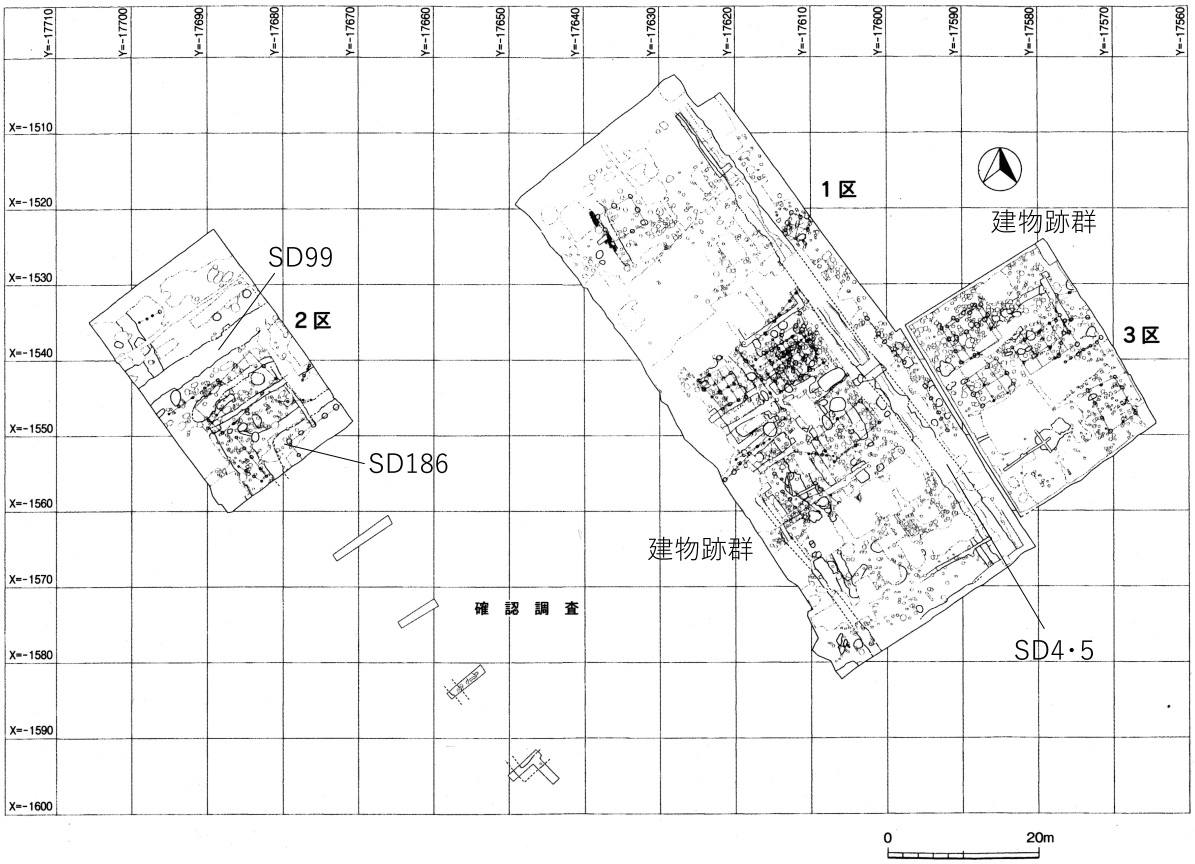


図２　隈府土井ノ外遺跡調査区・遺構配置図

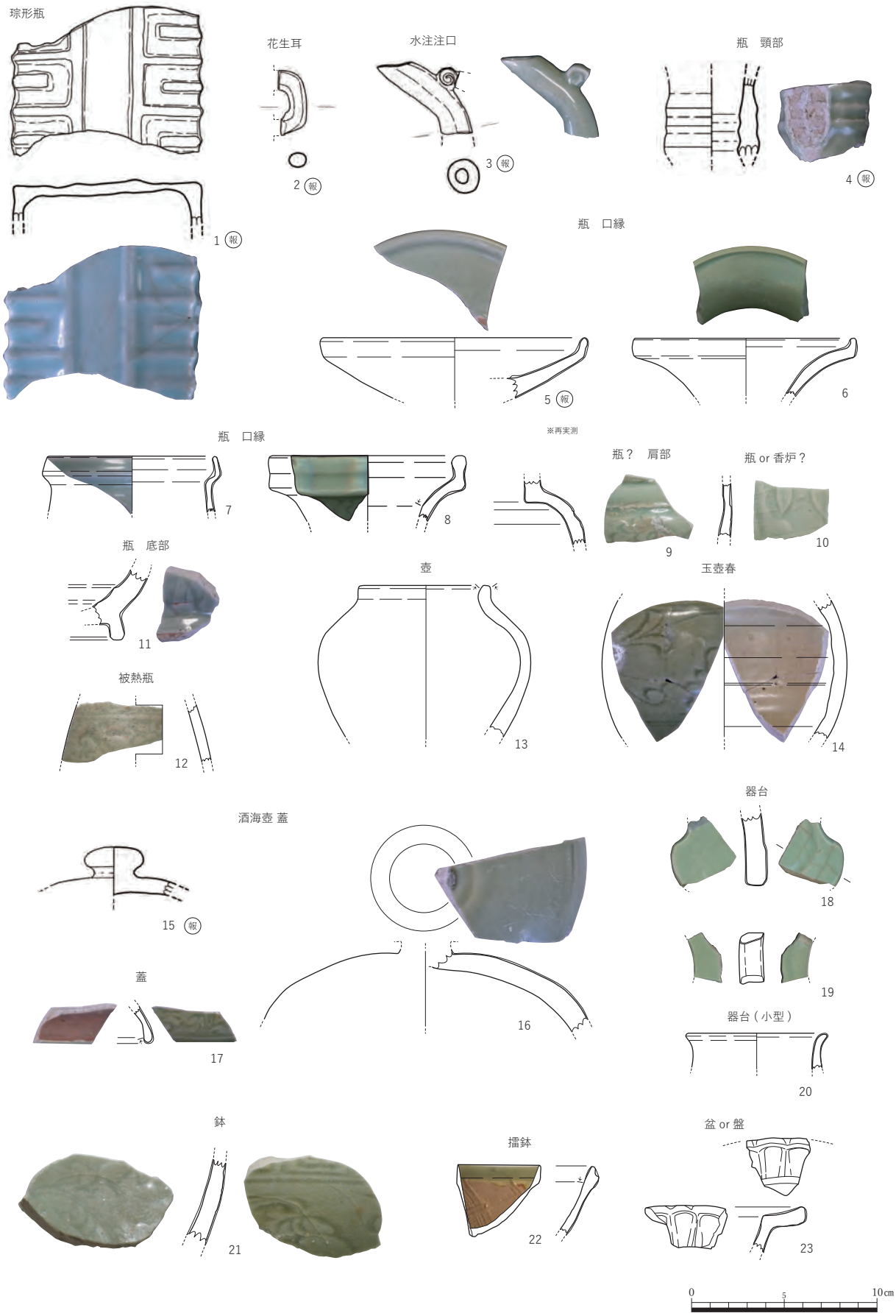


図３　隈府土井の外遺跡出土輸入陶磁器　青磁類

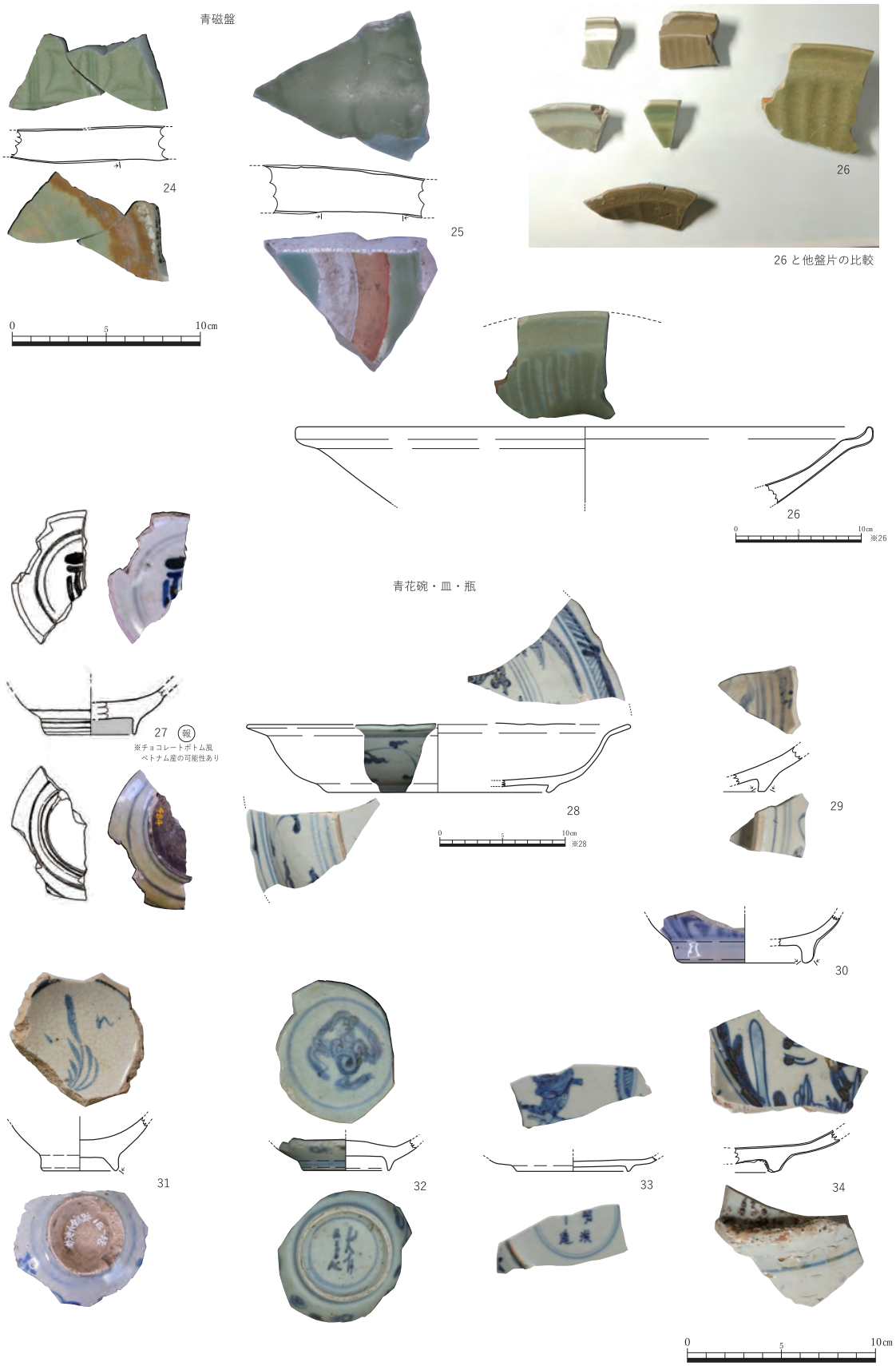
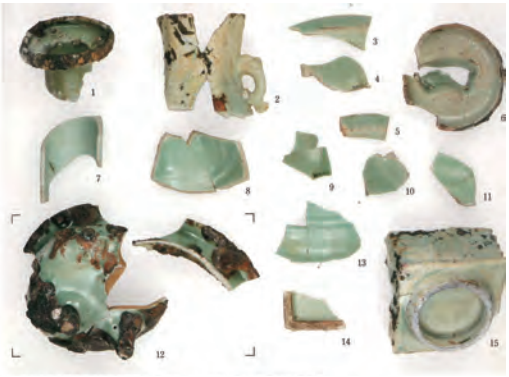


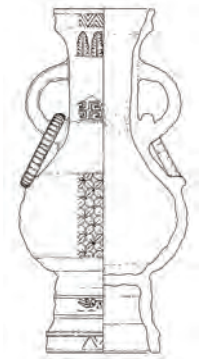
図４　隈府土井の外遺跡出土輸入陶磁器　青磁盤・青花

図５　隈府土井の外遺跡出土輸入陶磁器類　彩釉陶・釉剥ぎ碗皿・茶道具・硯



A. 東京大学本郷構内遺跡出土青磁片（琮形瓶：右下）

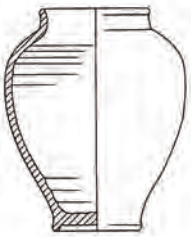
B. 四川省遂寧窖蔵出土青磁瓶



C. 一乗谷朝倉氏遺跡出土青磁不遊環付瓶

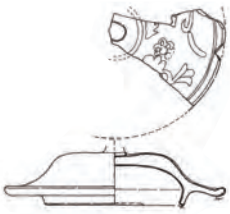
D. 首里城跡京の内跡出土青磁水注

E. 渡地村跡出土青磁無文壺



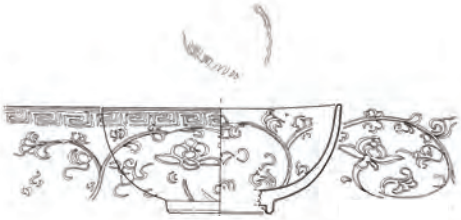
F. 龍泉窯大窯楓洞岩窯址出土青磁壺

G. 首里城跡京の内跡出土青磁玉壺春瓶



H. 首里城跡二階殿地区出土
青磁酒海壺蓋

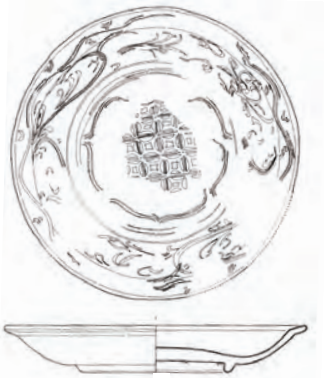
I. 龍泉窯大窯楓洞岩窯址出土青磁器台



J. 首里城跡京の内跡出土青磁鉢

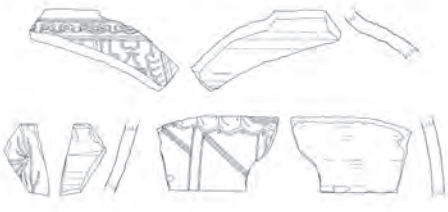
K. 天界寺跡出土青磁擂鉢

L. 新安沈船出土青磁菊形口縁盆



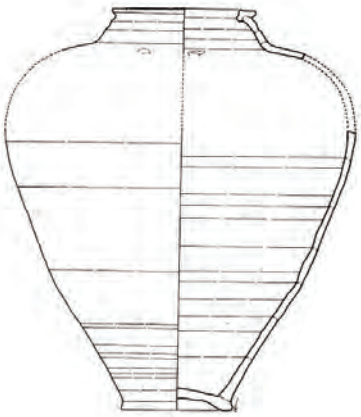
M. 首里城跡京の内跡出土青磁盤

N. 首里城跡京の内跡出土青花大皿



O. 日野江城跡出土法花壺

P. 渡地村跡出土褐釉磁器



Q. 首里城跡京の内跡出土中国褐釉５類壺

図６　類例伝世品・他遺跡出土資料

表１　隈府土井ノ外遺跡出土 青磁分類表

出土地区・遺構 ＼ 器種・分類		奢侈品																																									
		盤	香炉	瓶	水注	琮形瓶	広口壺	酒海壺蓋	器台（小）	器台（大）	雷文大鉢	擂鉢	白象嵌青磁	型物・袋物不明	碗Ⅰ-4類（内面劃花文）	碗Ⅱ類（鎬蓮弁）	碗Ⅲ類（鎬蓮弁）	同安窯系碗	碗Ⅳ-0類（薄胎端反）	碗Ⅳ-2類（口縁平行線）	碗Ⅳ-0類（口縁平行線）	碗Ⅴ-0類（無文玉縁・直口碗）	碗Ⅴ-1類（無鎬蓮弁）	碗Ⅴ-2類（雷文帯）	碗Ⅴ-3類（その他）	碗Ⅳ～Ⅳ～Ⅴ類（端反細分不可）	碗Ⅵ-1類（細線蓮弁）	碗Ⅵ-2類（型押し雷文）	碗Ⅴ～Ⅵ類（端反細分不可）	碗Ⅶ-0類（高高台）	碗Ⅶ-1類（間隔細線）	碗Ⅶ-2類（波状文）	碗高台　外底無釉	碗高台　蛇ノ目釉剥ぎ	碗高台　高台中途まで釉	碗分類不可	皿Ⅳ-1類（端反蓮弁）	皿Ⅳ-0類（玉縁見込釉剥ぎ）	皿Ⅴ-0・3類（腰折・直口）	皿Ⅴ-1類（蓮弁）	皿Ⅳ～Ⅴ類（端反細分不可）	皿Ⅵ-0類（低器高腰折）	皿Ⅵ-1類（低器高蓮弁）	皿分類不可	青磁片分類不可
調査報告書掲載分	1区SD4			1																																							
	1区SD5	1		1																							1																
	1区SD18																																										
	1区SD121															1																											
	1区SD85	1																					1																				
	1区SK9	1																																									
	1区SK59																							1																			
	1区出土遺物	1						1								1					1	2	1				3				1				1								
	3区SK30・31																																										
	3区SB64				1																												1										
	3区出土遺物				1	1								1													1			1							1						
	2区SD99	1																									1													1			
	2区SD186		1																			1	1	2				2															
	2区SK131																																										
	2区出土遺物		1																																								
調査報告書未掲載分	1区一括	8		6	1					1	1			1	1	1	1			1		12	4	19		11	12	1	1			1	6	1	1	7		1		5		2		1	12
	1区2b層																						1	1			1																	
	1区SB																												1														1	1
	1区SB24																																										
	1区SB25																																										
	1区SD	3	1	2			1	1						1	2	1			2			4	3	2			3	1							2		1		1	2		1		20
	1区SD4																																										
	1区SD5																																										
	1区SD18																																										
	1区SD33																																										
	1区SX55																										1																
	1区SX58																									1																	
	1区SX59																																										
	1区SK	1												1										2		4										1								1	12
	1区SK36																																										
	1区SK42																																										
	1区SK52																						1	1			1																
	1区SK100																																										
	1区SK219	1																																									
	1区SK220																																										2
	1区SK222																																										
	1区SK223																																										
	1区SK232																																										
	1区SK233																																										
	1区SK240																																										
	1区SK241																																										
	1区B-G																						1												1								1
	1区C-4G　2b層一括																																										
	1区C・E・F-5G　カクラン																																										1
	1区C-4　カクラン																																										
	1区D-G	1																									1					1											
	1区E-G	2												1	1	1						1													2					1		2	7
	1区E-4G　2b層一括			1										1																													
	1区E-4 2層一括																																										
	1区E-5G　カクラン																																										
	1区E-6G											1																															1
	1区F-G	1	1	1				1	1				1									4		4		4	3						1	3	2			3	1		1			23
	1区G-5G																																										
	1区G-13G																																										
	1区H-G																																		1								
	1区P	1																						2																		1	7
	1区PK8																																										
	1区PR211																																										
	1区P424																																										
	1区P0233																							1																			
	1区SX	1												1										1		1	2													2			5
	3区一括				1																	3	1	3		3	2						1		4								2
	3区カクラン																																										
	3区1層一括																										1																
	3区2a層	1																																									
	3区SK30・31																					1																					
	3区SK-87																				1																						
	3区SB-72G																							1																			
	3区C-14G																					2													1								2
	3区D-12	1																									1								2								1
	3区D-13G																																										1
	3区D-14																							2																			
	3区D-14・15									1																																	
	3区E-12G																					1																					
	3区E-13																																										1
	3区E-14G																																										1
	3区E-15G																																		1								
	3区F-13G															1																											1
	3区F-14a																								1																		1
	3区F-15a																					1																					
	3区SX31埋土層一括																																										1
	2区一括			3																	1	2		1		1						1			3	2							5
	2区カクラン一括																																										
	2区SD99																																										
	2区SD99埋2・4・5層													1																				1			1		1				1	3
	2区SD99埋3層																				1			2											1									3
	2区SD186																																		1					1				1
	2区SD186埋5層																						3				2																	
	2区SD268埋1層		1																																								
	2区SD272埋土層一括																																		1								
	PB793																				1																						
	SK106・111・158・159・164																						1	1			2								1									
	2b層一括																	1	1							1																	1
	SA251PIT2	1																																									
	E-2G・E-3G・F-3G																						1												1								1
	出土地未確認																																										
		27	5	15	4	1	1	3	1	2	1	1	1	8	4	6	1	1	3	1	5	34	18	46	1	26	38	4	2	1	1	2	8	4	4	33	2	3	4	8	3	7	1	7	117

青磁計
465 点

表２　隈府土井ノ外遺跡出土 白磁・青花・他貿易陶磁分類表

	出土地区・遺構 ＼ 器種・分類	白磁皿Ⅷ類	白磁碗Ⅳ類	白磁坏D群（腰折坏）	白磁皿D群（内湾・抉高台）	白磁D群小片	白磁皿D群（見込釉剥ぎ）	白磁見込蛇ノ目釉剥ぎ小坏	白磁皿E群（端反・景徳鎮）	白磁香炉	白磁分類不可	青花直口碗	青花端反碗	青花B1群碗（端反碗）	青花B1群皿（端反皿）	青花C群碗（蓮子碗・景徳鎮）	青花C群碗（蓮子碗・粗製）	青花C群皿（碁笥底・景徳鎮）	青花C群皿（碁笥底・粗製）	青花E群碗（饅頭心碗）	青花E群皿（内湾皿）	青花大皿（京の内類品）	青花折縁皿（F群？・外鎬文）	青花漳州窯系粗製碗（直口・単圏線）	青花漳州窯系粗製皿	青花漳州窯系大皿	青花瓶	青花分類不可	瑠璃釉碗（景徳鎮）	褐釉磁器小坏（景徳鎮）	法花壺（磁器質・景徳鎮？）	法花角瓶？	中国褐釉陶器壺5類	中国褐釉陶器（タイ含むか？）	天目釉系切底陶器小坏	天目茶碗（茶洋窯主体か？）	茶入（褐釉系切底小瓶・洪塘窯？）	華南三彩 竹筒香炉	朝鮮系白磁碗・皿	朝鮮象嵌青磁梅瓶	ベトナム産？青花碗（チョコレートボトム）	参考資料 国産遺物 硯	瓦質風炉	茶臼
調査報告書掲載分	1区SD4																																												
	1区SD5								1																																				
	1区SD18																																		1										
	1区SD121																																												
	1区SD85												1																																
	1区SK9																																												
	1区SK59																																												
	1区出土遺物										1					1																										1	3	
	3区SK30・31																																												
	3区SB64																																												
	3区出土遺物																																									1			
	2区SD99														1																								1				1		
	2区SD186																																												
	2区SK131																																												
	2区出土遺物																																												
調査報告書未掲載分	1区一括		1	2	6	1			3		4	1	1	1	3		1	2	1	4						1		8	1				2	2	1	2						1		
	1区2b層																																												
	1区SB																																												
	1区SB24					1																																							
	1区SB25																							1																					
	1区SD	1					1																																						
	1区SD4				1				2				2			1				1													1												
	1区SD5								2		2							1		4			1					2					2		1										
	1区SD18																																												
	1区SD33												1																						1										
	1区SX55																						1																						
	1区SX58										2																																		
	1区SX59																1						1					1																	
	1区SK																																												
	1区SK36								1						1																														
	1区SK42																																												
	1区SK52																																												
	1区SK100																										1																		
	1区SK219																																1												
	1区SK220										2				2													2		3			5												
	1区SK222								1				1															1																		
	1区SK223								2																			2		1															
	1区SK232				1																																								
	1区SK233																											1																	
	1区SK240				1																																								
	1区SK241												1																																
	1区B-G																																												
	1区C-4G　2b層一括																																				1								
	1区C・E・F-5G　カクラン								1							1												1																	
	1区C-4　カクラン															1							1	1																						
	1区D-G																																												
	1区E-G																																												
	1区E-4G　2b層一括																																									1			
	1区E-4 2層一括														2																				1		1								
	1区E-5G　カクラン												1																																
	1区E-6G				2				1																					1															
	1区F-G																																												
	1区G-5G												1								1										1	1		1				1							
	1区G-13G																					1																							
	1区H-G																																												
	1区P																																												
	1区PK8								1																																				
	1区PR211												1																																
	1区P424																											1																	
	1区P0233																																												
	1区SX																																												
	3区一括				2	2		2	3				1	2	8			2		1	1				1					1															
	3区カクラン								1				1		1													1																		
	3区1層一括																																												
	3区2a層																																												
	3区SK30・31																																												
	3区SK-87																																												
	3区SB-72G																																												
	3区C-14G																																												
	3区D-12									1																																			
	3区D-13G																																												
	3区D-14																																												
	3区D-14・15																																												
	3区E-12G																																												
	3区E-13																																												
	3区E-14G																																												
	3区E-15G																																												
	3区F-13G																																												
	3区F-14a																																												
	3区F-15a																											1																	
	3区SX31埋土層一括																																												
	2区一括				1		1		1				3	1	6									1	1			1											1						
	2区カクラン一括						1						1		1																														
	2区SD99																																											2	
	2区SD99埋2・4・5層																																												
	2区SD99埋3層																																												
	2区SD186																																												
	2区SD186埋5層																																												
	2区SD268埋1層																																												
	2区SD272埋土層一括																																												
	PB793																																												
	SK106・111・158・159・164																																												
	2b層一括																																												
	SA251PIT2																																												
	E-2G・E-3G・F-3G																																												
	出土地未確認																																										1	1	
		1	1	2	14	4	3	2	20	1	11	1	16	4	25	4	2	5	1	10	2	1	4	3	2	1	1	22	1	6	1	1	2	12	1	6	1	2	2	1	1	3	4	3

白磁計
59 点

青花計
104 点

彩釉陶他計
37 点

貿易陶磁器計
665 点

陶磁器からみた先島の集落遺跡と琉球帝国

村木　二郎　（国立歴史民俗博物館）

はじめに

琉球王国は明と東南アジア諸国、朝鮮そして日本をつなぐパイプ役として積極的な交易を展開し、「大交易時代」を現出した。しかしヨーロッパ勢力のアジア進出によって中継貿易国家としての存在感が弱まり、日本に統一政権が成立すると薩摩の侵攻を受けて支配下に入った、という被征服面が強調されてきた。

しかし近年の研究では、琉球王国は諸外国と積極的な外交交渉をおこなって交易し、東南アジア諸国とは対等な関係を作り上げ、南九州の諸勢力に対して時には優位な関係を築きもしていることが指摘されている(村井 2011)。

また琉球とは全く異なる文化をもつ奄美諸島や宮古、八重山といった先島諸島に侵攻し、中央集権的な体制で支配した事実は動かせない。先島や奄美には文献資料がほとんど残っていないため、近世に首里王府が編纂した史書に基づいてその歴史は語られてきた。しかしそれは王府による中央史観によって記されたもので、先島の人びとは琉球王国の版図に入ることで文明化したという文脈で彩られている。

一方で、オランダの文化人類学者であるコルネリウス・アウエハントが 20 世紀半ばに調査した八重山の波照間島には、中世の集落遺跡と密接に関係する祭祀や伝承が残っているなど、社会的・宗教的諸相に色濃く中世の影が落ちている(アウエハント 2004)。波照間島では今なお中世陶磁器が採集でき、中世集落の廃村である石囲い集落遺跡は、聖地として祀られて現在も大切に保存されているものも多い。これらの考古学的資料は琉球王国を相対化し、先島・奄美を含めた中世琉球史の再考を迫る可能性を秘めている。

Ⅰ　中世先島の集落研究

先島の集落遺跡は石積みをもつものが多く、グスクとの区別が不明瞭である。そもそもグスクとは沖縄島の城塞的な遺跡だけを意味するのではなく、小規模なものから集落も含めた広い概念で使用される。そのため沖縄県教育委員会によるグスク分布調査の一環で先島の中世集落遺跡が認識されるようになった。宮古での調査報告書では、沖縄本島にあるようなグスクが宮古にもあるのかという問題も含めて「グスク(グシク)の呼称の有無にかかわらず主に小高い丘への立地と石垣、さらに宮古式土器や中国陶磁器などを出土する遺物(ママ)をグスクとして扱う」とし(沖縄県教育委員会 1990a)、多くの重要な集落遺跡の見取り図や測量図が作成された。つづく八重山での調査では集落遺跡調査としての意図がより明確化している(沖縄県教育委員会 1994)。

そうしたなかで八重山の竹富島新里村遺跡が発掘調査された(沖縄県教育委員会 1990b)。不定形石囲いが連結する「細胞状集落遺跡」で、グスク分布調査で認識されつつあった先島独特の集落遺跡が発掘調査によりその性格を明らかにした(金武 1999)。こうした流れを受けて、国立歴史民俗博物館は八重山の中世集落遺跡に注目し、波照間島マシュク村跡遺跡、竹富島花城村跡遺跡などの測量図を作

成した。これらの成果をまとめた小野正敏氏は、八重山に残る石囲い集落遺跡は先島一帯に広がるもので、沖縄島には見られない。しかもその多くは15世紀段階に廃絶し、現在残る集落とは断絶した存在である、ということを明確にした。そしてこれらの遺跡こそが琉球王国とは別の文化圏を形成した先島の独自性を証明するもので、琉球王国の版図に取り込まれるなかで集落は廃絶していったと位置づけた(小野 1999・2010)。

宮古ではグスク時代の遺跡から見つかった中国産陶磁器を分類し、遺跡の存続期間によって 3 タイプの遺跡群が設定されている。13 世紀後半～15 世紀前半に栄えたもののそこで廃絶してしまう「高腰タイプ」とされる遺跡群は、石積み遺構を伴うものが多く、八重山の新里村遺跡や花城村跡遺跡と通じるものがある(久貝 2014)。近年発掘調査された宮古島ミヌズマ遺跡は、石積み遺構は伴わないものの、15 世紀前半に廃絶する典型的な高腰タイプの集落遺跡である。

先島には文献資料はほとんど残っていないが、このように遺跡や遺物は豊富であり、とくに中国産陶磁器を主とした遺物量は圧倒的である。そこでこうした考古学的資料をもとに周辺の島々から琉球を捉え直すべく、国立歴史民俗博物館では 2015～2017 年度に共同研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」を実施し(村木二郎編 2021)、その成果を踏まえて 2021 年 3～5 月には特集展示「海の帝国琉球－八重山・宮古・奄美からみた中世－」を開催した(国立歴史民俗博物館 2021)。

Ⅱ　先島の細胞状集落遺跡(表 1・図 1)

石積みで囲まれた不定形で大小さまざまな大きさの屋敷が細胞状に連なった集落遺跡が、先島には各地に点在する。これらの細胞状集落遺跡について、小野正敏氏は次のようにまとめている(小野 1999・2020)。

① 集落内には道路がない。
② 屋敷区画は不整形、大きさも不均質で、細胞群のように連結し、石積みの一部を狭く切った出入口により屋敷から屋敷へと移動する。
③ 集落内には現在知られているような御嶽がない。
④ 崖の上に大規模な石積みを設けて全体を囲み、集落の防御性が高い。

1. 竹富島・花城村跡遺跡(図 2)

花城村跡遺跡は、中世の久間原村と花城村と考えられるふたつの集落跡からなる。遺跡の北側は最高所で 4m くらいの落差のある断崖で、その上にさらに 2～3m ほど石を積み上げている。断崖の下には井戸が 4 か所設けられている。崖の南側(内側)には東西約 500m、南北約 200m にわたって石囲いの屋敷が 40 区画ほど広がる。

花城村跡遺跡は竹富町教育委員会によって 1997 年と 1998 年に発掘調査がおこなわれた。97 年は久間原村側の 5・6 号屋敷、98 年は花城村側の 35・37 号屋敷が調査され、5・6 号屋敷については概要が報告されている(仲盛 1999)。5 号屋敷の石囲いは、東の 6 号屋敷との境が先に積まれ、そのあとに南の 7 号屋敷との境が積まれていることが層位から確認できた。それにより、まず 6 号屋敷が作られ、6 号屋敷の西壁を利用して 5 号屋敷が作られたことがわかる。このように細胞状集落は増殖するように拡大しているのであり、6 号屋敷のさらに東側の大きな 10 号屋敷が初めに作られたと考えられる。

出土遺物で最も多いのは在地産の鍋形土器である。青磁では無文外反碗(D 類)が多く、蓮弁文碗(B 類)、細線蓮弁文碗(B4 類)、雷文帯碗(C2 類)、稜花皿が出土している。白磁は外反口縁の碗(ビロースクⅢ類か)が主で、ビロースクタイプの碗(ⅠかⅡ類)がわずかに含まれるほか、抉り高台の小皿(B 群)もある。また染付は玉取獅子の小皿(B1 類)が 1 点あるのみという。正式な報告書が出ておらず詳細は不明だが、古いものは 13 世紀後半～14 世紀前半、新しいものは 15 世紀後半～16 世紀前半の資料が見られる。しかし資料の主体は 14 世紀後半～15 世紀代であり、集落のおおよその年代が知られる。

2. 竹富島・新里村遺跡（図 3）

新里村遺跡は竹富島の北側海岸沿いに位置し、東西約 500m、南北約 100m にわたって展開する。ハナクンガー（花城井）と呼ばれる井戸を挟んで東側は標高 3～5m ほど、西側は 5～9m ほどの場所に広がっており、発掘調査報告書ではそれぞれを新里村東遺跡、新里村西遺跡と分けている。東遺跡は地山の上に石灰岩を野面積みした土留め石積みが見られたのみで判然としないが、西遺跡は細胞状の区画が明瞭に残っていた。報告書では 10（グスク分布調査報告書では 17）の屋敷区画が想定されており、1～4 号屋敷が発掘調査された。1・2・4 号屋敷の内部は柱穴群で占められており、掘立柱建物が何度も立替えられた様子が窺える。2 号屋敷からは高倉と考えられる柱穴も検出されている。

出土遺物から東遺跡は 12～13 世紀代で古く、西遺跡は 14～15 世紀代で新しいとして、時期の異なる集落跡と報告されており、12～13 世紀代は石積みはなく、14～15 世紀になると集落に石囲いが施されると考えられた（沖縄県教育委員会 1990b）。しかし後述するように出土遺物を悉皆調査した結果、東遺跡と西遺跡の遺物の年代差はそれほどはっきりしたものではなく、両者は同時併存した一体の集落と考えられそうである。

3. 波照間島・マシュク村跡遺跡（図 4）

波照間島北側海岸沿いには、東からマシュク村跡遺跡、ブリブチ遺跡、ミシュク村跡遺跡の 3 つの細胞状集落遺跡がある。マシュク村跡遺跡はその最大のものと考えられ、東西約 300m、南北約 150m の範囲に広がっている。全体で 70 区画ほどの石囲いが数えられるが、西側の整然とした方形区画は時期的には新しいようで、海の崖際まで迫った石積みから南側一帯に広がる不定形区画の集合体が本体と考えられる。陶磁器や食物残滓の貝殻などもこの辺りで採集できる。不明瞭な石積みも多々あるため区画数を特定することはできないが、20 区画程度は確認できる。

発掘調査はおこなわれていないが、グスク分布調査の際の採集遺物は、青磁・白磁・褐釉陶器、在地産土器が主体で、染付はほとんどない。報告書掲載の青磁・白磁 12 点の内訳は、青磁碗 D1 類 4 点、D2 類 1 点、B3 類 1 点、B4 類 4 点、稜花皿 1 点、白磁碗ビロースクⅢ類 1 点、皿 B 群 1 点で、14 世紀後半～16 世紀前半に収まる。

4、石垣島・フルスト原遺跡（図 5）

フルスト原遺跡は南北に走る琉球石灰岩の台地上に石を積み上げて囲んだ集落跡で、東側は約 15m の断崖である。南北約 400m、東西約 100m に広がる細胞状集落遺跡で、石積みは 15 区画が確認されている（石垣市教育委員会 2020）。中央部は破壊されているが本来はこの箇所にも区画が展開していたと思われ、かなり大規模な集落であったと想像される。

崖沿いの東側 1～4 号、少し離れた 5 号屋敷と、西側の 10・15 号屋敷が発掘調査されている。石積みの幅が約 4m ある 2 号屋敷の残りがよく、炉跡を円形状に囲むように柱穴群が検出されている（下地 1999）。炉は東西方向を長軸としており、方位にあった建物が柱穴から復元できる。これとは別に崖線に沿った石積みの方向に軸を合わせた建物も柱穴から復元でき、その中柱が炉を切っている。つまり 2 時期の建物が復元でき、前期は石積みを無視した東西南北の方位軸、後期は石積みに沿った軸をもつわけで、前期は石積みがなかったと考えられるという（小野 2001）。

フルスト原遺跡は八重山に覇を唱えたオヤケアカハチが拠点とした集落と考えられている。1500 年に起こったオヤケアカハチの乱では「険阻を背負い、大海に面して陣を布いた」ため、王府軍は攻めあぐねたとされる。断崖の上に石積みを巡らせたフルスト原遺跡は、まさにそういった防御性を備えた集落遺跡である。

遺物については未報告資料も含めて中国産陶磁器の悉皆調査を実施しており、後述する。

Ⅲ　集落遺跡出土の陶磁器（表 2）

1．陶磁器調査の方法

先島の集落遺跡からは大量の遺物が出土する。なかでも青磁、白磁の量は膨大で、発掘調査報告書が刊行されてもそれらのすべてを報告することはほとんどない。しかし、めぼしい資料を報告するだけでは遺跡の消長を捉えることはできず、時間がかかるもののやはり全点悉皆調査が望まれる。

国立歴史民俗博物館の共同研究チームでは、発掘調査のおこなわれた良好な遺跡を抽出し、青磁・白磁・染付の破片を分類しその点数を記録した。ここで扱う対象とした主な遺跡は下記の通りである。

・宮古：宮古島住屋遺跡、同ミヌズマ遺跡
・八重山：竹富島新里遺跡、石垣島フルスト原遺跡
・奄美：喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡

時期については下記のような区分をおこなっており、以下それを用いる。分類の詳細については、（池谷・小野ほか 2021）を参照されたい。

時期区分、世紀、指標とする主な分類
・Ⅰ期（11 世紀後半～12 世紀中頃）青磁碗 A0、白磁碗Ⅳなど
・Ⅱ期（12 世紀後半～13 世紀前半）青磁碗 A1～6、同安窯系、白磁碗Ⅴ～Ⅷなど
・Ⅲ期（13 世紀後半～14 世紀前半）青磁碗 B1、白磁Ⅸ、浦口窯系、ビロースクⅠ・Ⅱなど
・Ⅳa 期（14 世紀後半～15 世紀初頭）青磁碗 B2・D1、ビロースクⅢなど
・Ⅳb 期（15 世紀前半～15 世紀中葉）青磁碗 B3・C2・D2、内彎系皿、白磁皿 B、染付碗 B など
・Ⅴ期（15 世紀後半～16 世紀前半）青磁碗 B4・E、稜花皿、白磁皿 C・E、小杯、染付碗 C、皿 B1・C など
・Ⅵ期（16 世紀中葉～16 世紀末期）青磁菊皿、染付碗 E、皿 B2・E・F、染付漳州窯系など

2．宮古の陶磁器

住屋遺跡は宮古島北部に位置する集落遺跡で、現在は宮古島市役所が建っており宮古島の中心として長らく栄えてきた場所である。首里王府に与して宮古島を支配し、1500 年の王府による八重山征討では尖兵となって活躍した仲宗根豊見親の本拠地と考えられている。

青磁 8,338 点、白磁 1,323 点、染付 881 点、合計 10,542 点をカウントした。浦口窯系（140 点）、ビロースクⅡ類（118 点）といった白磁碗がまとまった量見られ、Ⅲ期から遺物量が増える。とくに青磁碗 D2 類（1,360 点）、B4 類（1,013 点）を主とするⅣb 期からⅤ期にかけてがピークとなる。その後も稜花皿（307 点）をはじめ、青磁碗 E 類（427 点）、染付（881 点）も一定量出土しており、近世にかけて遺跡は継続していく。

仲宗根豊見親の本拠というにふさわしく、首里王府の支配以降も廃絶せずに宮古の中心であり続けたことが遺物からも確認できる。

しかし宮古の集落には中世段階で廃絶するものも多い。ミヌズマ遺跡は宮古島西部に位置する集落遺跡で、石積みはもたないものの数次にわたって建てられた掘立柱建物跡などが見つかっている。

青磁 705 点、白磁 612 点、染付 0 点、合計 1,317 点をカウントした。白磁碗Ⅳ類（29 点）がある程度含まれており 12 世紀代から活動痕跡は窺えるが、浦口窯系（125 点）、ビロースクⅡ類（290 点）の白磁碗が大量に出てくるⅢ期に本格的な活動が始まる。青磁の大半を占める碗 D1 類（660 点）が最も多く、このⅣa 期が遺跡のピークであるが、この後まったく遺物が見られなくなり、突然集落が廃絶したことがわ

かる。

青磁碗 D1 類の年代観によって多少の前後はあるが、15 世紀前半代のどこかで廃絶する遺跡は高腰城跡、野城遺跡、久場嘉城跡など「高腰タイプ」として宮古島で複数確認されており、この時期に大きな動乱があったことが想定される(久貝 2014)。宮古島全島を巻き込んだという伝承が残る「与那覇ばら軍」(久貝編 2018)、あるいは首里王府による侵攻をこの時期に想定するのが妥当であろう。

3. 八重山の陶磁器

竹富島の新里村遺跡は、井戸を挟んで東村と西村に分かれると認識されており、発掘調査報告書では石積みをもたない東村が古く、細胞状集落である西村が新しいとされている。しかし陶磁器調査をした限りでは両者に大きな差は見られなかったため、ここでは一体の集落として扱うこととする。

青磁 736 点(西村 576 点、東村 148 点、不明 12 点。以下同様に記す)、白磁 288 点(207 点、77 点、4 点)、染付 0 点、合計 1,024 点(783 点、225 点、16 点)をカウントした。白磁Ⅳ類が西村から 7 点、東村から 5 点、地点不明が 1 点と、Ⅰ期にさかのぼる白磁も見られるがその数はわずかである。浦口窯系(17 点、20 点、1 点)、ビロースクⅡ類(106 点、23 点、1 点)の白磁碗がかなり含まれており、Ⅲ期から集落としての本格的な展開が見込まれる。最多は青磁碗 D1 類(281 点、77 点、4 点)で半数近くを占めており、Ⅳa 期が集落の最盛期と言えよう。しかしⅣb 期の青磁碗 D2 類(67 点、6 点、0 点)段階になると減少し、Ⅴ期の遺物はほとんど出土しておらず、この時期には集落が廃絶したと考えられる。伝承では新里村は花城村へ移転したことになっている。

石垣島のフルスト原遺跡については屋敷区画単位で陶磁器調査をおこなっているが、ここでは遺跡全体の総数を示しておく。青磁 7,556 点、白磁 1,323 点、染付 17 点、合計 8,896 点をカウントした。資料が増加するのはⅢ期になってからである。白磁皿Ⅸ類(27 点)、青磁碗 B1 類(15 点)も多少あるが、主体となるのは浦口窯系(184 点)、ビロースクⅡ類(404 点)の白磁碗である。最多数はⅣa 期の青磁碗 D1 類(1,639 点)であるが、Ⅳb 期の青磁碗 D2 類(470 点)、C2 類(317 点)、Ⅴ期の青磁碗 B4 類(740 点)・E 類(486 点)、稜花皿(189 点)も相当量含まれており、15 世紀代を通じて集落が栄えた様子が窺える。しかし染付はほとんど入っておらず、16 世紀の早い段階には集落は廃絶していたと考えられる。

フルスト原遺跡はオヤケアカハチの本拠地と考えられている。そうだとすれば、1500 年の首里王府によるアカハチ討伐の際に集落が廃絶した可能性が高い。

4. 奄美の陶磁器

先島の陶磁器データと比較するため、奄美の集落遺跡も見ておきたい。喜界島の中央に位置する城久遺跡群は古代にさかのぼる集落遺跡で 12 世紀代に繁栄した。そのなかでもやや低い地点にあるのが大ウフ遺跡である。

青磁 470 点、白磁 308 点、染付 5 点、合計 783 点をカウントした。白磁碗Ⅳ類(76 点)、Ⅴ類(24 点)が 100 点ばかり出土しており、城久遺跡群全体の最盛期であるⅠ期には集落として機能していたことがわかる。Ⅲ期には青磁碗 B1 類(29 点)と少量の白磁皿Ⅸ類(6 点)があり、Ⅳa 期に入ると青磁碗 D1 類(97 点)と白磁碗ビロースクⅢ類(16 点)を主体として遺物量は一気に増加する。しかしその後に続くⅣb 期の青磁碗 D2 類(8 点)、C2 類(2 点)やⅤ期の青磁碗 B4 類(8 点)、E 類(4 点)、稜花皿(2 点)は少量である。Ⅰ期の繁栄のあとやや低調になり、Ⅳa 期に再び盛んになるが、短期間で集落機能を停止したと考えられる。

中増遺跡は喜界島南西部の海岸寄りに位置する手久津久遺跡群の一画で、標高 20m前後の海岸段丘上に位置する。15 棟の掘立柱建物跡が見つかっており、それらを囲むように幅 2mほどの溝が崖際に掘られている。

青磁 167 点、白磁 23 点、染付 0 点、合計 190 点をカウントした。Ⅰ～Ⅲ期の資料はほとんどなく、Ⅳa 期に白磁碗ビロースクⅢ類(11 点)、青磁碗 D1 類(24 点)がある程度見られるようになる。青磁碗 D2

類(37 点)、C2 類(14 点)が一定割合出ているため、Ⅳa・b 期がこの遺跡のピークとなる。しかし青磁碗 B4 類(1 点)や E 類(3 点)はほとんどなく、稜花皿も染付も皆無であることから、ピーク時をもって集落は廃絶したと考えられる。

奄美の集落遺跡は 2 か所しか調査できておらず、また遺物量も先島に比べて少ない。しかし 15 世紀代の最盛期をもって遺物が急減することから、劇的な要因で集落が廃絶したことが予想される。またⅢ期の資料は少量ではあるが、青磁碗 B1 類と白磁皿Ⅸ類で構成されており、日本列島で一般的に見られる傾向と同じである。先島では浦口窯系とビロースクⅡ類の白磁碗が主体であったこととは対照的で、すでに指摘されているように(木下編 2009)、沖縄島を挟んでこの時期の中国産陶磁器の流通のあり方が大きく異なることが明瞭である。

Ⅳ 琉球帝国の相貌

1. 尚泰久の梵鐘

中山王尚巴志が 1429 年頃に三山を統一するが、第一尚氏王朝は短命の王が続き王権は安定しない。なかでも第 6 代王・尚泰久は、1453 年に首里城正殿を消失せしめた志魯・布里の乱という王位争奪戦争の結果王位についたため、王権は弱体化していた。その王権を支えるのは舅の護佐丸と娘婿の阿麻和利であるが、1458 年に起こった護佐丸・阿麻和利の乱で両者が共に滅亡したことは尚泰久に大きな衝撃を与えた。こうした近親者による争乱を身近に経験したこともあり、尚泰久は多くの寺院を建立し梵鐘を鋳造して深く仏教に帰依した。そのため第二尚氏王朝によって編纂された『中山世譜』や『球陽』では、尚泰久を「仏法之明君」と称している。というのが一般的な見解であろう。

しかし 7 年間という短い治世の間に数々の寺院を建立し、23 口もの梵鐘を鋳造するにはそれなりの財力と求心力が必要である。また、中城城の護佐丸、勝連城の阿麻和利はいずれも強大な力をもった有力按司であり、結果的にこの両者が共倒れすることで王権は確固たるものとなった。勝連城跡からは数万点に及ぶ中国産陶磁器が出土しており、15 世紀前半代にピークが見られる。遺物から見てもその強大さは疑うべくもないが、その最盛期の阿麻和利を討滅しているのである。

後世の編纂物ではなく、尚泰久の治世は梵鐘銘文という同時代資料を残してくれている。「万国津梁鐘」と呼ばれる首里城正殿鐘以外の 22 口はほぼ同文の定型句が刻まれており、そこには「蛮夷不侵」といった中華思想的文句が読み取れるのである(荒木 2021)。さらに注目したいのは、これらの梵鐘が天尊殿、上・下天妃宮にも掛けられたという事実である。天尊殿や天妃宮は、福建系華人たちが信仰する道教施設である。華人たちは海外交易に不可欠な知識・技術をもっており、首里王府の支配下に属さず一定の距離を置いた存在として那覇を拠点に活動していた。その信仰の要である堂舎に、尚泰久が建立した寺院などと同様に同じような銘文を刻んだ梵鐘を掛着させられたのである。これは不可侵であった華人勢力に対する介入行為と言えるのではなかろうか。

このように尚泰久期の出来事を、有力按司の粛清、華人勢力への介入と捉えてみると、決して王権は弱体化しておらず、むしろ中央集権化が進展していたと理解できる。第一尚氏王朝の琉球王権については、近世の編纂資料によって作られた既成概念を棄て、再検討する余地がある。

2.「尚真帝王」

琉球王国の最盛期を現出した第二尚氏第 3 代王・尚真については、同時代資料である「百浦添之欄干之銘」(1508 年)に造寺造仏や交易振興など 9 つの治績が刻まれ顕彰されている。とくに最長字数で記されているのが弘治庚申(1500 年)春の太平山征伐、すなわち八重山のオヤケアカハチ征討であり、これによって八重山は翌年から税を納めるようになり琉球王国は益々繁栄したとある。

このように尚真の時期には琉球王国は版図を広げ、中央集権的な統治が強化されたことが知られている。尚真は仏教も保護したと称えられているように、1494 年に尚真が建立した王家の氏寺・円覚寺は

琉球最大の禅刹であった。円覚寺に掛けられた梵鐘は 3 口あり、そのうち殿中鐘(1495 年鋳造)と呼ばれる小振りの 1 口は、仏殿後方に位置する龍淵殿という尚氏累代の位牌が置かれた奥の院的な建物に掛けられていた。その殿中鐘には、矩形の枠を鋳出した箇所に「尚真帝王」という金文字が記されているのである。八重山征討より以前の段階で、すでに帝国の王としての心意気を吐露していたわけである。

おわりに

先島には沖縄島には存在しない、石積みで囲われた集落遺跡が各地で見られる。なかでも細胞状集落遺跡は石垣島・竹富島・波照間島・西表島といった八重山のほか、宮古島や池間島にも存在し、広域に分布する集落形態であることがわかる。これらの集落遺跡からは大量の中国産陶磁器をはじめとした遺物が見つかっているわけで、沖縄島とは異なる文化圏・経済圏がこの地域にあったことは明らかである。

石積みで囲わない集落遺跡も含めて、そこから見つかる中国産陶磁器によると15 世紀代の資料が多くその最盛期が知られるが、それ以降も継続するケースはほとんどない。13 世紀後半に活動を見せ始めた集落が、宮古島では 15 世紀前半代に、奄美では 15 世紀中頃に、八重山では 15 世紀後半～16 世紀初頭に廃絶している。花城村跡遺跡で指摘されるように、集落の始祖の屋敷跡と考えられている屋敷区画は大きい。大小不均質な屋敷区画は、集落内での階層差を反映していると考えられる。先島にはそうした階層性をもつ社会があった。それが 15 世紀～16 世紀初頭にかけて破壊され、社会が再編された。その要因として考えられるのが、琉球帝国による侵攻である。

琉球は独自の文化をもった周辺の島々を配下におさめ、帝国として内国化していったのである。すなわち、15 世紀前半～中頃の琉球帝国膨張の第一波により宮古・奄美を、15 世紀後半～16 世紀初頭の第二波により八重山を帝国に組み込んだ。第一波は尚泰久の時代と短期間に限定して考える必要はなく、第一尚氏の王権の伸長を再検討し時間幅をもって捉えるべきであろう。第二波については尚真帝王の時代と考えてよい。文献資料が少なくものが言えなかった先島地域からも、このように考古学的資料を呈示することで、琉球の帝国的側面という新たな視点を浮かび上がらせることができたのではなかろうか。

なお、本報告の詳細については拙文(村木 2021)を参照されたい。

〈引用・参考文献〉

アウエハント,C.2004『HATERUMA－波照間:南琉球の島嶼文化における社会＝宗教的諸相－』(中鉢良護訳)榕樹書林(原著は Ouwehand, C. (1985) Hateruma: Socio-Religious Aspects of a South-Ryukyuan Island Culture. Leiden: E. J. Brill)

荒木和憲2021「古琉球期王権論－支配理念と「周縁」諸島－」『国立歴史民俗博物館研究報告』226

池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』226

石垣市教育委員会1983『ビロースク遺跡　沖縄県石垣市新川・ビロースクの遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書6

石垣市教育委員会1984『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書7

石垣市教育委員会2000『石垣島の岩陰遺跡－沖縄県石垣市内岩陰遺跡分布調査報告書－』石垣市文化財調査報告書25

石垣市教育委員会2020『フルスト原遺跡－史跡整備に伴う発掘調査報告書－』石垣市文化財調査報告書38

沖縄県教育委員会1990a『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅱ)－宮古諸島－』沖縄県文化財調査報告書94

沖縄県教育委員会1990b『新里村遺跡』沖縄県文化財調査報告書97
沖縄県教育委員会1991『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書98
沖縄県教育委員会1994『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅲ)－八重山諸島－』沖縄県文化財調査報告書113
小野正敏1999「密林に隠された中世八重山の村」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
小野正敏2001「沖縄先島地域における発掘遺構と民家にみる掘立柱建物の問題」『埋もれた中近世の住まい』同成社
小野正敏2010「先島の集落」『沖縄県史』各論編3 古琉球
小野正敏2020「八重山のグスク時代－集落遺跡からの視線－」『遺跡から見た琉球列島のグスク時代』資料集
木下尚子編2009『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室
金武正紀1999「再発見された八重山の古村落」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
久貝弥嗣2014「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」『南島考古』33
久貝弥嗣編2018『伝説の争乱・与那覇原軍－宮古島の13世紀から15世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究－』(代表者:久貝弥嗣)平成29年度おきなわ銀行ふるさと振興基金助成研究
国立歴史民俗博物館2021『海の帝国琉球－八重山・宮古・奄美からみた中世－』特集展示図録
下地傑1999「発掘された村・石垣島フルストバル村」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
仲盛敦1999「「花城村跡遺跡発掘調査の概要」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
平良市教育委員会1983『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』
村井章介2011「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」『琉球からみた世界史』山川出版社
村木二郎2021「先島の集落遺跡からみた琉球の帝国的様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』226
村木二郎編2021『中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告226
本村麻里衣2007「宮古諸島における石積みで囲まれた中世相当期(グスク時代)の遺跡」『廣友会誌』3
山本正昭2004「沖縄県池間島の廃村遺跡」『考古学ジャーナル』524
山本正昭2019「上比屋山遺跡」『沖縄の名城を歩く』吉川弘文館
与那国町教育委員会1988『与那原遺跡』与那国町文化財調査報告書2

表１　先島の集落遺跡

	島	遺跡	発掘	採集	図	石積	崖	形状	12	13前	13後	14前	14後	15前	15後	16	17	時期	典拠
1	宮古島	大浦多志城跡				○												高腰タイプ	沖縄県教委1990a・久貝2014
2		オイオキ原			○	○	○	細胞状											沖縄県教委1990a
3		石原城			○	○	○	石囲？											沖縄県教委1990a
4		西銘城跡			○	○	○	石囲										高腰タイプ	沖縄県教委1990a・久貝2014
5		サガーニ			○	○		石囲											沖縄県教委1990a
6		牧の頂			○	○		石囲											沖縄県教委1990a
7		高腰城跡	○		○	○	○	石囲										高腰タイプ	城辺町教委1989・久貝2014
8		野城	○				○											高腰タイプ	沖縄県教委1990a・久貝2014
9		箕島	○		○	○	○	細胞状										14～15世紀	沖縄県教委1990a
10		上比屋山	○		○	○		細胞状										14～15世紀	沖縄県教委1990a・山本2019
11		手真嘉城跡			○	○		方形石囲											沖縄県教委1990a
12		久場嘉城跡			○	○		方形石囲										高腰タイプ	本村2007・久貝2014
13		大嶽城跡				○	○	石囲？										高腰タイプ	沖縄県教委1990a・久貝2014
14		喜佐真御嶽			○	○	○	石囲											沖縄県教委1990a
15		ミヌズマ	○		○													高腰タイプ	久貝2014
16		住屋	○		○														平良市教委1983
17	池間島	上原			○	○	○	細胞状										14～16世紀	山本2004
18	石垣島	吉野				○	○											第三期	沖縄県教委1994
19		富野	○			○												14～16世紀	石垣市教委2000
20		ウイズ		○		○	○											第三期	沖縄県教委1994
21		フルスト原	○		○	○	○	細胞状										第三期	石垣市教委1984
22		ビロースク	○			○	○											12～13、14～15世紀	石垣市教委1983
23	竹富島	新里村	○	○	○	○		細胞状										13後半～15前半	沖縄県教委1990b
24		花城村跡	○	○	○	○	○	細胞状										14中～15世紀	仲盛1999
25		ンブフル	○	○		○												14末～15・16世紀	沖縄県教委1994
26		フージャヌクミ		○	○	○		細胞状										第三期	沖縄県教委1994・小野1999
27		カイジ村跡				○												12～16・17世紀	沖縄県教委1994
28	黒島	ウブスク		○		○	○	円形単郭										第三期	沖縄県教委1994
29		ザンドウ			○	○	○	円形単郭										第三期	沖縄県教委1994
30		アラスク		○	○	○	平地	円形単郭										第三期	沖縄県教委1994
31		フカスク		○		○		円形単郭										第三・四期	沖縄県教委1994
32		ヴゥスク				○	平地	円形単郭										第三・四期	沖縄県教委1994
33		クスリチ				○												第三・四期	沖縄県教委1994
34		ウティスク山				○	○	双郭										第三期	沖縄県教委1994
35	小浜島	ユゥンドゥレースク			○	○	○	双郭										第四期	沖縄県教委1994
36	嘉弥真島	嘉弥真				○		遠見台か										第三・四期	沖縄県教委1994
37	新城島	ニシヌブシヌヤー	○		○	○	○	遠見台か										第三期	沖縄県教委1994
38		ポンヤマー				○		遠見台か										第三期	沖縄県教委1994
39		イールウガン				○	○	遠見台か										第四期	沖縄県教委1994
40		アールウガン				○												第四期	沖縄県教委1994
41		ウブドゥムル				○												第三期	沖縄県教委1994
42		マヒヤン村跡				○												第四期	沖縄県教委1994
43	西表島	古見赤石崎		○		？												第三期	沖縄県教委1994
44		高那城跡				○	○	遠見台か										第三期	沖縄県教委1994
45		船浦		○	○	○	○	単郭										第三期	沖縄県教委1994
46		上村	○	○	○	○		細胞状										14中～15世紀末	沖縄県教委1991
47	鳩間島	ナーマヤーヤシキ		○		○												第三期	沖縄県教委1994
48		ブシンヤー				○												第三期？	沖縄県教委1994
49	波照間島	ブリブチ（下田原城跡）			○	○	○	細胞状										第三期	沖縄県教委1994
50		マシュク村跡		○	○	○	○	細胞状										第三期	沖縄県教委1994・小野1999
51		ミシュク村跡	△	○	○	○		細胞状										第三期	沖縄県教委1994
52		ペーミシュク村跡			○	○	○	双郭										第三期	沖縄県教委1994
53		ブシヤー			○	○													小野2020
54	与那国島	与那原	○	○														第三期	与那国町教委1988
55		西真嘉				○												第三期	沖縄県教委1994
56		伝ダンノアジ屋敷				○		遠見台か										第三期	沖縄県教委1994

高腰タイプ：（12 ～ 13 中）13 後～ 15 世紀前半
第三期　　：13 ～ 15 世紀
第四期　　：16 ～ 17 世紀

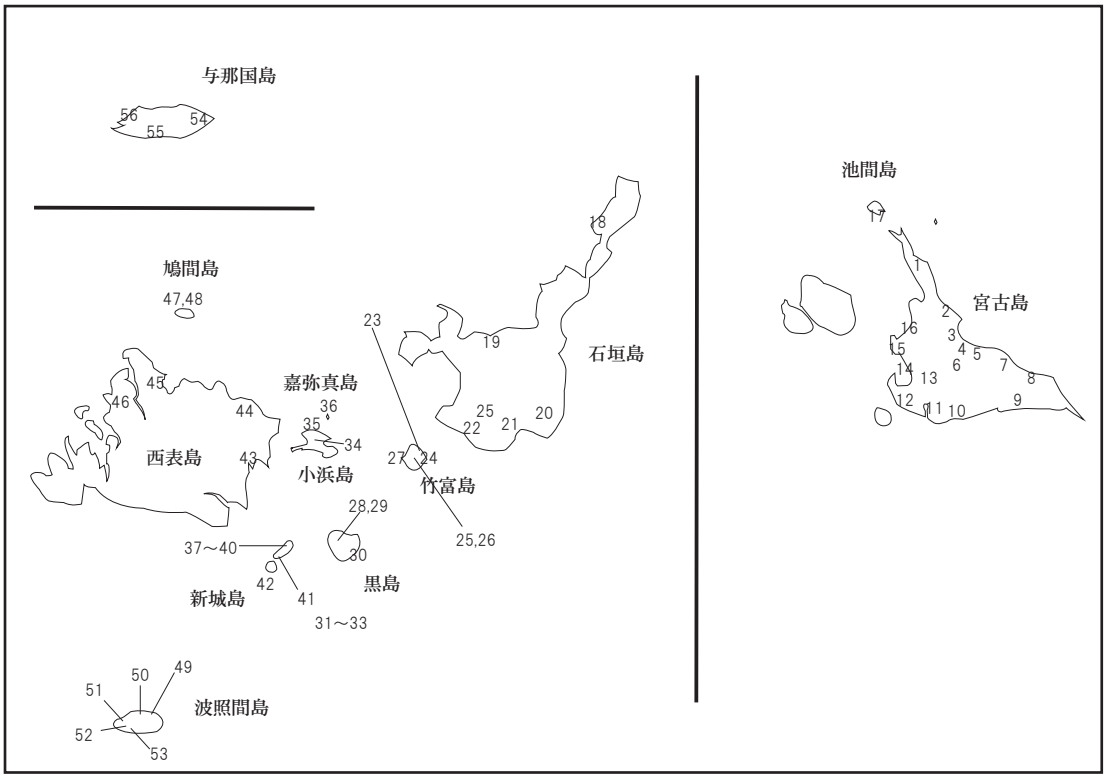


図１　先島の集落遺跡

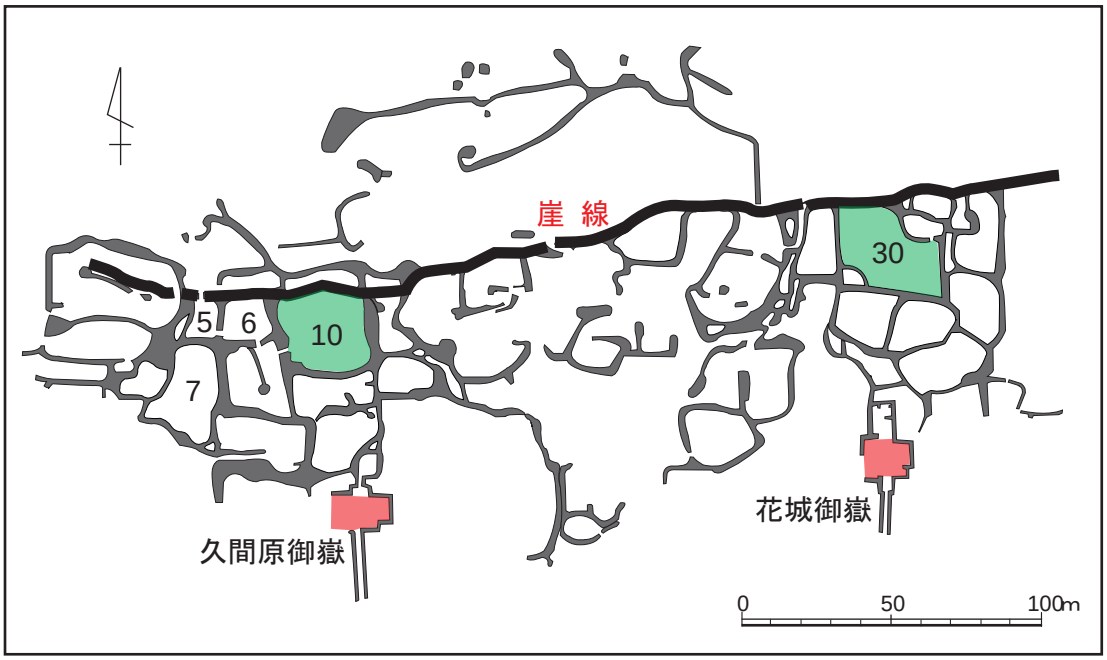


図２　花城村跡遺跡

図 3　新里村遺跡（西）（小野正敏氏作成、国立歴史民俗博物館 2021）

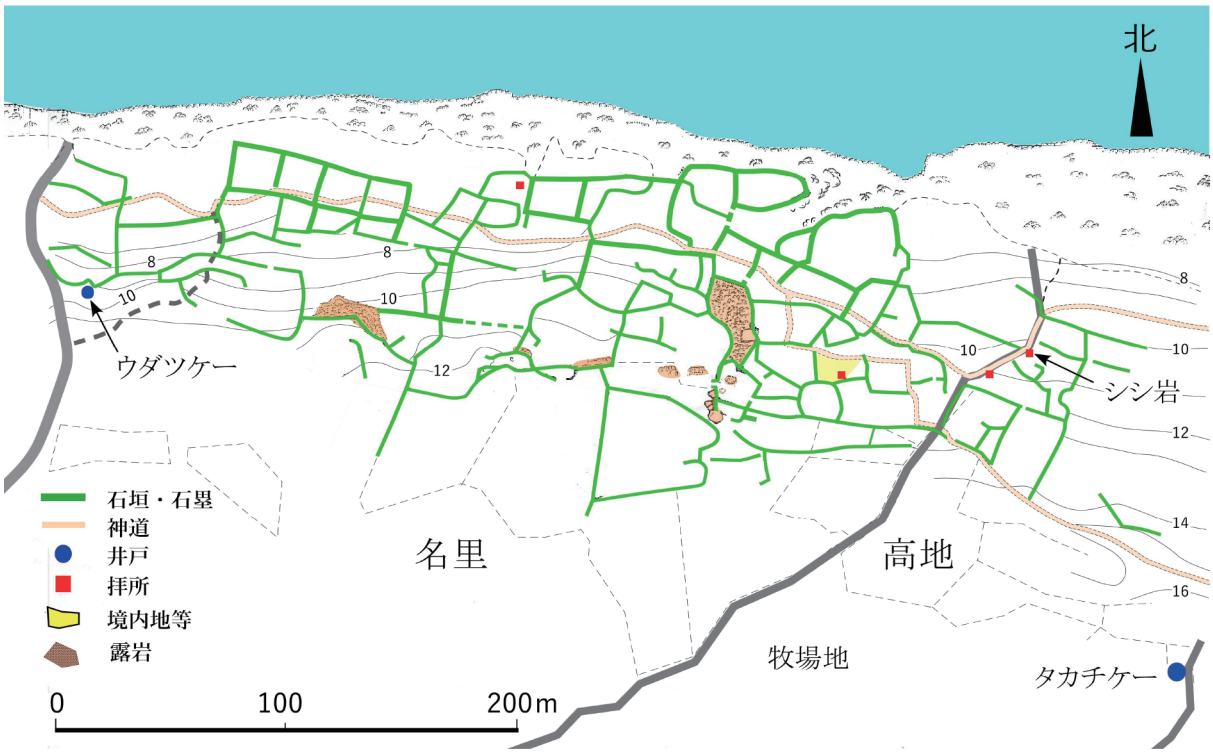


図 4　マシュク村跡遺跡（小野正敏氏作成、国立歴史民俗博物館 2021）

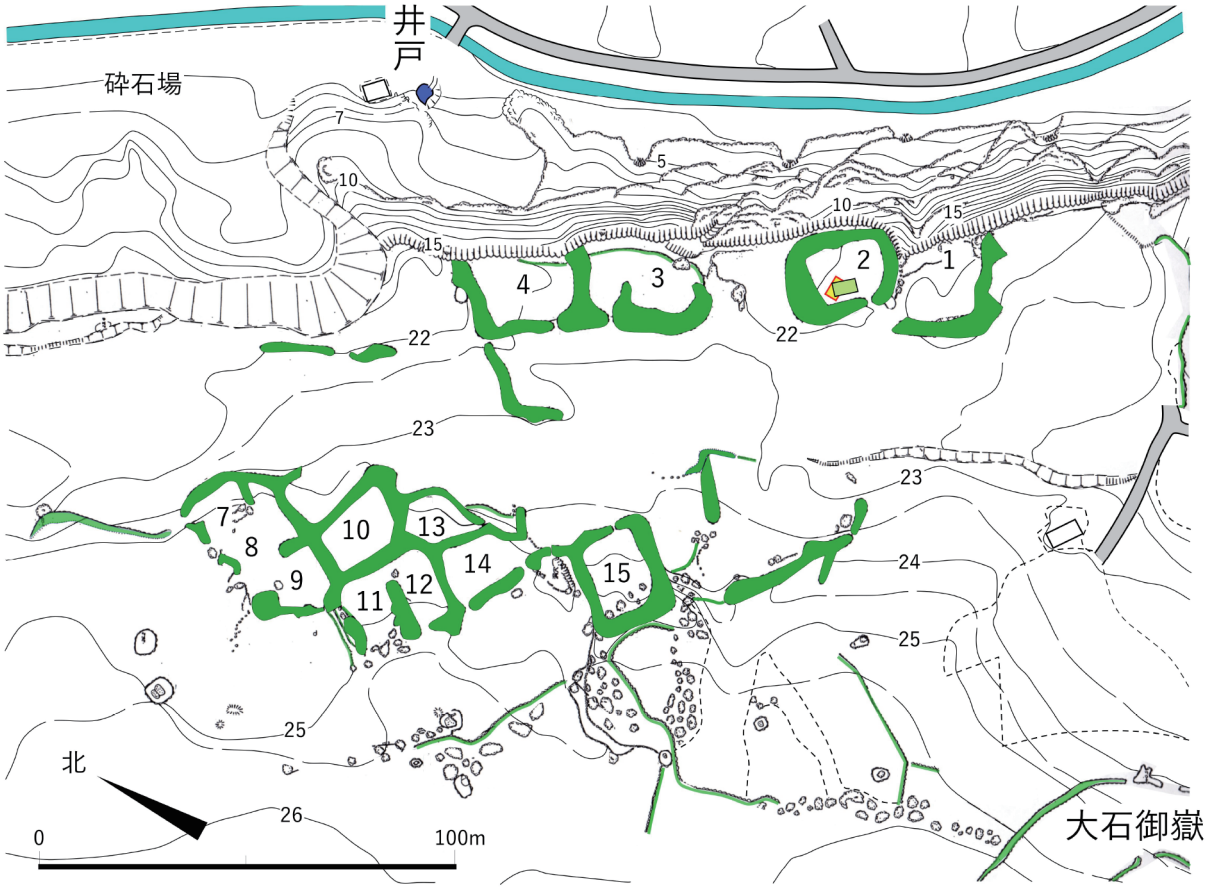


図５　フルスト原遺跡（小野正敏氏作成）

表２　先島・奄美の陶磁器主要組成の変遷

	種類	白磁	白磁	白磁	青磁	白磁	白磁	白磁	青磁	青磁	青磁	青磁	青磁	青磁	染付
	型式	碗Ⅳ	碗Ⅴ	ⅢⅨ	碗B1	浦口	ビロⅡ	ビロⅢ	碗D1	碗D2	碗C2	碗B4	稜花Ⅲ	碗E	
	時期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳb	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ-Ⅵ	Ⅴ-Ⅵ
		11後～13前		13後～14前				14後～15初		15前～15中		15後～16前		15後～16末	
宮古島	住屋	（△）		（△）	（△）	○	○	△	○	◎◎	○	◎◎	◎	◎	◎
	ミヌズマ	○	（△）	（△）	（△）	◎	◎	○	◎◎				（△）		
竹富島	新里村	△	（△）	（△）		○	◎	○	◎	○	（△）		（△）	（△）	
石垣島	フルスト原			（△）	△	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	△
喜界島	大ウフ	◎	○	△	○			○	◎	△	（△）	△	（△）	（△）	（△）
	中増							○	◎	○	○	（△）		（△）	

陶磁器量：（△）わずか、△少し、○ある、◎多い、◎◎非常に多い

江戸遺跡出土貿易陶磁器の数量分析

ー　需 要 の 検 証　ー

堀内 秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）

はじめに

江戸遺跡における貿易陶磁器の出土傾向とその背景については、これまで何度か言及を行ってきた（堀内 2010a、同 2013b など）。そこでその需要を後述するように大きく6つの歴史的背景によると指摘した。しかし、各需要に対して具体例を挙げて説明を行ってきたものの、これまで出土陶磁器全体について客観的な数量を提示し、評価を加えたものではなかった。

筆者を含めた近世貿易陶磁調査・研究グループは、近世江戸で受容された貿易陶磁について明らかにする目的で、過去 2 回にわたって集成を行った（近世貿易陶磁調査研究グループ 2013b、同 2021）（以下、「資料集（1）」、「資料集（2）」と略す）。2021 年 3 月に刊行した資料集（2）では、編集段階の速報として 2020 年 10 月段階のデータを基に出土傾向の呈示を行った（堀内 2021）。

本稿では、特に資料集（1）に掲載された資料について、現時点での研究成果を踏まえて修正を加えたものを基に、これまで報告書に掲載された貿易陶磁器と推定される資料について、数量的分析とこれまで言及した陶磁器需要についての検証を行うものである。

Ⅰ　資料の分析

集成の対象とした資料は、おおむね資料集（1）は 2009 年、資料集（2）は 2015 年までに報告書が刊行された遺跡の内、貿易陶磁器と推定された資料全点であり、各個別資料について個体に関わる器種、装飾、推定生産地、推定生産年代などの情報と出土地とその性格、廃棄要因、廃棄年代などについてデータ化を行ったものである[1)]。

1．出土様相

修正後に、貿易陶磁器と推定された製品は、5,879 例であった[2)]。

①器種

器種が確認・推定された製品は、45 器種、5,800 例であった。器種のバリエーションは、碗、皿（含盤）、鉢、坏、徳利・瓶、急須、薬瓶、散蓮華、ひょうそく、燭台、香炉、水注、壺、酒会壺、甕、水指、茶入、硯屏、合子、花瓶・花生、筆立、水滴、蓋物、段重、火入、灰落とし、土瓶、植木鉢、カップ、ボトル、洗、杯洗、クレイパイプ、インク瓶、擂鉢、箱、天目台、餌入、陶硯、人形、タイル、タンカート、チュリーン、ポピン、歯磨粉容器の 45 器種である。

このうち上位の 10 器種を表 1 としてあげたが、皿（2,608 例、45％）、碗（1,608 例、28%）、坏（647 例、11％）、鉢（327 例、6%）の上位 4 器種は食膳具で、全体の 89%（5,190 例）を占めており、全体的には食膳具に需要の中心があったと言える。

ただ、後述するように年代的に分けてみると、生産時期が明（A～M 期）までの器種と清（S 期）の器種とでは、大きく生産器種が異なっていることが確認される。

②胎質・装飾

胎質が判断できた製品は、5,850 例であった（表 2）。このうち磁器が 5,328 例で大部を占める（91%）。

陶器は516例(9%)であるが、そのうちの約半数の267例がヨーロッパ産の食膳具類(イギリス、オランダ、フランス、ベルギー含)であり、次いで琉球の壺・徳利類が 80 例、東南アジアの壺・甕類や印判手皿類(タイ、ベトナム含)44例、いわゆる華南三彩が30例となっている。これらをみても、特定の製品に偏在していることが窺える。

磁器の装飾は、青花が 3,823 例(磁器の 72%)、色絵 946 例(18%)、青磁 309 例(6%)、白磁 160 例(3%)で、青花の割合が大きいが、年代別にみると、生産時期が明(A～M 期)までの製品 3,945 例中、青花 3,057 例(77%)、色絵 539 例(14%)、青磁 260 例(7%)に対して、清(S 期)の製品 1,120 例中、青花 779 例(70%)、色絵(32%)、青磁 9 例(1%未満)と、青花の割合は有意な差異として捉えられるかは難しいところであるが、S 期では器種と相関した文様のバリエーションは少ない。これに対して色絵と青磁の割合は明らかに異なっている。色絵では、いわゆる景徳鎮の十錦手や徳化の草花文が多くを占めており、規格性の高い製品が出土している。白磁は、徳化製品が 38 例中 31 例で、この中には小片で色絵部分が欠損しているものも含まれている可能性もある。

③推定生産地

生産地が推定できた製品は、5,868 例であった(表 3)。中国、東南アジア、西アジア、ヨーロッパが推定地である。このうち中国製品が最も多く(5,392 例、92%)、貿易陶磁器需要の主体が中国製品であったことが看取される。細かくみると産地として景徳鎮、漳州、徳化、建窯、同安窯、定窯、鈞窯、宜興窯、磁州窯などの他、中国南部と推定されている華南三彩などが確認され、多地域の製品が出土している。東アジア・東南アジアは 187 例(3%)で、琉球、朝鮮 [3]、タイ、ベトナムなどが確認された。主体的な製品は、琉球では徳利や甕、ベトナムでは鉄絵印判花文皿であった。西アジアでは、トルコが確認されたが、これは1点のみであり、日本に向けた商品ではないと考えられる。ヨーロッパは288例(5%)で、オランダ、イギリス、ドイツ、フランス、ベルギーなどの製品が推定されたが、17 世紀以前の製品は、ファイアンス、ライン炻器など少量で、多くは19世紀のプリントウエアである [4]。

量的に 100 例を超える出土をカウントした生産地は、景徳鎮(4,060 例、69%)、漳州(726 例、12%)、龍泉(224 例、4%)、徳化(185 例、3%)で、いずれも中国製品である。この 4 地域の製品は、出土年代、器種などに違いが認められる。景徳鎮は、江戸時代前期、後期とも主体的に出土しており、日本からの需要の大きさが感じられる。この点は、東南アジア地域の状況との違いは顕著である。また、漳州、龍泉の出土は江戸時代前期、徳化の出土は江戸時代後期が主体で、出土する器種も漳州は大型製品を多く含む食膳具類(皿、碗、鉢)、龍泉は大型の食膳具類(皿、鉢)と茶道具類(香炉)が多いのに対して、徳化では、口縁部が外反する碗(小碗)、坏類がほとんどで、後述するように煎茶碗という特定の目的(用途)で受容された(表 4)。

④推定生産年代

推定生産年代は、貿易陶磁器の 9 割以上を占め、生産についての研究が比較的進んでいる中国磁器製品を対象に数量を提示した(表 5)。ここでは、報告書掲載の実測図から細かい年代を推定することは難しいと判断し、大きくA期(16 世紀以前)、M期(明末、17 世紀前半中心)、S期(清朝期、17 世紀後半以降)の 3 区分を行うにとどめた。したがって A 期は、江戸時代以前に生産された製品が、日本あるいは中国で伝世したものと考えられるが、この違いを出土品から明確化することは困難である。

A期と分類したものは、堀内が2013年に行った江戸遺跡出土貿易陶磁器分類以前に出土する製品である(堀内 2013b)。小野正敏氏の染付分類、碗 A～E 群、皿 A～E 群(小野 1982)、大橋康二氏の貿易陶磁分類碗Ⅰ～Ⅳ類、皿イ～ロ類、ニ a～c 類に相当するもの(大橋 2017)、および、上田秀夫氏、森田勉氏の白磁、青磁碗分類にあげられているものである(上田 1982、森田 1982)。また、これまでの研究で、明清の混乱の影響と肥前磁器の国内需要への十全な供給で17世紀後半から18世紀前半に貿易陶磁器の出土も極端に減少するが、この時期を挟んでそれ以前の堀内2013年分類に該当する陶磁器

を M 期の製品、それ以降に出土する製品を S 期の製品とした。実年代で示すと、おおむね A 期が 16 世紀まで、M 期が 17 世紀前半、S 期が 18 世紀以降となる。

年代推定が行えた製品は、5,065 例である。16 世紀以前の A 期に推定された製品が 402 例(8%)、明末期の M 期に推定された製品が 3,543 例(70%)、清朝期の S 期に推定された製品が 1,120 例(22%)であった。A 期つまり江戸時代より前の製品が 1 割近く存在することは貿易陶磁器の特殊性と判断される。国産陶磁器の場合、中世東国で出土する主体的な産地は瀬戸・美濃であるが、大窯期の製品が近世の陶磁器とはほぼ共伴しないことを考えると、貿易陶磁器の所有期間あるいは中国製品の所有に対する相違が考慮される。また、全体の約 4/5 が A 期、または M 期であることから、この段階の貿易陶磁器は、肥前磁器の生産・流通状況との関連性を考慮する必要があり、磁器供給のほとんどが肥前になる 17 世紀後半より前に持ち込まれたものである。したがって、その後の段階で出土する S 期の陶磁器と国産磁器の関係とは異なった解釈視点が必要である。S 期で多い器種は、碗、坏、散蓮華、薬瓶である。このうち碗も端反りの小型製品が多く、多くは坏と同様(煎茶)飲用の器種である。また、散蓮華、薬瓶は A 期、M 期には確認されていない器種で、特定の用途での使用が想起される(表 6)。

⑤出土地

出土地は使用者に関係する情報である。遺跡の土地利用は、居住者のみならず、町割り・屋敷割りが年代によって変化するため特定が難しい場合がある。また、区画溝などへの廃棄、災害時などでは屋敷をまたがっての廃棄など、廃棄行為を行った居住者の判断が困難な場合も多い。ここで示した出土地は、大きく江戸城、大名、旗本、御家人、寺社地、町地、村落に分類し、複数の可能性を排除して一つに特定できたものについて数量呈示を行った。特定できた製品は、4,970 例である(表 7)。最も多く出土している場所は、江戸城、大名、旗本、御家人を含めた武家地で、4,275 例(86%)であり、貿易陶磁器の主体的な消費階層は武家であると判断される。ただし、江戸時代前期と後期と年代的に分けてみると、江戸城、大名、旗本では、A 期、M 期の割合がそれぞれ 93%、79%、58%で多くを占めているのに対して、御家人、町地では、それぞれ 42%、40%と割合が低い(表 8)。また、S 期の割合は、江戸城、大名、旗本がそれぞれ 2%、12%、27%に対して、御家人、町地では、それぞれ 43%、38%と、A 期、M 期と S 期の貿易陶磁器の所有の階層差が認められる。旗本は、江戸城、大名と御家人、町地の中間的な様相となっている。一方、寺社地の様相は、M 期の製品が多く、上位階層的な様相が窺える。

町地が少ないことは単純に所有数が少なかったとも言えるが、これまでに行った調査地の面積などの他に廃棄物処理方法などの異なるバイアスが存在する可能性も考慮する必要があろう。

⑥廃棄年代

集成では、共伴する資料から廃棄年代を推定した。これまで筆者が清朝磁器の出土年代を考えるにあたって使用した国内製品との共伴関係を援用した廃棄年代の推定法である(堀内・坂野 1996 など)。

国内磁器の生産地である肥前、瀬戸・美濃地域では、早くから精力的な研究が行われてきた生産地であり、特に磁器碗・皿などの器種は年代決定のメルクマールとなっている。ここでは国内陶磁器のうち、年代決定の判断材料となる器種や技法(志野、織部、初期伊万里碗皿、高台無釉碗、三角高台碗皿、U 字高台碗(高)、U 字高台碗(低)、半球碗、梅樹文碗、蛇ノ目釉剥ぎ皿(小)、蛇ノ目釉剥ぎ皿(大)、小丸碗、筒形碗、望料碗、小広東碗、肥前広東碗、瀬戸・美濃磁器広東碗、肥前端反碗、瀬戸・美濃端反碗、肥前湯呑碗、瀬戸・美濃湯呑碗、蛇ノ目凹形高台皿(高)、木型打込皿、コバルト・クロム顔料)について、出土した遺構や層一括資料単位で共伴関係の呈示を行った(図 1)。これらは、生産地及び江戸遺跡での研究成果から、その初現をおおむね以下のような年代が与えることができるものである。

17 世紀第 1 四半期－志野、織部

17 世紀第 2 四半期－初期伊万里碗皿、高台無釉碗

17 世紀第 3 四半期－三角高台碗皿

17 世紀第 4 四半期－U 字高台碗（高）、U 字高台碗（低）
18 世紀第 1 四半期－半球碗、梅樹文碗、
18 世紀第 2 四半期－蛇ノ目釉剥ぎ皿（小）、蛇ノ目釉剥ぎ皿（大）
18 世紀第 3 四半期－小丸碗、筒形碗、望料碗
18 世紀第 4 四半期－小広東碗、肥前広東碗
19 世紀第 1 四半期－瀬戸・美濃磁器広東碗、肥前端反碗、瀬戸・美濃端反碗
19 世紀第 2 四半期－肥前湯呑碗、瀬戸・美濃湯呑碗、蛇ノ目凹形高台皿（高）
19 世紀第 3 四半期－木型打込皿
19 世紀第 4 四半期－コバルト・クロム顔料

これら共伴関係より、例えば肥前磁器筒形碗や望料碗は共伴するが、小広東碗や広東碗がないものを 18 世紀第 3 四半期の廃棄として推定した。

上記のような手続きで廃棄年代が推定された製品は、3,461 例であった（表 9）。17 世紀が 1,676 例、18 世紀が 575 例、19 世紀が江戸時代である第 3 四半期までで 990 例であった。ここから年代的には 17 世紀が約半数を占めていることが判る。18 世紀は減少するものの、無くなるといった状態にはない。19 世紀に入ると再び増加している。ただし 19 世紀においても、S 期の製品が最も多く 594 例であった一方、A 期に製品が 34 例、M 期の製品が 198 例と 3 割近くが明以前の製品が確認されており、ここでも貿易陶磁器の長期間所有が想起される。

Ⅱ　都市江戸の貿易陶磁器需要の検証

前章では、出土貿易陶磁器の①器種、②胎質・装飾、③推定生産地、④推定生産年代、⑤出土地、⑥廃棄年代についてアセンブリッジの呈示を行った。ここで看取された傾向は、地域、階層、年代などのおける社会的、経済的、文化的活動と相関していると考えられる。ここではこうした点について確認してみたい。

筆者は、これまでにいくどか江戸遺跡出土の貿易陶磁器について 6 つの需要所在を示した（堀内 2010a、同 2013b など）。提示した資料や内容の詳細は、これらを参照されたいが、ここではこれまでに指摘した需要について再確認を行い、上記数量データとの対比を行いたい。

需要①:肥前磁器普及以前の生活用品として需要
　→碗、皿などの食膳具を中心として器種のバリエーション、質の幅なども大きい。
需要②:上級武士を中心にみられる武家儀礼の道具として需要
　→揃いの磁器皿・鉢・猪口が中心になる。大型品には年代が遡る製品が確認される。
需要③:18 世紀後半以降、煎茶器など文人アイテム、遊興地におけるトレンドとして需要
　→煎茶に関連した飲用器が多い。食膳具、動植物賞翫、喫煙具、文房具等も見られる。
需要④: 茶の湯の中で需要
　→中世末から朝鮮、近世では東南アジア、ヨーロッパ、中国古染付、祥瑞など。
需要⑤:流通容器として、中に入れられているものの需要
　→中国・東南アジア壺、薬瓶など。
需要⑥:その他（特別な入手ルートが想定できるなど）

1．江戸時代前期の出土状況と背景

江戸時代前期に関連する需要様相は、①、②、④、⑤、⑥などである。

需要①・②:貿易陶磁器が単体で出土した場合、その使用法の特定は難しい。多量の食膳具が揃いで出土した千代田区江戸城跡汐見多聞櫓石垣例（江戸城）、同区有楽町一丁目遺跡 070 号遺構例（播磨明石藩）、文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層（加賀藩）、同

中央診療棟地点 L32-1 例(大聖寺藩)(図 2)、新宿区尾張上屋敷跡遺跡 149-3N-5 例(尾張藩)、港区汐留遺跡 6H-073(仙台藩)、同 6I-060(仙台藩)などは、御殿空間内での行われた武家儀礼道具の象徴的な一括例と考えるが、大名屋敷内においても詰人空間と御殿空間、あるいは御殿内においても表、奥、隠居所など使用する規模や目的に応じて多様な所持形態が存在したと考えている(堀内 2016)。

ただし、上記の出土器種、出土年代の呈示で、貿易陶磁器の多くが、上級武家地を中心として出土している点、17 世紀に多く出土している点から勘案するなら、需要①としてあげた生活用品としても階級と相関することが指摘できそうである。

需要④:茶の湯あるいは武家儀礼時の室礼の道具として武家階級で唐物が珍重されていたことは、「君台観左右帳記」などの書からも明らかであるが、江戸期においても、御成に関わる研究(佐藤 1974～86、徳川美術館 2012)や蔵帳研究(木塚 1992、同 2013、堀内 2013a)などからは、大名家では藩の「御道具」として唐物を中心とした道具類を所持していたことが確認できる。ただし、これらは揃いの食膳具とは異なり、基本的には単体で所持している。集成では、青磁の花生、香炉、酒会壷(図 3-1)、硯屏などの出土は、38 例が確認されるが、このうち江戸城と大名が 29 例、旗本が 4 例、御家人 3 例で、御家人の 3 例は同じ遺構からの出土で、推定 1 個体の景徳鎮の鳥形容器で、茶陶とは異なる製品であることで、これらの製品は全て上級武家地から出土している。

需要⑤:この段階で出土している陶磁器で容器と推定される製品は、陶器壷甕類が想定される。ちなみに台湾を中心とした地域で多く確認される安平壷は全く出土していない。S 期と推定される磁器製品を除いた壷甕類は、146 例確認できる。数量の多い製品から琉球の焼締陶器(アラヤチ)が 36 例、景徳鎮磁器壷が 26 例、中国南部のいわゆるトラディスカント壷(図 3-4)が 20 例、ベトナムなど東南アジアの壷が 13 例である。最も多い琉球のアラヤチ壷(図 3-2)は、おそらく泡盛の容器で、徳利(図 3-3)と合わせると 67 例が出土し、コンテナとしては江戸時代を通じて出土している。また、トラディスカント壷は、全て江戸城、大名、旗本地から出土し、年代的にも 1 例を除いて江戸時代前期の出土であった。東南アジアでは、文京区弓町遺跡第 6 地点例(図 3-5)や尾張藩上屋敷跡遺跡例は、肩部に平行沈線間に波状文が施されるもの、また、文京区後楽二丁目南遺跡例(図 3-6)は長胴甕(いわゆる安南水銀壷水指)で、これらはミースェンなどベトナム中部のものである(菊池 1996、同 1997 など)。渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡(図 3-7)、新宿区甲良町遺跡、同神楽坂四丁目遺跡例はいわゆる綜花入と称される製品、文京区東京大学構内遺跡例(図 3-8)は黄白釉の安南水指として伝世品がある。これらを見ると琉球産の壷類を除くと、当初は何かを入れて運んだコンテナとしての用途であったと推定されるが、茶壷や水指として伝世している製品と近似していることから、江戸ではコンテナとしてと言うより茶道具として見立てられて利用されていたと思われる。

需要⑥:特別な入手ルートが想定される例として、役職に関連した例、職種に関連した例などが想定される。職務に関連した例としては、長崎奉行や箱館奉行など海外と直接関わりを有する遠国奉行関連の居住地や職種関連の薬種、医者、特定の寺など中国と関わりが想定できる居住地が該当しよう。特に長崎奉行やその配下が居住していた遺跡から、希少性の高い貿易陶磁器が出土しており、役職との関連が指摘されている(中野 2013)。17 世紀後葉に在任した奉行の与力・同心屋敷であった渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡、文京区弓町遺跡、近年行われた調査では港区旗本土方家屋敷跡遺跡などが該当しよう。渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡では、東南アジアのいわゆる綜花入と称される甕(図 3-7)、徳化の梅花坏(図 4-9)、17 世紀後半の景徳鎮碗、文京区弓町遺跡ではトラディスカント壷(図 3-4)、ベトナムの波状沈線が施された壷(図 3-5)出土している。

2. 江戸時代後期の出土状況と背景

江戸時代後期に関連する需要様相は、②、③、④、⑤、⑥などである。

需要②:武家儀礼で使用する陶磁器は、単体の大型製品と揃いの中・小法量の食膳具を基本とする

が、貿易陶磁器がその主体を占めているのは、17 世紀段階で、肥前磁器の生産と質的上昇によって、肥前磁器に置き換わっていく。こうした揃いの食膳具が多量に出土した一括資料をみると、明暦 3 年(1657)の火災の廃棄である有楽町一丁目例、天和 2 年(1682)の廃棄である文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層や同中央診療棟地点 L32-1 例、天明 2 年(1782)あるいは天明 4 年(1784)の廃棄である港区汐留遺跡 6I-060 例などをみると災害や破損などによって次第に肥前磁器になっていく様子が看取できる。

需要③:本章冒頭で「煎茶に関連した飲用器が多い」と書いたが、個別の製品について、考古学的に実際の使用状況の復元は難しい。実際には口径 8cm 内外の口縁が外反する碗・坏形が多く出土していることによる器形的・法量的な推定しか行えない。当該期の文化的な状況を踏まえての判断となる。ただし、坏に分類された器種では、A 期で 1%未満(2 例)、M 期では 9%(330 例)であるのに対して、S 期では 24%(266 例)と大きい差が看取され、碗と分類されたものも口径 10cm に満たないものも多く、坏と同様のタイプであることからこれらも飲用器として主たる用途が推定されるが、法量的な偏差も今後詰めていきたい。この時期に多い碗・坏類として、景徳鎮の青花草花文や仙芝祝寿文製品、色絵十錦手(図 4-10)、徳化の色絵(図 4-11)がある。

一方、ヨーロッパ製品もこの時期にプリントウエア(硬質陶器)の碗・皿(図 4-15)類を中心に多く出土してくる(180 例、64%)。幕末期から明治初期にかけては、中央区明石町遺跡などの外国人居留地で出土する外国人の活動に伴う道具類の出土が見られる。カップ＆ソーサー、インク瓶、チュリーン、パンチボールなどがあり、それ以外の場所の傾向とは明らかに様相が異なっており、場としての違いは明らかである。

需要④:加賀藩の「蔵帳」である「加賀藩前田家表御納戸御道具目録帳」には幕末期(成立は弘化 3 年:1846)においても前田家が多くの茶道具を「御道具」として保持していることが判り、江戸時代を通じて中国製品が茶陶として高い価値を有していたと判断できる。このことは、18 世紀後半～19 世紀にかけても 34 例の A 期の龍泉窯青磁が出土していることからも推定されるが、出土している器種も花生、水注、酒会壺、香炉、瓶など前期と同様であり、江戸時代後期にも変わらず保持されていたと推定される。

需要⑤:この段階で出土する壺甕類では、江戸時代前期より大きく減少する。琉球のアラヤチ(15 例)、景徳鎮磁器壺(6 例)、いわゆるトラディスカント壺が 1 例、東南アジアの壺が 1 例である。アラヤチは江戸時代後期にも一定量確認されており、泡盛が入ってきていると判断できる。他方、この段階にコンテナとして多く出土しているのは、薬瓶と考えている磁器小瓶である(図 4-12～14)。筆者はかつてこれについて分析を加えたことがあり(堀内 2010b)、この瓶の用途が書かれている文字から薬瓶であることを推定した。だた、文字が書かれていない瓶の用途については明確ではないものの、国内での磁器生産状況を考慮すると瓶のみを中国から輸入するとは考えにくく、これに入る何かしらのものが輸入されていたと考えられる。

需要⑥:前節で触れたが、役職や職種に関連した特別な入手ルートが想定される例である。報告書の刊行年代が新しく集成には漏れてしまったが、近年の調査で確認された清の道光年間(1821-50)銘の製品をはじめ、清朝磁器製品が多く出土している港区旗本土方家屋敷跡遺跡の一括資料などがある(国際文化財株式会社 2021)。

まとめにかえて　－近世貿易陶磁研究の課題－

1983 年の日本貿易陶磁研究会研究集会では、「日本各地の遺跡における陶磁器の組成と機能分担」をテーマに開催され、翌 1984 年に『貿易陶磁研究』No.4 として、成果を発信している(日本貿易陶磁研究会 1984)。陶磁器様相の評価方法としての数量的分析法は、研究会初期から提示されていた方法論であり、現在でも多くの報告書で出土遺物の数量が示されている。近世においても有効性が高いと考

えているが、近世ではより多くの遺物が出土することから資料提示が十分とは言えない。そうした背景には、量的な問題だけでなく、中世のような貿易陶磁器共通の分類が不十分であったことも大きい。今回の集成でも、朝鮮産陶磁器、景徳鎮と福建・広東諸窯の製品との分別などは将来的な課題となっている製品も多い。

個体とは別に、課題を気がついたままに列挙すると、流通の問題、使用法の問題、階層差の問題などが存在しよう。江戸時代以前に生産された A 期の製品が多く含まれることで、これらの流通の問題がある。

上級武家の磁器利用は、基本的に茶道具、文房具、調度品を除くと食膳具は現在的な消耗品と考えるのがおおむね妥当と思われるが、図 4-17 の元青花や同 18 の瑠璃地白花などの使用法は個別にみる必要があるかも知れない。

龍泉窯青磁については、上級武家地への偏在する傾向を指摘したが、古染付、祥瑞(図 4-16)、景徳鎮大皿、漳州窯大皿など、想定される行為と相関しそうな器種の状況を明確にする必要があろう。

〈註〉

(1)集成の際には、資料の実見を行い、確認した上で行うべきであるが、数量が多く、報告書に掲載された実測図、写真、観察表などを参考に行わざるを得なかった。集成する際の取捨選択は、全て筆者(堀内)の責任である。

(2)資料集(1)と(2)で集成された貿易陶磁器は 5,898 例である。ただし、集成した資料には複数枚出土しているものも多数あり、その報告方法は多様である。今回は、実測図や写真図版として掲載されている数で算出している。

(3)朝鮮産陶器については、典型的な製品の特徴は呈示され、出土資料についても議論されてきた。一方、日本において近世期に出土する陶磁器については、一部を除き型式、型式粗列などが明確ではなく、また、いわゆる御本等の存在が分別を困難にしている側面が存在する。そうした背景の中で、集成の過程で何回か勉強会を開催、意見交換を行った中で判断を行った。将来的に分別が明確化した段階で、大きな修正が必要になると考えている。

(4)廃棄年代が、近代にあるものが含まれていることで、一部近代に入ってきたものも含まれている可能性がある。

〈引用・参考文献〉

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

大成可乃　2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)－器種(小器種)の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7　東京大学埋蔵文化財調査室

大橋康二　2017 「日本などにおいて出土の明清の中国磁器(染付を中心に)」『第7回近世陶磁研究会資料　日本における明清の中国磁器』 近世陶磁研究会

小野正敏　1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

菊池誠一　1996 「16・17世紀、日本に渡ったベトナム陶磁の故郷－ベトナム中部トゥアティエンフェ省ミースェン・フックティク窯址群を訪ねて－」『考古学研究』43-1考古学研究会

菊池誠一　1997 「中部ベトナムの陶磁器生産と日本－16～17世紀の日越交流－」『物質文化』63　物質文化研究会

木塚久仁子　1992 『土屋家の茶の湯－土屋蔵帳と大名家の茶－』 土浦市立博物館

木塚久仁子　2013 「常陸土浦藩「土屋蔵帳」の性格　－蔵帳研究の必要性－」『貿易陶磁研究』No.33　日本貿易陶磁研究会

近世貿易陶磁器調査・研究グループ　2013a 『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』

近世貿易陶磁器調査・研究グループ　2013b『近世都市江戸の貿易陶磁器　資料集(1)』
近世貿易陶磁器調査・研究グループ　2021『近世都市江戸の貿易陶磁器　資料集(2)』
国際文化財株式会社　2021『旗本土方家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
佐藤豊三　1974～86「将軍家「御成」について」『金鯱叢書』1～13徳川黎明会
徳川美術館　2012『徳川将軍の御成』
長佐古真也　2013「下級武士における舶載陶磁器の需要状況」『近世都市江戸の貿易陶磁器　調査・研究報告書』近世貿易陶磁調査・研究グループ
長佐古真也　2013「江戸遺跡出土の清朝磁器について」『近世都市江戸の貿易陶磁器　調査・研究報告書』近世貿易陶磁調査・研究グループ
日本貿易陶磁研究会　1984『貿易陶磁研究』No.4　日本貿易陶磁研究会
中野高久　2013「長崎奉行関連遺跡出土遺物と貿易陶磁」『近世都市江戸の貿易陶磁器　調査・研究報告書』近世貿易陶磁調査・研究グループ
根津美術館　1993『南蛮・島物－南海請来の茶陶－』
堀内秀樹・坂野貞子　1996「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁」『東京考古』14　東京考古談話会
堀内秀樹　2010a「都市江戸における貿易陶磁器の消費－江戸の需要とその背景－」『江戸遺跡研究会第23回大会　都市江戸のやきもの』江戸遺跡研究会
堀内秀樹　2010b「近世の薬種需要と唐薬貿易－中国製唐薬瓶の分析から－」『南海を巡る考古学』同成社
堀内秀樹　2013a「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器」『貿易陶磁研究』No.33　日本貿易陶磁研究会
堀内秀樹　2013b「基調報告『近世都市江戸の貿易陶磁器』」『近世都市江戸の貿易陶磁器　調査・研究報告書』近世貿易陶磁調査・研究グループ
堀内秀樹　2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル－加賀藩邸出土陶磁器の消費モデル－」『陶磁器の考古学』第二巻　雄山閣
堀内秀樹　2021「江戸時代の貿易陶磁器需要－江戸の状況を中心として－」『近世国家境界域」「四つの口」における物質流通の比較考古学的研究』2016～2020年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

表１　器種別の出土数

器種	点数
皿	2608
碗	1608
坏	647
鉢	327
壺	143
徳利・瓶	129
散蓮華	60
薬瓶	48
香炉	41
蓋物	25

表２　胎質・装飾別の出土数

胎質	装飾	点数
磁器	青花	3823
	白磁	160
	青磁	309
	瑠璃釉	66
	褐釉	24
	色絵	946
	小計	5328
陶器		516
土器		6
		5850

表３　推定生産地別の出土数

推定生産地	点数
景徳鎮	4057
漳州	726
龍泉	227
徳化	185
琉球	80
福建・広東	66
朝鮮	56
ベトナム	47
オランダ	46
イギリス	34

表４　推定生産地の器種別出土数

推定生産地	器種	点数
景徳鎮	皿	1834
	碗	1185
	坏	561
漳州	皿	506
	碗	120
	鉢	79
徳化	碗	122
	坏	50
	皿	6
龍泉	皿	76
	鉢	46
	香炉	19
ヨーロッパ	皿	108
	碗	72
	坏	14

表５　推定生産年代別の出土数

年代	点数
A	402
M	3543
S	1120
計	5065

表７　出土地別の出土数

出土地	点数
江戸城	270
大名	2741
旗本	824
御家人	440
寺社地	282
町地	386
村	27
計	4970

表６　推定生産年代の器種別出土数

年代	器種	点数
A	皿	188
	碗	67
	鉢	39
M	皿	2063
	碗	815
	坏	330
S	碗	551
	坏	266
	散蓮華	56
	薬瓶	48

表８　出土地の器種別出土数

出土地	年代	点数	割合(%)
江戸城	A	97	36
	M	155	57
	S	5	2
大名	A	181	7
	M	1963	72
	S	339	12
旗本	A	30	4
	M	445	54
	S	219	27
御家人	A	19	5
	M	165	37
	S	191	43
寺社地	A	8	3
	M	181	64
	S	41	15
町地	A	5	1
	M	151	39
	S	148	38

表９　廃棄年代別の出土数

廃棄年代	点数
17-1	69
17-2	231
17-3	856
17-4	520
小計	1676
18-1	207
18-2	96
18-3	91
18-4	181
小計	575
19-1	300
19-2	427
19-3	263
19-4	220
小計	1210
計	3461

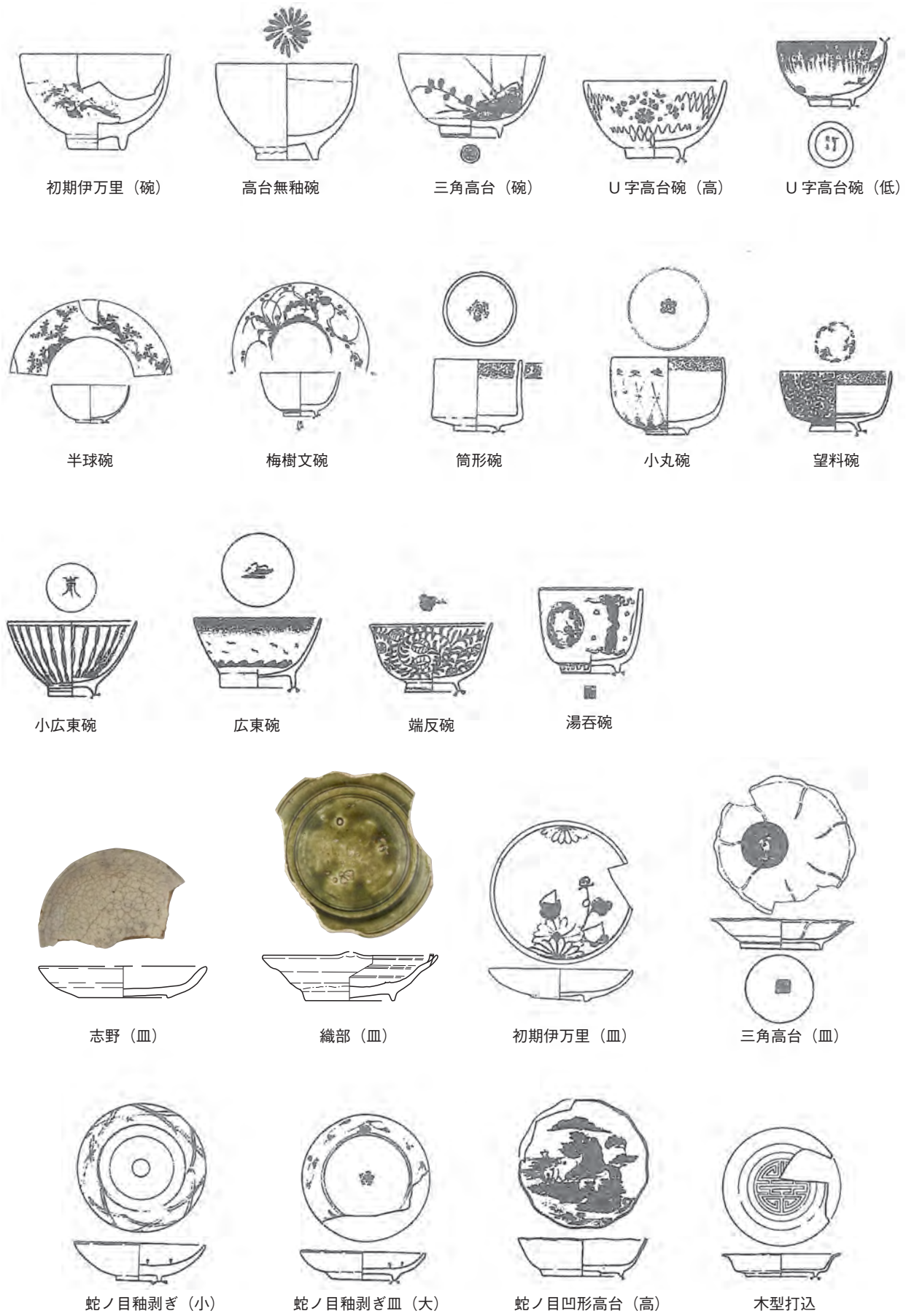

初期伊万里（碗）
高台無釉碗
三角高台（碗）
U 字高台碗（高）
U 字高台碗（低）
半球碗
梅樹文碗
筒形碗
小丸碗
望料碗
小広東碗
広東碗
端反碗
湯呑碗
志野（皿）
織部（皿）
初期伊万里（皿）
三角高台（皿）
蛇ノ目釉剥ぎ（小）
蛇ノ目釉剥ぎ皿（大）
蛇ノ目凹形高台（高）
木型打込

図 1　指標となる小器種

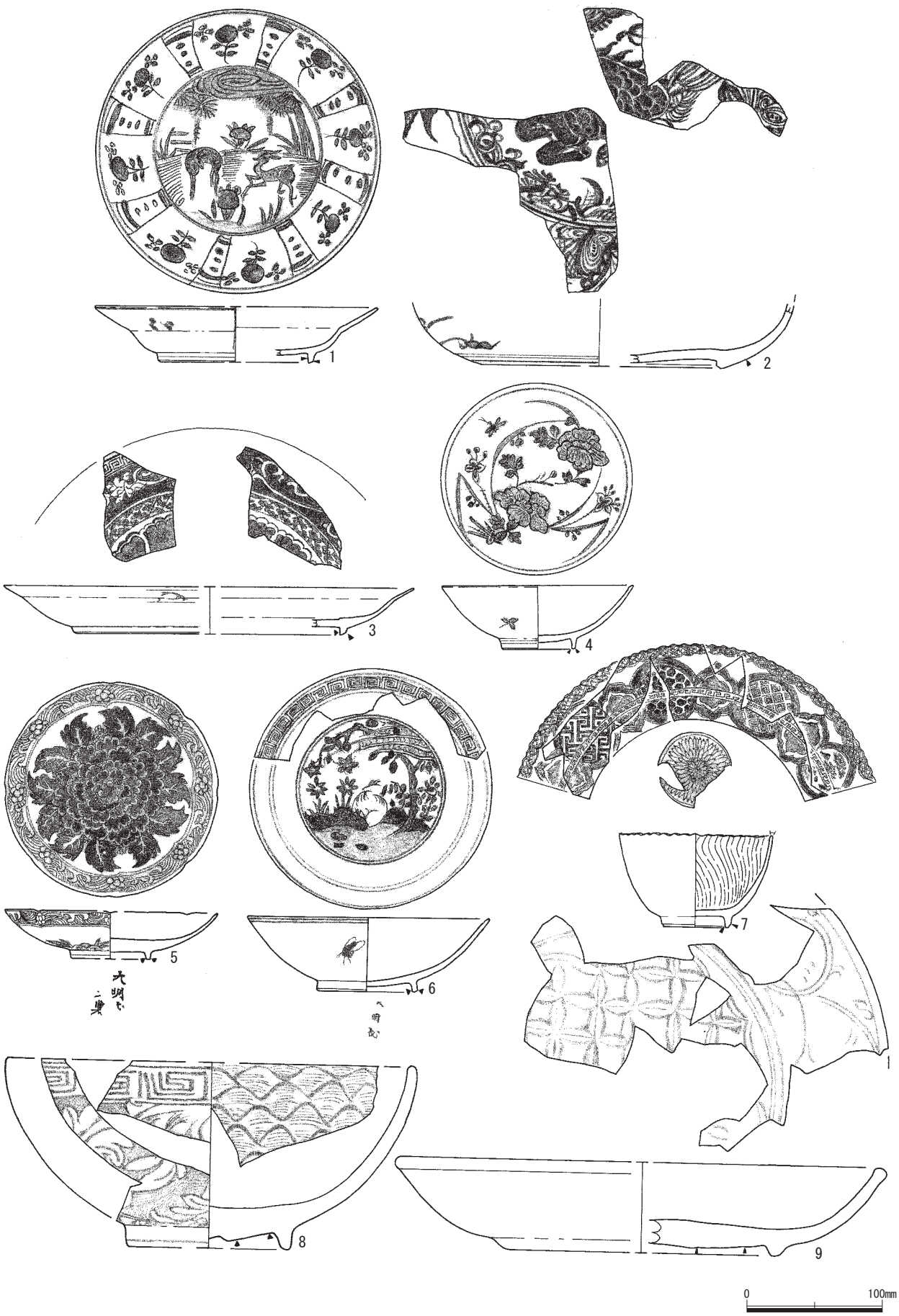


図２　東京大学構内遺跡　医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1 出土貿易陶磁器

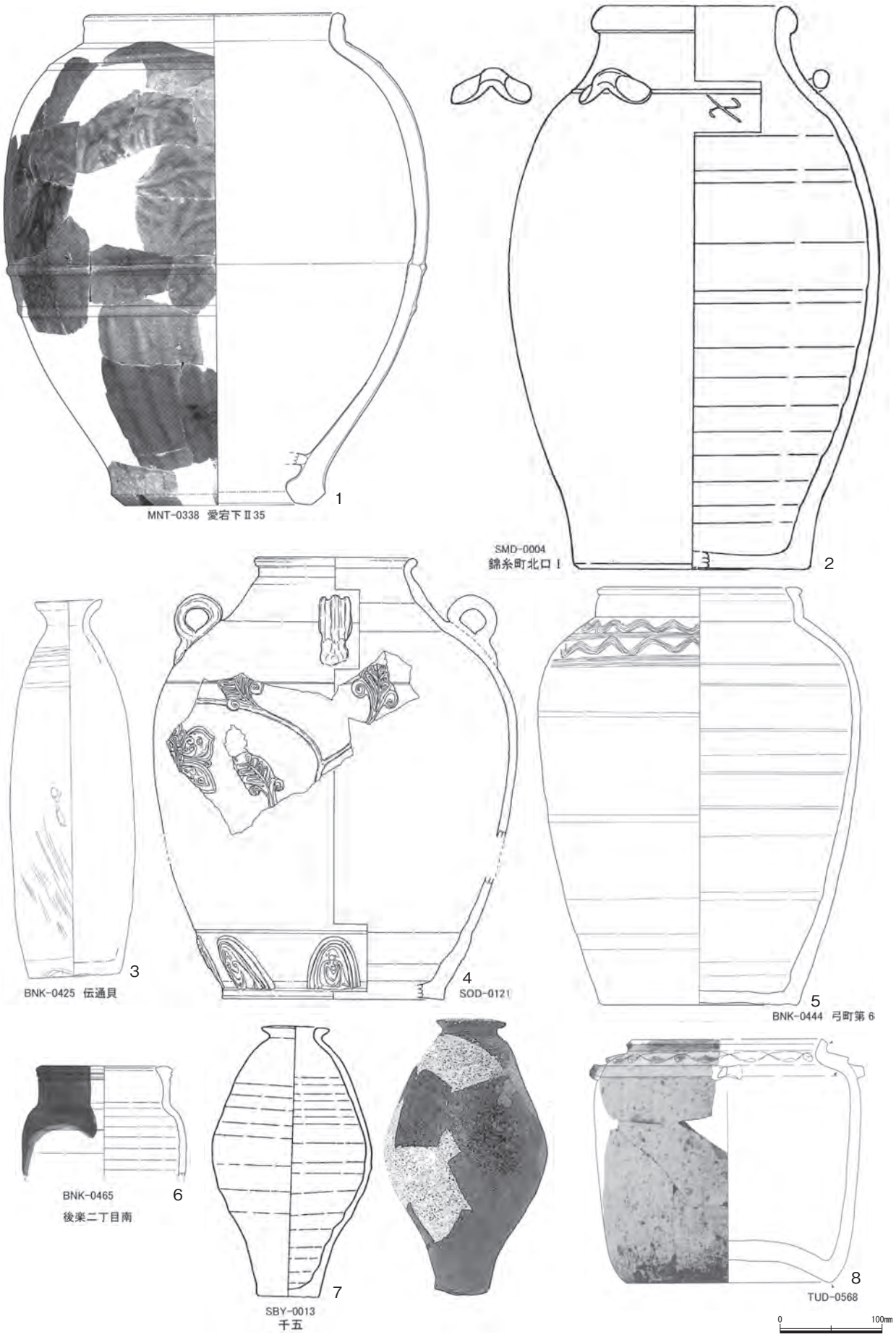


図３　江戸遺跡出土貿易陶磁器（1）

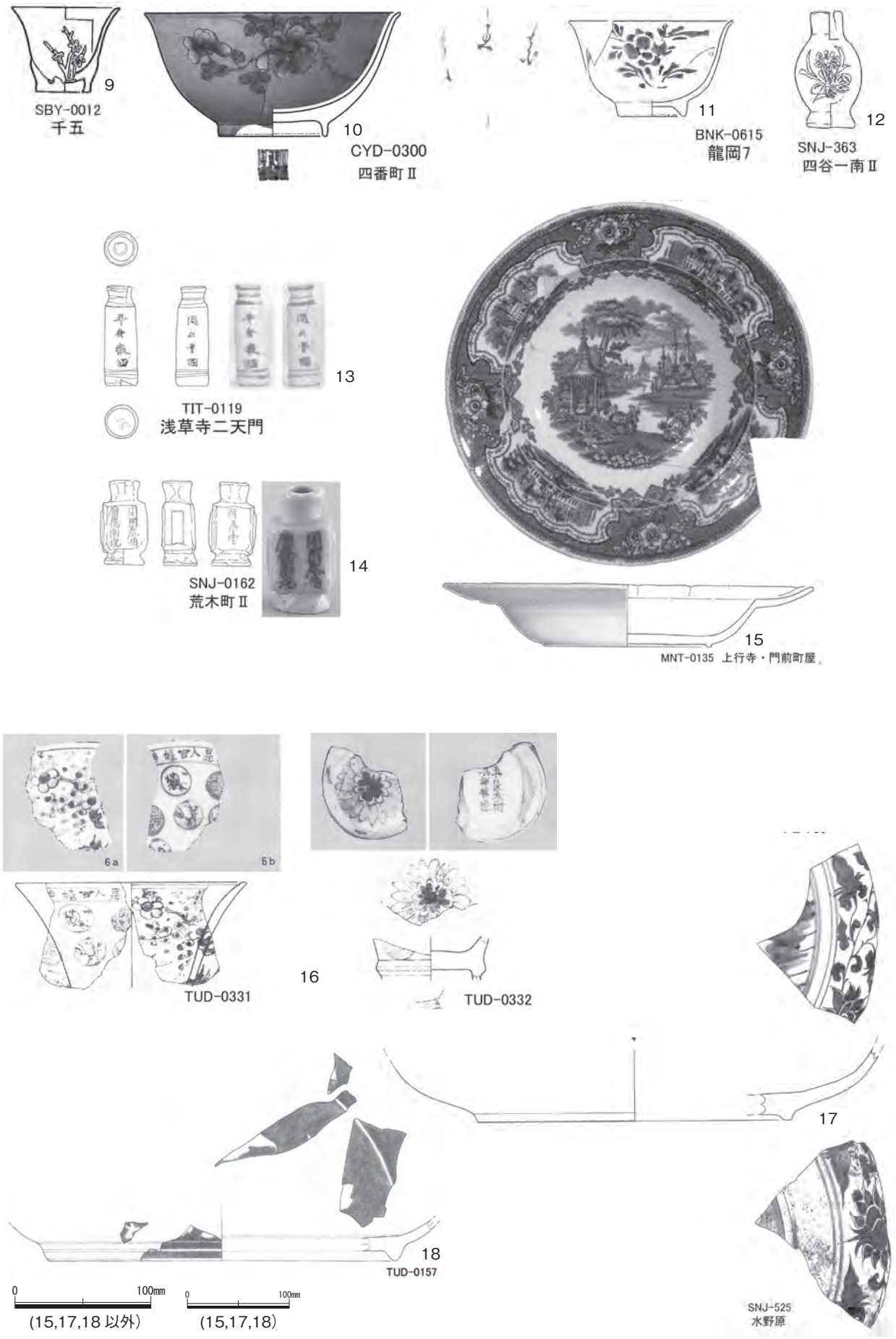


図４　江戸遺跡出土貿易陶磁器（2）

※　本書は、第41回日本貿易陶磁研究会研究集会の発表要旨である。

※　本研究集会は、2021年9月19日にオンラインにて開催した。

※　オンラインに際しての配信は、立教大学・東京大学を会場として行った。

※　本書の編集は日本貿易陶磁研究会事務局において行い、同世話人の佐々木健策が担当した。

※　本書は発表要旨であり、正式な報告は会誌である『貿易陶磁研究』の第41号に掲載する。

※　発表を引き受け、資料をご執筆頂いた発表者各位には、この場を借りて感謝を申し上げる。

第41回日本貿易陶磁研究会研究集会

『　最近の話題の遺跡・注目される研究から　』

発　表　要　旨

発 行 日　令和3年（2021）9月19日

編　集
発　行　日本貿易陶磁研究会

事務局　〒153-8904　東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学埋蔵文化財調査室（堀内秀樹）